

# 檢 非 違 使 の 研 究

A STUDY ON THE “KEBIISHI”

THE HIGH POLICE COMMISSIONER  
IN THE MEDIEVAL JAPAN

II.

大 學 院 學 生

小 川 清 太 郎

S. OGAWA

*Graduate Student*

1 9 3 9

# 目 次

	頁
序 言	1
凡 例	3
第一章 検 非 違 使	5
第 一 検非違使の意義	5
(Ⅰ) 検非違使——(Ⅱ) 諸國検非違使——(Ⅲ) 神郡検非違使	
第 二 検非違使の職掌	9
(Ⅰ) 検非違使の職掌——(Ⅱ) 諸國検非違使の職掌——(Ⅲ) 神郡検非違使の職掌	
第 三 検非違使の資格	13
(Ⅰ) 検非違使の資格——(Ⅱ) 諸國検非違使の資格——(Ⅲ) 神郡検非違使の資格	
第 四 検非違使の地位	17
(Ⅰ) 検非違使の地位——(Ⅱ) 諸國検非違使の地位——(Ⅲ) 神郡検非違使の地位	
第 五 検非違使の特質	21
(Ⅰ) 検非違使の大寶令官制上の位置——(Ⅱ) 検非違使の常置職化——(Ⅲ) 検非違使の官化	
第二章 検 非 違 使 廳	29
第 一 検非違使廳の意義	29
(Ⅰ) 廳政執行 廳務管掌——(Ⅱ) 獨立常置——(Ⅲ) 特別地方行政府	
第 二 検非違使廳の地位	32
(Ⅰ) 長官の地位より觀たる検非違使廳の地位——(Ⅱ) 廳令より觀たる検非違使廳の地位	

	頁
<b>第 三 檢非違使廳と諸官司との比較</b> ……………	35
(Ⅰ) 檢非違使廳と令制官司——(Ⅱ) 檢非違使廳と藏人所——(Ⅲ) 檢非違使廳と勘解由使廳	
<b>第三章 檢非違使の設置</b> ……………	42
<b>第 一 檢非違使の設置</b> ……………	42
(Ⅰ) 檢非違使の創設と史料——(Ⅱ) 檢非違使廳の創設と史料——(Ⅲ) 史料の缺逸——(Ⅳ) 谷森氏説と卑見	
<b>第 二 諸國檢非違使及び神郡檢非違使の設置</b> ……………	57
(Ⅰ) 諸國檢非違使の設置——(Ⅱ) 神郡檢非違使の設置	
<b>第四章 檢非違使の沿革</b> ……………	64
<b>第 一 檢非違使の沿革(其一 檢非違使廳を中心として)</b> ……………	64
(Ⅰ) 檢非違使廳創設時代——(Ⅱ) 檢非違使廳複合制時代——(Ⅲ) 檢非違使廳單獨制時代	
<b>第 二 檢非違使の沿革(其二 政權の推移を中心として)</b> ……………	69
(Ⅰ) 藤原氏執政時代——(Ⅱ) 院政時代——(Ⅲ) 平氏執政時代——(Ⅳ) 幕府執政時代	
<b>第 三 諸國檢非違使及び神郡檢違非使の沿革</b> ……………	82
(Ⅰ) 諸國檢非違使の沿革(其一 王朝時代)——(Ⅱ) 諸國檢非違使の沿革(其二 鎌倉時代)——(Ⅲ) 神郡檢非違使の沿革	
	(以上前卷掲載)
<b>第五章 檢非違使の權限</b> ……………	88
<b>第一節 王朝時代に於ける檢非違使の權限</b> ……………	88
<b>第 一 總 説</b> ……………	88
<b>第 二 司法警察權(檢非違使廳と衛府との關係)</b> ……………	89
(Ⅰ) 衛門府の司法警察權——(Ⅱ) 檢非違使の司法警察權——(Ⅲ) 犯人捜査及び逮捕の方法——(Ⅳ) 司法警察權行使區域	

<b>第 三 糺彈權(檢非違使廳と彈正臺との關係)……………</b>	<b>頁 94</b>
(Ⅰ)彈正臺の糺彈權——(Ⅱ)檢非違使の糺彈權——(Ⅲ)檢非違使の糺 彈權及び司法警察權の併有——(Ⅳ)糺彈に關する檢非違使と辨吏と の確執——(Ⅴ)糺彈權行使區域	
<b>第 四 裁判權(檢非違使廳と刑部省との關係)……………</b>	<b>101</b>
(Ⅰ)盜犯處罰に關する檢非違使の立法的建議——(Ⅱ)檢非違使の死刑 求刑——(Ⅲ)裁判管轄	
<b>第 五 執 行 權……………</b>	<b>107</b>
(Ⅰ)刑の執行——(Ⅱ)囚人の釋放——(Ⅲ)財産沒收——(Ⅳ)贓贓物徴 收——(Ⅴ)租稅徵收	
<b>第 六 行 政 警 察 權……………</b>	<b>118</b>
<b>第二節 鎌倉時代に於ける檢非違使の權限……………</b>	<b>120</b>
<b>第 一 總 說……………</b>	<b>120</b>
(Ⅰ)公・武・寺社の三權鼎立——(Ⅱ)公・武・寺社の各固有法の法域—— (Ⅲ)檢非違使廳と幕府との關係——(Ⅳ)檢非違所と幕府との關係	
<b>第 二 刑事裁判權及び警察權……………</b>	<b>128</b>
(Ⅰ)檢非違使廳と六波羅との管轄——(Ⅱ)檢非違使廳の特別管轄—— (Ⅲ)檢非違使廳の一般管轄	
<b>第 三 民 事 裁 判 權……………</b>	<b>135</b>
(Ⅰ)檢非違使廳の民事裁判沿革——(Ⅱ)土地所有權確認の裁判—— (Ⅲ)土地處分法發令權	
<b>第六章 檢非違使の職制……………</b>	<b>144</b>
<b>第 一 總 說……………</b>	<b>144</b>
<b>第 二 檢非違使の定員數……………</b>	<b>146</b>
<b>第 三 檢非違使の補任……………</b>	<b>147</b>
(Ⅰ)任用資格——(Ⅱ)通常任用法——(Ⅲ)特別任用法——(Ⅳ)檢非違 使の昇進——(Ⅴ)檢非違使補任による位階昇叙	

	頁
第 四 檢非違使の派遣	156
第 五 別當宣と檢非違使廳令	158
(Ⅰ)別當宣——(Ⅱ)檢非違使廳下文——(Ⅲ)檢非違使廳下知狀——	
(Ⅳ)檢非違使移——(Ⅴ)檢非違使廳牒	
第七章 檢非違使廳の組織	166
第 一 檢非違使別當	166
(Ⅰ)資格の一(官位)——(Ⅱ)資格の二(經歷)——(Ⅲ)名稱——(Ⅳ)別當宣(廳宣)——(Ⅴ)別當交替による事務の引繼——(Ⅵ)統計——(Ⅶ)別當逸事	
第 二 檢 非 違 使 佐	178
(Ⅰ)資格——(Ⅱ)廳政廳務の執行——(Ⅲ)佐より別當への昇進	
第 三 檢 非 違 使 尉	180
(Ⅰ)資格——(Ⅱ)名稱——(Ⅲ)叙留——(Ⅳ)昇殿	
第 四 檢 非 違 使 志	184
(Ⅰ)資格の一(道志)——(Ⅱ)資格の二(非成業)	
第 五 檢 非 違 使 府 生	187
第 六 看 督 長	187
第 七 案 主 長	190
第 八 火 長	191
第 九 放 免	192
結 語	196

(以上本卷掲載)

# 檢非違使の研究

(續稿)

小川清太郎

## 第五章 檢非違使の權限

### 第一節 王朝時代に於ける檢非違使の權限

#### 第一 總 說

嵯峨天皇の弘仁年間、各種犯罪の犯人逮捕の如き司法警察を主たる職務として設置せられたる檢非違使は、本來、令の官制に於て、この司法警察權を職權の一として有する衛門府官人が本官兼任のまゝに補せらるゝ職の謂にして、之によつて衛門府の管轄事項の一たる司法警察は檢非違使の管掌する所となつた(註一)。然るに其の後、檢非違使は彈正臺の有する糾彈權、刑部省の有する刑事裁判權、京職の有する訴訟受理權等を逐次に自己の職權中に掌握するに及んでは、遂には是等の令制諸官司の有する他の權限をも掌握し、その有する權限は頗る擴大強化せらるるに至つた。職原抄は之を「朝家此職ヲ置キテ以來、衛府ノ追捕、彈正ノ糾彈、刑部ノ判斷、京職ノ訴訟、併セテ使廳ニ歸ス。」と述べてゐるが(註二)、平安中期以後の檢非違使廳の管轄事項は、司法警察、糾彈、裁判、行刑、贖銅(罰金)徵收等に互り、兼ねて京都市中の行政警察にも關與するに至つた。依つて、以下、檢非違使の職掌を其の權限の方面より見て、之を司法警察權、糾彈權、裁判權、執行權及び行政警察權の五種に大別し、以て、本來、是等の權限を掌握したりし令制の諸官司との關係に就て述べて見たい。

註一 職員令中の所謂衛門府官制とも云ふべき規定には、衛門府官人の職權中に何等司法警察權を認めたるが如き所はなく、宮城の外廓警衛に關する規定が多い。然るに獄令第一條後段には「其衛府糾提罪人。非貫屬京者。皆送刑部省。」(二八五頁)なる規定があり、明かに衛府官人に司法警察權の有することを認めてゐる。尙、公式令義解にも、「依獄令。衛府糾提罪人。非貫屬京者。皆送

刑部。即明貫屬京者、送於京職。」(二一七頁)と規定してゐる。

但檢非違使設置後と雖も、衛府官人は司法警察權を喪失せるものに非ずして、依然、犯人逮捕に従へること、次の事實の示すが如くである。

分遣左右衛門府生。看督等於畿内諸國。逐捕奸盜。(續日本後紀、卷七、承和五年二月十二日庚子條、七四頁)

分遣六衛府。搜捕京中盜竊。(續日本後紀、卷九、承和七年三月六日壬午條、九九頁)

**註二** 朝家置此職以來。衛府追捕。彈正糾彈。刑部判斷。京職訴訟。併歸使廳。(職原鈔、下、六四三頁)

## 第 二 司法警察權(檢非違使廳と衛府との關係)

### (I)衛門府の司法警察權

司法警察權は犯罪鎮壓のために、犯罪を捜査し、犯人を逮捕するの權限である。今の官制に於ては、京都を管轄する司法警察權を有するものは主として衛門府にして、衛門府の官人は近衛兵、皇宮警察官として宮城諸門の警備に當るの外に(註一)、出でゝは京都市中を巡檢し、各種犯罪の搜索及び犯人の逮捕にも従事した(註二)。衛門府の外に近衛府、兵衛府も亦、時として此の司法警察に携つた(註三)。是等の各府を總稱して衛府と云ひ、その官人は何れも帶劔の武官なりしが故に、犯人逮捕の實力を有してゐた而して衛府の逮捕せる犯人は、これが審理及び斷罪の權限を有する刑部省或は京職に移送すべきも、その何れに移送すべきやは犯人の有する本籍により異なり、若し犯人にして京都に本籍を有する者なる時は之を京職に、諸國に本籍を有する者なる時は之を刑部省に、それぞれ區別して移送すべく、犯人の本籍により其の裁判管轄を異にすべきは、獄令の規定する所であつた(註四)。

### (II)檢非違使の司法警察權

檢非違使は通常衛門府の官人が特に檢非違使宣旨を蒙つて補せらるゝ職



なるを以て、檢非違使自身が本來その名の示すが如く、非違の檢察を職掌とせる以上、犯罪の捜査及び犯人の逮捕に従事すべきは當然なるも、承和六年(839)六月の勅によれば、彈正臺の糺彈すべき犯人の逃走せる時は、檢非違使をして逮捕せしむる事を永例となすべき旨が規定せられてゐる(註五)。これ即ち檢非違使の司法警察權を認めたる明白なる根據なるも、この勅により始めて檢非違使に司法警察權が附與せられたるや否やは明かでない。併し之によつて檢非違使が彈正臺の糺彈すべき犯人、即ち彈正臺の糺彈權が發動せられたるにも拘らず、その喚問に應ぜず逃亡せるが如き犯人の存する場合、之を逮捕すべき唯一の司法警察機關となり、他の官司の参加を排斥するに至りしことは、他日、檢非違使が彈正臺の有する糺彈權をも併有するに至る一前提とも見られよう。

### (Ⅲ)犯人の捜査及び逮捕の方法

犯人の逮捕方法は、犯人が京都に在る場合と地方に在る場合とにより異なる。

先づ犯人が京都に在る場合に於て、犯人の潜伏場所が明瞭なる時は、檢非違使自ら輩下を率ゐて其の場所を包圍し(註六)、犯人が家屋内に遁入せると思惟せらるゝ場合には家宅搜索をなす(註七)。又犯人の所在不明なる時は、檢非違使その他の司法警察官(衛府官人)は京中を巡索して犯人の發見に努める(註八)。而して王朝時代の京都は、恰も盜賊の生活の本據地の如き觀を呈し(註九)、強竊盜、傷害事件の頻出は枚舉に暇なき程であるが(註一〇)、是等犯罪發生防止の手段として、個々の犯罪發生後、逐一之が逮捕に従ふの煩を避けんが爲めに、時として京都市中に非常警戒の陣を布き、諸國より京都へ通する交通の要衝を押へ、市中の偶々まで探索して不審の者を捜査し、犯罪の發生を未然に防止せんとする大索(ぬすびとあさり、おほあなぐり、おほあさり)が行はれるに至つた(註一一)。併し、これも後には朝廷の臨時の行事の一として、殆ど形式的に施行せらるゝ様になり、徒らに

先例を墨守するのみにして、大索本來の目的は遂げられざる有様であつた。

次に犯人が地方に在る場合、即ち地方に於ける犯人の逮捕には、その地方に發生せる犯罪に就ての犯人逮捕と、京都に發生せる犯罪に就て、犯人が地方へ逃走せるにより之を逮捕する場合とがある。

地方に於て發生せる犯罪に關する犯人の逮捕は、當然その地方の長官たる國司が之を管掌する。國司は國の檢非違使、押領使、追捕使等の專任司法警察官に命じて犯人を逮捕せしめる。又京都で罪を犯せる犯人が地方へ逃走せる時は、犯人の逃走せると思惟せらるゝ國々へ、太政官より官符を以て犯人の逮捕方を命ずる。この太政官符を受けたる國司は、前同様に國の檢非違使等の專任司法警察官をして、犯人の捜査、逮捕に當らしむるも、交通、通信の不便なりし當時、能くその實績を擧げ得ることの困難なりしことは、想像に難くない(註一<sup>二</sup>)。犯人の逮捕が當然職務上の行爲なるにも拘らず、犯人を逮捕せる檢非違使が莫大なる恩賞に與かるが如きは(註一<sup>三</sup>)、如何に當時、犯人の逮捕が困難なりしかを裏書するものである。

#### (IV) 司法警察權行使區域

檢非違使の有する司法警察權の行使區域は、云ふ迄もなく檢非違使廳の直轄管下なる京都市中なるも、若し犯人が地方に逃走せる場合には、之に追隨して、犯人に對して司法警察權を行使することを得た。

即ち京都に於て罪を犯せる者が地方に逃走せる場合、若し犯人の逃走せると思惟せらるゝ地方が、大和國の如く、京都の近國なる時は、京都より檢非違使を派遣して犯人を逮捕せしめる(註一<sup>四</sup>)。京都よりの近國とは通例大和國にして、近江國の如きは、當時之を遠國と見做せるが如くであつた(註一<sup>五</sup>)。

註一 衛門府。督一人。掌諸門禁衛。出入。禮儀。以時巡檢。及華人。門藉。門榜事。(令義解、卷一、職員令、五三頁)

註二 分遣左右衛門府生。看督等於畿内諸國。逐捕奸盜云々。續日本後紀、卷

七、承和五年二月十二日庚子條・七四頁)

**註三** この實例を例示すれば、次の如くである。

承和七年二月十二日己未。殊令六衛府夜行京城。緣群盜遍起也。(續日本後紀、卷九、九八頁)

承和七年三月六日壬午。分遣六衛府。搜捕京中盜竊。(續日本後紀、卷九、九九頁)

嘉祥二年正月三日壬子。分遣六衛府佐已下。覘捕京中群盜。又令左右近衛各十人。巡檢東西。(續日本後紀、卷二十、二三五頁)

天安元年三月十六日癸丑。遣左右近衛左右兵衛及檢非違使左右馬於東南捕群盜。(文德實錄、卷九、九六頁)

天安二年廿二日乙酉。遣左近衛少將從五位下坂上大宿禰當道。右近衛少將從五位上藤原朝臣有貞等。率左右馬寮官人并近衛。搜捕京中群盜。(文德實錄卷十、一一一頁)

**註四** 其衛府糾捉罪人。非貫屬京者。皆送刑部省。(令義解、卷十、獄令、二八五頁)

**註五** 勅。彈正臺及檢非違使。雖配置各異。而糾彈違犯。彼此一同。但至犯人逃走。竄盜隱遁。彈正之職。不堪追捕。自今以後。緣糾違犯。有可追捕者。臺使相通。遣檢非違使長等。隨事追捕。立爲永例。(續日本後紀、卷八、承和六年六月六日乙卯條、八八頁)

**註六** 今昔、□天臯ノ御代ニ西ノ市ノ藏ニ盜人入ニケリ。盜人藏内ニ籠タル由ヲ聞テ、檢非違使共皆打衛テ捕ヘムト爲ルニ云々。(今昔物語集、卷廿九、西市藏入盜人語第一、九四〇頁)

群盜籠故式部大輔管根朝臣家。檢非違使并諸衛官人舍人等。終夜圍護。比明奉弓矢請降。仍捕縛下獄云々。(貞信公記、承平元年十二月十二日條、續々群書類從、古書保存會本、第五、一七四頁)

**註七** 今日。左右檢非違使自曉圍守故致仕大納言藤原扶袴卿家。是爲搜求駿河掾橋近保也。(中略)件近保之妻與故大納言家元有因緣。近保遂便隱居彼家云々。仍所搜求也云々。(本朝世紀、第六、天慶五年六月卅日壬午條、一〇五頁)

**註八** 左中辨源朝臣道方傳宣。內大臣宣。奉勅。奉咒咀中宮。伊豫守佐伯朝臣公行妻。從者藤原吉道。出納不知姓春正。宜仰檢非違使慥尋在處令捕進。但捕獲之輩。隨其品秩將加勸賞者。

寛弘六年二月廿日

左少史竹田宣理奉

防鴨河使判官右衛門志林重親奉

(政事要略、卷七十、糺彈雜事十、六〇四頁)

遣左右近衛左右兵衛及檢非違使左右馬於京南捕群盜。(文德實錄、卷九、天安元年三月十六日癸丑條、九六頁)

**註九** 今昔物語集によれば、攝津國より「盜セムガ爲ニ京ニ上ケル男」があり(同書、廿九、羅城門登上層見死人盜人語第十八、九七一頁)、宇治拾遺物語には、大太郎と云へる「いみじきぬす人の大將軍」が「京へのぼりて物とりぬべき所あらば入てもとらん」とあれば(同書、卷三、五〇頁)、その狀、察するに足る。

**註一〇** 詳細は谷森饒男「檢非違使ヲ中心トシタル平安時代ノ警察狀態」参照。

**註一一** 諸卿就日本紀講所。此間。大納言伊望卿依召參内。召外記。仰云。京中搜求盜人例如何。申云。近則延長三年也。差文等在別紛失。仍召賑給定文被定之。其後召諸衛左右馬寮等。仰明日可搜求京中盜人之由。不依口次第。任參入遲速仰之。又大臣以下可獻馬之由。被仰下了。諸家之司等同參入。承此由了。(本朝世紀、第三、天慶二年四月二十八日己亥條、三三頁)

卯剋。諸卿參入。被定京中盜人可搜嫌疑索下手者之由。仍先召左右檢非違使等。密々仰可固會坂龍花道大枝山々埒淀等道。次召諸衛仰之。巳剋。東西各分手率隨兵隨差文罷出。搜索京中。又有勅。藏人所小舍人左右近番長已下等搜求宮中司々。申剋。使々申返事。京條宮中無殊事。又外記於春華門前。左右并大臣已下諸家馬等死行諸衛了。條里差文手々次第委見記。(本朝世紀、第二、天慶二年四月二十九日庚子條、三三頁)

**註一二** 寛仁元年六月廿七日夜、時の攝政藤原道長の邸宅より砂金千三百餘兩を竊取せる犯人が、同年七月廿日、播磨國にて逮捕せられたるが如きは、犯人逮捕の比較的早い方である。これも被害者が攝政家なればこそであらう。

播磨國捕進前攝政家砂金盜人。去月廿七日夜。入彼家倉町。盜取砂金千三百餘兩。銀等。隨身件砂金等。(日本紀略、後篇十三、寛仁元年七年廿日丙辰條、二四四頁)

**註一三** 延喜四年六月十九日。左大臣奏。檢非違使等。捕進群盜。大尉已下府生以上給絹。看督長給布也。(西宮記、卷十七、臨時五、四一〇頁)

寛弘六年二月廿日宣旨。(前略)宜仰檢非違使慥尋在處令捕進。但捕獲之輩。

隨其品秩將加勸賞者。(政事要略、卷七十、糺彈雜事十、六〇四頁)

**註一四** 後一條天皇萬壽二年(1025)五月、大和國へ強盜犯人逮捕のために、檢非違使一行十六名が派遣せられたる時の辭令たる辨官下文は次の如くである。

左辨官下 大和國

應勤行檢非違使供給事

右衛門權大尉藤原顯輔 從三人火長二人

右衛門大尉平時道 從三人火長二人

左右看督長二人 從各一人

右權中納言源朝臣道方宣。奉 勅。爲令追捕強盜。差件等人。宛使發遣如件。國宜承知。依宣行之。仰彼之國依例供給。官符追下。

萬壽二年五月三日

左大史中臣朝臣

(朝野群載、卷十一、二一六頁)

今昔。下野ノ守藤原ノ爲元ト云フ人有ケリ。(中略)十二月ノ晦比ニ其ノ家ニ強盜入ニケリ。(中略)其ノ後宣旨下テ。若シ此ノ盜人捕ヘタラム者ニハ。止事無キ賞ヲ可給シトテ。嗚リ合タルコト无限シ。(中略)而ル間檢非違使左衛門尉平ノ時道承ハリテ尋ネ求ル間。大和國ニ下ルニ。山城ノ國ニ杵ノ杜ト云フ所ノ邊ニ男指會タリ。其ノ男檢非違使ヲ見テ。突居タル氣色ノ恠カリケレバ。其レヲ搦テ奈良坂ニ將行テ。已ハ犯シタル事有メレト云テ只問ケレバ男更ニ犯不仕ズト言爭ケルヲ。責テ問ケレバ云々。(今昔物語集、卷廿九、下野守爲元家入強盜語第八、九五六頁)

**註一五** 惟ふに畿内五箇國たる山城、河内、和泉、攝津、大和の國々を近國と稱し、その他遠國と云へるものか。朝野群載によれば、近江國を遠國となせる由が見えてゐる(延喜廿年三月廿三日辨官下文。同書、卷十一、二一八頁)

### 第 三 糺彈權(檢非違使廳と彈正臺との關係)

#### (1) 彈正臺の糺彈權

糺彈とは官人の害政、庶民の違法行爲(多くは犯罪)等の所謂非違を摘發彈劾して、之に國家の有する刑罰權の發動を刑部省、その他所轄官司に

請求する行爲にして、令の官制に於ては、この糺彈權は彈正臺の有する所なりしが、庶民も亦所謂告言の制度により此の糺彈權を有した。前者を公の糺彈、後者を私の糺彈として之を區別する。

彈正臺の糺彈權は人及び場所に關しては、全國民、全國に互つて行使せられ、身分の貴賤、國の遠近を問はざるものであつたが、併し糺彈權が實際に行使せられたる區域及び對象は、主として京都及び諸國の官衙、國衙に於ける官人にして、一般庶民間の非違の糺彈は、庶民各自が私の糺彈として之を行つた様である。彈正臺が全國の官人に對する監察機關として、その不正害政を糺察彈劾することは、當時の官僚政治の國家に於ては、最も重要な役割を演ずるものであつた。而して彈正臺の糺彈は、非違に關する確證を得れば、太政官を経ずして直ちに之を天皇に奏聞することを得た(註一)。但し、これは五位以上の高級官人に關するものにして、六位以下の下級官人に關しては、各々その所屬の官衙、國衙に移して處分せしめた(註二)。五位以上の高級官人の非違に對しては、太政官を経ずして、直接に彈正臺より天皇へ奏聞し得たるは、彈正臺の地位が太政官と相對立せるが故であり、太政大臣を除くの外は、左右の大臣の非違と雖も彈劾し得たるは(註三)、監察機關が行政機關に對して獨立の地位に立つ所以であつた。

## (II) 檢非違使の糺彈權

檢非違使が彈正臺の糺彈權をも有するに至れるは、いつ頃なるかは判然としない。併し弘仁十一年(820)十二月十一日の宣旨によれば、「檢非違使ノ掌ル所ノ事ハ彈正ト同ジ」と見えてゐるから(註四)、檢非違使の設置後、未だ十年を経ざる中に、既に之に關與せしことは明白であらう。然りとすれば、檢非違使は設置後十年を経ずして、身の本官は太政官下の衛府の一官人に過ぎざるも、それが檢非違使宣旨を蒙ることによつて補せらるる檢非違使が、本官を統轄すべき太政官に相對立する彈正臺の權限をも有するに至れることは、その權勢の急激なる發展に驚かざるを得ない。

弘仁十一年十二月十一日の宣旨により、檢非違使の職掌には彈正臺と同様に糺彈權が認められたが、この宣旨は、後の貞觀十七年（875）撰進の檢非違使式に「使ノ掌ル所、彈正ノ彈ズル事ニ准ジ、並ニ臨時ノ宣旨ニ依リテ之ヲ行フ。」と規定せられ（註五）、彈正臺の糺彈に關する事項は、凡て檢非違使の糺彈にも准用せらるゝに至つたが、その後、彈正臺式には之を「凡ソ新ニ制ヲ立ツル宣旨アラバ、檢非違使ニ告示セヨ。」と規定せられ（註六）、糺彈權行使に就ては、彈正臺と檢非違使とは相互に連絡を取ることになつた。

斯くの如く、糺彈に關しては彈正臺、檢非違使共に相通ずる所があつたが、糺彈權行使の對象に就ては必ずしも同一ではなかつた様である。即ち衣服令に基く禁制色の糺彈に關しては、彈正臺及び檢非違使は共に其の糺彈權を有したが（註七）、その他の場合に於ては、概して彈正臺は有位者の非違、諸官司の枉判害政等を糺彈し、檢非違使は庶民の非違を糺彈した様である。

### （Ⅲ）檢非違使の糺彈權及び司法警察權の併有

彈正臺は糺彈機關なるを以て糺彈權を有するのみにして、被糺彈者の逮捕權は之を有しない。従つて被糺彈者が彈正臺の召喚に應ぜず（註八）、或は逃走せる場合には、衛府の官人或は其の地の兵士をして逮捕せしむるも（註九）、檢非違使も亦、若し其の被糺彈者が召喚に應ぜず、或は逃走せる場合には、彈正臺に准じて、犯人の逮捕を他の機關に委ねべきか。之に關する規定は、承和六年（839）六月六日の勅が之を明かにしてゐる（註一〇）。即ち次の如くである。

勅、彈正臺及び檢非違使ハ、配置各々異ナルト雖モ、而モ違犯ヲ糺彈スルハ、彼此一ニ同ジ。但シ犯人逃走シ、姦盜隱遁スルニ至リテハ彈正ノ職ハ追捕ニ堪エズ。今日ヨリ以後ハ、違犯ヲ糺スニ緣リ、追捕スベキ者有ラバ、臺使相通ジ、檢非違使ヲ遣シ、事ニ隨ヒ追捕セシム。

立テ、永例ト爲サン。

之によれば、彈正臺、檢非違使共に、その糺彈すべき犯人が逃走隱遁せる場合には、凡て檢非違使をして逮捕せしむることゝなれるを以て、犯人逮捕の手續は簡易化されるに至つた。而して此の勅の要旨は、彈正臺式に「凡ソ犯人逃走セバ檢非違使ヲシテ追捕セシム」と規定せられた（註一）。

斯くの如く、既に糺彈權を有する檢非違使が、更に被糺彈者の逮捕權、即ち司法警察權をも併有するに至れることは、從來の如く、彈正臺まづ糺彈し、而して後他官司をして之を逮捕せしむるが如き二重の手續を廢し、自ら糺彈すべき犯人は、自ら直ちに之を逮捕し得ることゝなり、犯人檢舉の實を擧ぐることが著しく効果的となるに至つた。

#### （IV）糺彈に関する檢非違使と辨史との確執

凡そ官司が其の職務に就て天皇の勅命——多くは宣旨の形式を採る——を蒙る場合には、辨史が中間に介在して其の傳宣をなすを必要とし、直接宣旨を拜受することは違法であつた。然るに彈正臺に於ては、これは元來糺彈機關なるが故に、その職務の公正を期するために、その奏聞には辨史の傳宣を必要とせず、直接、勅命を拜受すべきであり、彈正臺式にも「凡ソ臨時ノ別勅ハ辨史ノ傳宣ヲ承クルコトナシ」と規定せられてゐる（註二）。こゝに於て、檢非違使は弘仁十一年十二月十一日の宣旨に法的根據を有する檢非違使式の規定たる「使ノ掌ル所ハ彈正彈事ニ准ジ、並ニ臨時ノ宣旨ニ依リテ之ヲ行フ。」の法條と（註三）、右の彈正臺式の規定との二法條を立論の根據となし、彈正臺の別勅は辨史の傳宣を要せず、且つ又、檢非違使は其の職掌たる糺彈に關しては彈正臺に准ずるものなるを以て、從つて彈正臺に准ずる檢非違使も臨時の別勅に關しては、敢て辨史の傳宣を必要とするものに非ずと解し、直接に宣旨を拜受することゝした。之に對して醍醐天皇の昌泰三年（900）八月、辨史は抗議を提出し、彈正臺が臨時の別勅に就て、辨史の傳宣を承くることを要せざるの規定は、一には彈正



臺の威嚴を保つ爲めに設けたるものである。のみならず彈正臺の職掌は必ずしも糺彈のみを管掌するものではない。檢非違使式に云ふ所の「彈正ニ准ズ」とは、檢非違使が糺彈をなす場合にのみ、彈正に准ずるの謂にして、檢非違使が糺彈以外の職務を執行する場合には、この規定は適用せらるべきものではない。然るに檢非違使は糺彈以外の職務に就ても、彈正に准ずると固執して、敢て辨史の傳宣を承けざるは不當であると論難した。この辨史の提出せる抗議は正論なりしを以て、檢非違使は糺彈に就ては辨史の傳宣を承くることを必要とせざるも、その他の職務に關しては、辨史の傳宣を承くることを要すとの結論を得て、この兩者の確執は解決した（註一四）。

之を按ずるに、檢非違使が糺彈以外の職務（既に此の時分には檢非違使は裁判にも關與せることは後述するが如くである）の奏聞、宣旨の拜受等にも辨史の傳宣を承けざりしは、恐らく辨史の傳宣なる中間的存在のために、之に要する日時を嫌ひ、其の職務執行の敏速圓滿さを失することを恐れたるが故ではあるまいか。手續上に關しては、市中の一介の強盜の處分にすら天皇の裁可を仰がざるを得ざりし時代もある位なれば（註一五）、中間的存在によつて、煩瑣なる手續を経ねばならぬことは、直截簡明なる手續を尙ぶ檢非違使廳の方針としては（註一六）、當然避くべきであつたかも知れぬ。

#### （V）糺彈權行使區域

檢非違使の有する糺彈權の行使區域に就ては、最初は宣旨により京都市中に局限せられてゐたが（註一七）、清和天皇の貞觀十六年(874)以後は、京都近傍の區域をも、その管轄する所となつた。こゝに京都近傍とは山崎、與渡、大井等の地域を云ふ。

最初、京都市中の非違の檢察を果斷に行へる檢非違使の威力は、遂に奸猾の輩をして檢非違使の管轄區域外たる京都近傍の地に隱匿するを餘儀な

くせしめた。この地方は檢非違使の糺彈權竝に司法警察權の及ばざる所なりしを以て、檢非違使は目前に彼等の非行を知り乍らも、管轄外なるの故を以て何等施す術もなく、たゞ拱手扼腕して空しく傍觀せざるを得なかつた。この不満に對する檢非違使の對策は、遂に貞觀十六年十二月廿六日の檢非違使起請となつて具體化せられ、檢非違使は京都近傍の地たる大井、與渡(淀)、山崎等津頭の地域へも糺彈權竝に司法警察權行使の勅裁あらんことを奏請するに至つた。その起請は左の如くである(註一八)。

#### 檢非違使起請

マサニ近京ノ地ノ非違ヲ糺彈スベキ事

謹ンデ案ズルニ、使等舊宣旨ニ依リ、京中ノ非違ヲ准檢セリ。是レニ由ツテ奸猾ノ輩ハ城邊ノ地ヲ好ミ、使等ノ檢察ヲ避クルモ、亦類ニ觸レ、マサニ彈ズベキ事、多ク山崎與渡大井津頭ニ在リ。使等事ニ即キテ那邊ヲ經過スルニ、目ニ見ル所有レドモ、口ニ言フ能ハズ。望請スラク、津頭及ビ近京ノ地ニ非法在リテ、使等ノ看著スル所有ラバ即チ便チ糺彈セン。

而して此の檢非違使起請が勅裁を得たるや否やは明かでないが、この趣旨は檢非違使式にも「近京ノ地及ビ山崎與渡大井等津頭ハ使等非違ヲ糺察スルモノナリ」と規定せられ(註一九)、又、宇多天皇の寛平六年(894)十一月には、宣旨を下して、檢非違使をして毎旬、大井、淀、山崎、大津等の地域に發生する非違を巡察せしめられたるを以て(註二〇)、この檢非違使の起請は容認せられたるものであらう。

註一 凡臺奏彈事者。不經太政官而直奏聞。(延喜式、卷四十一、彈正臺、九〇五頁)

註二 六位以下。並糺移所司推判。(令義解、卷七、公式令、奏彈式、二一九頁)

註三 凡彈正不得彈太政大臣。太政官得彈彈正。其左右大臣彈正。若有非違者。各得互彈。(延喜式、卷四十一、彈正臺、九〇五頁)

註四 又去弘仁十一年十二月十一日宣旨稱。檢非違使所掌之事。與彈正同。臨時

宣旨。亦糾彈之者。(類聚三代格、卷二十、斷罪贖銅事、天長九年七月九日太政官符所收、應納雜色人贖銅事、六四五頁)

**註五** 檢非違使式云。使之所掌。准彈正彈事。竝依臨時宣旨行之。(政事要略、卷六十一、糾彈雜事一、五一八頁)

**註六** 凡新有立制宣旨者。告示檢非違使。(延喜式、卷四十一、彈正臺、九〇八頁)

**註七** 仰檢非違使。自來月一日。可制止火色之由。但以紅花大一斤爲染絹一疋之色。給本樣。及仰彈正臺。(日本紀略、後篇一、延喜十八年三月十九日壬辰條二二頁)

政事要略、卷六十七、糾彈雜事七、男女衣服竝資用雜物、五三九——五七〇頁、參照。

**註八** 凡有非違人。召其本司及管省而彈之。(延喜式、卷四十一、彈正臺、九一四頁)

**註九** 凡犯重應捕而拒捍者。發當處兵捕之。(延喜式、卷四十一、彈正臺、九一六頁)

**註一〇** 勅。彈正臺及檢非違使。雖配置各異。而糾彈違犯。彼此一同。但至犯人逃走。竊盜隱遁。彈正之職。不堪追捕。自今以後。緣糾違犯。有可追捕者。臺使相通。遣檢非違長等。隨事追捕。立爲永例。(續日本後紀、卷八、承和六年六月六日乙卯條、八八頁)

**註一一** 凡犯人逃走令檢非違使追捕。(延喜式、卷四十一、彈正臺、九一六頁)

**註一二** 凡臨時別勅莫承辨史傳宣。(延喜式、卷四十一、彈正臺、九〇八頁)

**註一三** 檢非違使式云。使之所掌。准彈正彈事。竝依臨時宣旨行之。(政事要略、卷六十一、糾彈雜事一、五一八頁)

**註一四** 勘申檢非違使固執。不承辨史傳宣。叶理哉否之由事。

右彈正式云。凡臨時別勅莫承辨史傳宣。又使式云。凡使之所掌。准彈正彈事。竝依臨時宣旨行之者。案此等文。檢非違使之固執。分析兩式之意。何者使式既稱准彈事。臺式非必爲彈事。稱莫承辨史傳宣者。是爲彈正威嚴所制也。以此言之。執而所准。不涉彈事。夫式者。指而言所行。非法附因循之書。何守稱准彈事之式。偏包非彈事之制乎。然則使所固執。其理不缺。

昌泰三年八月十三日 左少史惟宗善經

(政事要略、卷六十一、糾彈雜事一、五三二頁)

**註一五** 上ノ判官藏ヨリ出テ馬ニ乗テ。檢非違使共ノ有ル所ニ打寄テ。此ハ様有ル事也ケリ。暫ク此ノ追捕不可被行ズ。可奏キ事有ト云テ内ヘ參ヌ。(中略)暫ク有テ上ノ判官返リ來テ。此ノ追捕不可被行ズ。速ニ罷リ返レト宣旨有ト云ケレバ。檢非違使共此レヲ聞テ引テ去ニケリ。上ノ判官一人ハ留リテ。(中略)天皇ノ仰セ給ケル事ヲ盜人ニ語ケリ。其ノ時ニ盜人音ヲ放テ哭ク事无限シ。(今昔物語集、卷廿九、西市藏人盜人語第一、九〇四頁。本稿、九二頁、註六、參照)

**註一六** 天曆元年六月廿九日別當宣。(前略)方今政貴簡要云々。(政事要略、卷六十一、糺彈雜事一、五二七頁)

**註一七** 謹案。使等依舊宣旨。准檢京中之非違云々。(三代實錄、卷二十六、貞觀十六年十二月廿六日條、三五五頁)

**註一八** 檢非違使起請。應糺近京之地非違事。謹案。使等依舊宣旨。准檢京中之非違。由是猾獍輩好城邊之地。避使等檢察。亦觸類應彈之事。多在山崎與渡大井津頭。使等卽事。經過那邊。目有所見。口不能言。望請。津頭及近京之地在非法。使等有所看覷。即便糺彈。

(三代實錄、卷二十六、貞觀十六年十二月廿六日庚辰條、三五五頁)

**註一九** 使式云。近京之地及山崎與度大井等津頭。使等糺察非違者。(政事要略、卷六十一、糺彈雜事一、五三一頁)

**註二〇** 右大臣宣。奉 勅。檢非違使每旬巡察大井與度山崎大津等非違者。(政事要略、卷六十一、糺彈雜事一、五三一頁)

#### 第 四 裁判權(檢非違使廳と刑部省との關係)

檢非違使の關與せる裁判は、主として刑事裁判にして、當時之を斷獄と稱した。斷獄とは、獄令に規定せらるゝ犯罪に該當する事實の認定、法令の適用、刑の量定を云ひ、公式令竝に雜令に規定せらるゝ所謂民事の訴訟に對して行はるゝ裁判たる聽訟に相對立するものである。

##### (1) 盜犯處罰に關する檢非違使の立法的建議

令の規定に依れば、裁判は刑部省の管掌する所であつた。弘仁十一年(820)、彈正臺の有する糺彈權を掌握せる檢非違使は、更に弘仁十三年(822)、刑部省の管掌する裁判にも關與するに至つた。即ち盜犯に對する徒役年限

に關して、立法的建議を爲したるに始まる。抑々、弘仁九年(818)の宣旨によれば、盜犯の者は、その罪の輕重を論ぜず悉く之を配役となし、且つ、その徒役年限を一定せざりしを以て、牢獄に於て終身徒役に服する者が少くなかつた(註一)。然し乍ら、賊盜律にも規定せるが如く(註二)、元來、強竊二盜は、その罪質各々異なり、且つ又その贓物の多少によつても罪の輕重に差別あるべきを以て、盜犯の輕重に別なく之を終身徒役に處することは、明かに刑の量定に均衡を缺くものであつた。よつて檢非違使は、盜犯の輕重により徒役年限に差別を設くべき法條の新たに規定せられんことを建議せるに對して、弘仁十三年二月、太政官符により最高徒役年限を十五年となし、以下盜犯の罪質竝に贓物の多少により、それぞれ徒役年限に差別を設くことが規定せらるゝに至つた(註三)。

## (II) 檢非違使の死刑求刑

檢非違使が始めて裁判權を行使せるは、いつ頃からなるかは明かでないが、文德天皇天安元年(857)頃には既に自ら裁判を行へるものゝ如くである(註四)。而して、その斷罪の最も特異なることは、當時既に事實上廢止せられたる極刑を以て臨んだことである。即ち嵯峨天皇弘仁元年(810)九月、藤原仲成が所謂藥子の亂に連坐して、禁所に於て射殺せられて以來、死刑の執行は廢止せられた(註五)。加ふるに佛教熱の興隆と迷信の横行から減刑主義が専ら行はれ、律の刑法によれば當然死罪に該當すべき罪も、常に一等を減じて遠流又は徒役に處することが慣例となつてゐたが、かくの如き慣例は徒らに犯罪者を増加せしむるのみにして、當時、強竊二盜が如何に頻出し、朝廷がその對策に苦心せるかは、大赦令下るとも、盜犯は其の適用を除外せられ、赦免せられざりしことによつても之を窺ふことが出来る(註六)。従つて盜犯の發生を防止せんが爲めには、まづ以て死刑の復活を以て脅威するの外に手段なきものとして、檢非違使は死刑の復活採用を提唱するに至つたのである。然し檢非違使の死罪判決に對する最後の決定權を

有する朝廷に於ては、依然之に反對の態度を持続した。例へば文德天皇天安元年（857）十月、檢非違使奏上して死罪に該當すべき罪を犯せる者二人を誅殺せんことの勅許を請うたが、朝廷は死一等を減じて之を遠流に處すべき旨の勅旨を下した（註七）。又、陽成天皇元慶五年（881）十月、右京の人、宮門有常の有道今出鷹に對する故殺犯、竝に備中國窪屋郡の人、眞髮部成道の大市貞繼に對する故殺犯の事案に對して、檢非違使之を審理して當に斬刑に處すべき旨を判決奏上したが、死一等を減じて之を遠流に處すべきの詔が下つた（註八）。いづれの場合に於ても、檢非違使の死刑執行に關する奏請は容れられなかつたが、朝廷が佛教熱と迷信とに捉はれて、ひたすら減刑主義を固執する中に在つて、檢非違使が極力死刑執行の復活を強調せることは、社會の實情に適應せる刑政を施さんとする檢非違使廳の方針の現れに外ならなかつた。

### （III）裁判管轄

貞觀十二年（870）七月廿七日の別當宣によれば、檢非違使の管轄すべき犯罪は、強竊二盜、殺害、鬪亂、博戲、強姦等に制限せられ、自餘の犯罪は一切その管轄外とした（註九）。蓋し檢非違使が一切の事件を管轄するが如きは、既に律令の規定する聽訴の官が存在する以上、之を無視することゝもなり、且つ又、檢非違使自らも煩瑣に堪へず、特に數種の犯罪に限つて之を管轄することゝしたのである。但し貞觀十七年（875）撰進の檢非違使式によれば、「盜人ハ輕重ヲ論セズ、刑部ニ移スヲ停メ、別當直チニ着欽シ、役所ニ配シテ駈使セシム。」との規定があり（註一〇）、従つて檢非違使は強竊二盜に限り、自己の權限に於て之を糾彈し、之を逮捕し、之を裁判し、且つ是れが刑の執行を行ふ迄の一切を執行することを得たが、その他の殺害以下の諸犯に就ては、單に之を糾彈、逮捕するに止まり、その裁判、行刑は刑部省の權限に屬した。檢非違使が、その逮捕せる殺害以下の犯人を刑部省に移送せるは、次に述べる獄令の衛府の犯人移送の規定と彈正臺

の慣例たる彈例とに基くものである。

檢非違使は司法警察官たるの地位に於て、その逮捕せる犯人を刑部省に移送するの手續は、衛府の犯人移送規定を准用すべきであつた。獄令の定むる衛府の犯人移送の規定は、既述の如く、まづ逮捕せる犯人の本籍によつて、その移送すべき所轄官司を異にした。即ち本籍の京都に在る者は之を京職に移送し、本籍の京都以外即ち諸國に在る者は之を刑部省に移送することになつてゐた（註一一）。この規定は彈正臺にも准用せらるべきものであつた（註一二）。然るに彈正臺は臺式ありと稱して逮捕せる犯人の本籍如何を問はず、その犯人を凡て刑部省にのみ移送してゐた（註一三）。又彈正臺の慣例たる彈例によれば、糾彈すべき官人及び雜色人は、詳細に犯狀を録して（訊問調書作成）、之を刑部省に移送して判決せしむることになつてゐる（註一四）。然るに檢非違使は弘仁十一年十二月十一日の宣旨に基き、その掌る所は彈正に准ずるの故を以て、檢非違使の逮捕せる犯人は、その本籍の如何を問はず、之を刑部省にのみ移送し（註一五）、たゞ諸司諸衛及び諸家の官人以下雜色以上の犯人に限り、その身柄を拘禁して、犯人の所屬する本司に告知した（註一六）。併し檢非違使の管轄する犯罪の種類は、貞觀十二年の別當宣により強竊二盜以下、殺害、鬪亂、博戲、強姦等に制限せられ、且つ又、貞觀十七年の檢非違使式によれば、その中の強竊二盜に關しては、罪の輕重を論ぜず、檢非違使に於て處斷することを得、敢て刑部省に移送することを要せざりしを以て、結局、檢非違使が刑部省に移送せる犯人は、殺害以下の諸犯に係る者であつた。然し檢非違使は、是等の犯人と雖も刑部省に移送するに先立ち、一應之を訊問し、檢非違使の意見を勘奏し得たるものゝ如くである（註一七）。

檢非違使の裁判權行使に基く最も顯著なる實績は、律令の訴訟法が規定する三審の制、誣告反坐の制の兩制度の破棄である。これに就ては拙稿「廳例の研究」に譲る（註一八）。

**註一** 弘仁十三年二月七日太政官符。應定罪人配役年限事。(前略)去弘仁九年宣旨稱。犯盜之人。不論輕重。皆配役所者云々。(中略)使等偏執此旨。未定年限。罪無輕重。命終役所云々。(類聚三代格、卷二十、斷罪贖銅事、六三一頁)

**註二** 凡強盜。不得財徒二年。一尺徒三年。二端加二等。十五端及傷人者絞。殺人者斬。其持仗者雖不得財遠流。十端絞。傷人者斬。

凡竊盜不得財答五十。一尺杖六十。一端加一等。五端徒一年。五端加一等五十端加役流。

(律疏殘篇、賊盜律、第七、日本古代法典本、一〇八——一一〇頁)

**註三** 弘仁十三年二月七日太政官符。應定罪人配役年限事。(前略)自今以後。宜犯徒一年者加半年。犯二年三年者各加一年。杖罪以下。只徒一年。若犯二流者。各役六年。其犯死罪別勅免死十五年爲限。(類聚三代格、卷二十、斷罪贖銅事、六三一頁)

**註四** 群臣奏曰。檢非違使奏言。犯死罪者二人。請誅之。詔減死一等。處之遠流。(文德實錄、卷九、天安元年十月廿七日辛卯條、一〇四頁)

**註五** (前略)是夜。令左近衛將監紀朝臣清成。右近衛將曹住吉朝臣豐繼等。射殺仲成於禁中云々。(日本後紀、卷二十、弘仁元年九月十一日戊申條、八七頁)

(前略)昔嵯峨天皇の御時、右兵衛督仲成を誅せられしより以來、久しく死罪を停めらる。(中略)正しく弘仁元年に仲成を誅せられてより、帝王二十六代年紀三百四十七年、絶えたる死刑を申し行ひけるこそうたてけれ。(保元物語、卷二、爲義最後事、國民文庫刊行會本、五九頁)

源爲義已下被行斬罪。嵯峨天皇以降所不行之刑也。信西之謀也。(百鍊抄、第七、保元元年七月廿九日條、七二頁)

死刑の廢絶せられたる期間は、弘仁元年(810)、藤原仲成が誅せられて以來二十六代の天皇、三百四十七年の年數を経て、保元の亂の結果として、保元元年(1156)、藤原道憲の建議によつて復活せられ、源爲義の斬刑せられる迄である。

**註六** 詔曰。雲行雨施。穹蒼所以宣慈。含垢匿瑕。元各於焉播澤。朕肅承丕構。詢以政塗。大庇生靈。期於寧濟。夫赦令者。本稱姦人之幸。亦有奔馬之喻。朕非不知之。但欲令其悔過自新。變惡遷善。加之特有所急。感事興懷。宣流肆育之恩。式暢作解之典。可大赦天下。自天長十年六月八日昧爽以前。大



辟以下。罪無輕重。已發覺未發覺。已結正未結正。繫囚見徒。咸赦除之。唯犯八虐。故殺謀殺。私鑄錢。強竊二盜。常赦所不原者。不在赦限云々。(續日本後紀、卷二、天長十年六月九日甲子條、一三頁)

この外大赦の詔は承和八年十一月二十日丙辰(續日本後紀、一二四頁)、嘉祥元年六月十三日庚子(續日本後紀、二一三頁)にも下つてゐるが、いづれも、強竊二盜は赦免の限に在らずとされてゐる。

**註七** 群臣奏曰。檢非違使奏言。犯死罪者二人。請誅之。詔減死一等。處之遠流。(文德實錄、卷九、天安元年十月廿七日辛卯條、一〇四頁)

**註八** 太政官奏。左京人宮門有常。故殺有道今出磨。備中國窪屋郡人眞髮部成道。故殺大市貞繼。檢非違使覆案。奏有常等罪當斬刑。詔降死一等。處之遠流。(三代實錄、卷四十、元慶五年十月十六日辛卯條、五〇五頁)

**註九** 貞觀十二年七月廿日。別當宣稱。聽訴之官。各有其職。獨爲愆行。事多擁滯。自今以後。自非強竊二盜及殺害鬪亂博戲強姦等外。一切不可執行者。(政事要略、卷六十一、糾彈雜事一、五二六頁)

**註一〇** 盜人不論輕重。停移刊部。別當直着欽。配役所令監使。(政事要略、卷八十四、糾彈雜事廿四、延長七年九月十九日太政官符、檢非違使應依法反坐誣告人事所收、寛平七年十二月廿二日太政官符、六八九頁)

檢非違使式。盜人不論輕重。停移刑部省。別當直着欽。配役所令監策。(西宮記、卷二十三、臨時十一、五七二頁)

**註一一** 其衛府糾捉罪人。非貫屬京者。謂文云非貫屬京者。即知貫屬者皆送京職皆送刑部省。(令義解、卷十、獄令、二八五頁)

**註一二** 依獄令。衛府糾捉罪人。貫屬京者。皆送刑部。即明貫屬京者。送於京職。其彈正糾移罪人。亦須准此云々。(令義解、卷七、公式令、二二〇頁)

**註一三** 嘉祥二年十二月十六日太政官符。應錄犯罪人貫屬移送事。(前略)今案之犯罪人須依彼本貫。京人送京職。外國人送刑部省。而彈正臺所移送犯人不明其貫屬固稱有臺式云々。(類聚三代格、卷二十、斷罪贖銅事、六三二頁)

**註一四** 嘉祥二年十二月十六日太政官符。應錄犯罪人貫屬移送事。(前略)今案彈例云。彈官人及雜色人者。具錄犯罪移刑部省令斷罪者云々。(類聚三代格、卷二十、斷罪贖銅事、六三二頁)

凡彈官人及雜色人者。具錄犯狀移刑部省令斷罪狀。(延喜式、卷四十一、彈

正臺、九〇六頁)

尙、本文に關係ある嘉祥二年十二月十六日太政官符の全文は次の如くである。

太政官符

應錄犯罪人貫屬移送事

右得刑部省解稱。案公式令奏彈式云。親王及五位以上有犯應須糾劾而未審實者竝據狀勘問不須推拷。委知事由事大者奏彈。訖留臺爲案。非應奏及六位以下。竝糾移所司推判。義解曰。糾移所司推判。謂應判罪之司也。案獄令云。衛府糾捉罪人。非貫屬京者。皆送刑部省。即明貫屬京者。送於京職。今案其彈正糾移罪人亦須准此。故云糾移所司者。今案之犯罪人須依彼本貫。京人送京職。外國人送刑部省。而彈正臺所移送犯人不明其貫屬固稱有臺式。彼此執論既致延引。望請蒙官裁以爲永例者。今案彈例云。彈官人及雜色人者。具錄犯狀移刑部省令斷罪者。右大臣宣。京人之罪依法移京職可令斷。然而彈正臺元來移刑部省行來年久。何輒改悞。仍須仰下彼省據舊令斷者。自今以後記貫屬移之。

嘉祥二年十二月十六日

(類聚三代格、卷二十、斷罪贖銅事、六三二頁)

註一五 文學博士三浦周行「續法制史の研究」五五九頁。

註一六 諸司諸衛及諸家官人以下雜色以上等。若有犯過者。禁其身經本司。(政事要略、卷八十四、糾彈雜事廿四、延長七年九月十九日太政官符、檢非違使應依法反坐誣告人事所收、寛平七年十二月廿二日太政官符、六八八頁)

註一七 今案。強竊盜私鑄錢等。着欽事。檢非違使等。守式文可行也。至于餘罪科者。須進勘奏。被下刑官斷之。仍非別當宜旨之外。只爲提擲不知着欽云々。(西宮記、卷二十三、臨時十一、五七三頁)

今日。檢非違使等於廳勘問犯人之間。犯人一人犯入宮城之間。於陣捕取了。(日本紀略、後篇十四、長元六年正月廿六日癸巳條、二八三頁)

註一八 拙稿「廳例の研究」(早稻田法學、第十六卷所載)四九——五七頁。

## 第 五 執 行 權

檢非違使の掌握せる執行權の主なるものは、強竊二盜及び私鑄錢者(通

貨偽造者)に對する刑の執行、囚人の釋放、私鑄錢者の財産沒收、贓贖物の沒收徵收、滯納租税の強制徵收等である。

### (1) 刑の執行

令の規定する所によれば、刑部省の判決に基く刑の執行(之を行決と云ふ)は、刑部省に隸屬する囚獄司に於て之を行ふ(註一)。然るに強竊二盜の刑の執行に關しては、貞觀十二年七月廿日の別當宣竝に檢非違使式の規定により、檢非違使の管轄する所となり、その罪狀の輕重を問はず、刑部省に移送せずして檢非違使廳に於て判決を下し、且つ刑の執行をなすに至れることは既述の如くである。

次に私鑄錢者即ち通貨偽造者に對する刑の執行は、弘仁十三年二月七日の太政官符によれば、「其ノ私鑄錢ハ首從ヲ論ゼズ鑄錢使ヲシテ終身之ヲ役セシム」と見えて(註二)、私鑄錢者の處分は之を鑄錢司の管轄となし、鑄錢使をして終身徒役に處せしめてゐた。元來、私鑄錢の罪は、律の規定に於て最も重罪に屬する強竊二盜と等しく、常赦に會ふも赦免せられざる重罪であつたが(註三)、右の太政官符によれば、強竊二盜の罪は最高徒役年限を十五年となし、以下罪狀によりて徒役年限に差別を附することになつてゐるに對し(註四)、私鑄錢の罪は主犯從犯の別なく終身徒役である點に於て、私鑄錢の罪は強竊二盜の罪より重罪視せられたることが窺はれる。この私鑄錢者に對する刑の執行權が、いつ頃、何故に檢非違使の管掌する所となれるかに就ては、之を明かに爲し得ないが、貞觀十七年の檢非違使式逸文によれば、「私鑄錢ノ輩ハ鑄錢司ニ送ルヲ停メ着欽ハ盜人ト同ジ」と見え(註五)、檢非違使は逮捕せる私鑄錢者を鑄錢司に移送せず、盜人と同じく檢非違使直ちに之を着欽して配役せしめた。従つて、常赦に會ふも赦されざる大罪たる強竊二盜及び私鑄錢の罪に關して、その糺彈、逮捕、裁判及び刑の執行まで一切を管掌せる檢非違使の權限は、まことに強大なるものであつた。

## (II) 囚人の釋放

檢非違使が繫獄中の囚人釋放に關與するに至つたのは、仁明天皇嘉祥三年（850）三月以後のことである。即ち仁明天皇の御不恤により、名僧等の持咒誓願と共に、獄中の囚人釋放が行はれ、檢非違使をして盜犯以外の囚人を悉く放免せしめられたるに始まる（註六）

凡そ恩赦による囚人の釋放は、平安時代に於ては屢々行はれたる朝廷行事の一つであつた。恩赦に關する規定は律令の條文には見えざるも、恩赦有ることを豫想せる規定は多く見られる（註七）。當時は佞佛と迷信とのために盛に恩赦令が發せられ、主として祥瑞、慶賀、飢饉、疾病流行、天變地異等の事由によつて頻發されたが、恩赦による囚人の釋放は、他日更に是有るを豫想して、却て犯罪を増加せしむるの皮肉なる現象さへ生じ、これが後に至り刑政を弛廢せしむる原因となるに至つた。

恩赦令降下に際しての囚人釋放の手續は、詔勅降下の日に、刑部省は太政官に申告せずして、直ちに囚人を釋放する規定であつたが（註八）、檢非違使が之に關與するに至りてより、檢非違使は恩赦の詔勅降下後、その施行期日以前に囚人を釋放せしむるの慣例が行はれた（註九）。

この囚人釋放の權は、前述の如く、嘉祥三年以後、専ら檢非違使の有する所となつた。天安二年（858）八月、檢非違使が詔勅により囚人を釋放せるは、文徳天皇の御不例に渡らせられたるが故にして（註一〇）、仁和二年（886）十月、檢非違使が囚人中の輕罪及び重罪に係る犯人二十二人を釋放せるは、光孝天皇の御不豫に渡らせられたるが爲めであつた（註一一）。その他檢非違使が囚人の釋放を取扱へる實例は數多い（註一二）。

## (III) 財産沒收

檢非違使は貞觀十七年の檢非違使式に規定せらるゝ如く、私鑄錢者の刑の執行を爲し得たが、更に、その財産沒收をも管掌するに至つた。

弘仁十三年二月七日の太政官符によれば、私鑄錢者の處罰權は鑄錢使の

管掌する所であつたが、檢非違使の私鑄錢者に對する態度は之に慊らず、その處罰の實權を自ら掌握するのみならず、更に私鑄錢者の所有財産まで沒收するに至つた。但し、この私鑄錢者の財産沒收は何等の法的根據なく、全く檢非違使の獨斷的な慣例であつた。併し、いつまでも成文上根據なき慣例として之を行ふことの不満は、清和天皇貞觀十六年（874）十二月の檢非違使起請となつて現れ、私鑄錢者に對する所有財産の沒收を爲し得べきことを檢非違使の權限とし、之を永例となさんことを奏請するに至つた（註一三）。

この檢非違使の起請は、實は檢非違使の近京の地の非違糾彈に關する起請（註一四）と共に奏上せられたるものにして、時の檢非違使別當たる大江音人卿の、檢非違使の權限擴大強化策に因るものであり、檢非違使の獨斷、慣例をして成文化せしめんとするの意圖に出でたるものである。尙、この起請は承認せられて、即日、太政官符を以て公布せられたが（註一五）、翌貞觀十七年撰進の檢非違使式には、之を「私錢ノ輩ハ鑄錢司ニ送ルヲ停メ着欵ハ盜人ト同ジク、資財田宅ヲ沒入セシム。」と載せて（註一六）、私鑄錢者の刑の執行及びその財産沒收を以て、檢非違使の權限に屬すべきことを明示した。

#### （IV）贓贖物徴收

贓物は之を現行法律用語を以て云へば、財産權を侵害すべき犯罪行爲によつて領得せる財物にして、贖物は所謂罰金、科料に相當する。律令の規定する贓贖の意義も殆ど之と同様にして、令義解に「非理ニシテ財ヲ取ルヲ贓ト曰ヒ、金ヲ出シテ罪ニ當ルヲ贖ト曰フ。」とある如くである（註一七）。收納せる贓贖物は衣食住及び獄舎修理の費用に充當せらるゝものにして（註一八）、又、贖物は原則として銅を以て徴收せらるゝを以て之を贖銅と稱するも、銅なき場合は之に相當する價格に准じて錢を徴收せられた（註一九）。

令の規定する所によれば、贓贖物の徴收は刑部省の管轄下に在る贓贖司の掌る所であつたが(註二〇)、平城天皇大同三年(803)三月、この贓贖司が本省たる刑部省に併合せられたる結果(註二一)、その事務は同じく刑部省の管轄下に在る囚獄司の管掌する所となつた。然るに犯罪の續出と贖物の未納が逐年増加することより、之を徴收する贓贖司の官人は、その煩に堪へず、又贖物を負擔すべき者に於ても進んで之を納入するの意志なきが故に、贓贖物の徴收は頗る困難であつた(註二二)。こゝに於て、弘仁十一年(820)十一月廿五日、太政官符を以て雜色人(註二三)の贖物の催收を、執行に實力を有する檢非違使に命ずるに至つた(註二四)。併し檢非違使の職掌は京都市中の巡檢、盜犯の處刑のみならず、その他臨時の事務頻出のため繁多を極め、殊に看督長の如き下級職員は暫暇すら得られぬ有様なりしが故に、嵯峨天皇天長九年(832)七月、檢非違使は贖物徴收に限り、その任に堪へざることを奏上し、一旦その事務取扱は檢非違使の手より、再び刑部省の囚獄司の手に差戻された(註二五)。併し囚獄司は元來牢獄の管理をなすものにして(註二六)、贖物の徴收は本來の職務には非ざるも、獄囚の衣服、糧食、薦席、醫藥を始め、獄舎の修理等牢獄に關する費用は、總て贓贖物を以て充當せるを以て、贓贖物不徴收は直ちに獄舎の維持、獄囚の取扱に多大の支障を來した(註二七)。加ふるに村上天皇天歷年中(947—956)には囚獄司の官舎が顛倒して再建せられず、又、徴收せる贓贖物が盜難に遭つて紛失せる等のことがあつた(註二八)。のみならず、贖物によつて維持せらるゝ獄舎獄囚の費用は、囚獄司の管掌する所なるに拘らず、その獄囚の衣服等は既に檢非違使の掌る所にして、且つ又、贖物を得ても之を檢納する所すら無く、時既に犯人の疑獄決罪の權は刑部省を離れて檢非違使廳に移つてゐた(註二九)。されば、是等の事情を以てすれば、名實相違する所多く、贖物の徴收は檢非違使をして之を擔當せしむべきものであると刑部省は主張せる爲め、天曆四年(950)十月十三日、太政官符を以て再び

贖物の徴収を檢非違使に命ずるに至つた（註三〇）。こゝに於て、延喜刑部式に規定する贖銅錢出納の條文（註三一）は全く空文と化した。

#### （V）租稅徴収

財産沒收、贖銅徴収に執行力の強大なるを示せる檢非違使は、更に租稅徴収にも關與する所があつた。而して財産沒收、贖銅徴収が鑄錢司、刑部省の執行力無きために、檢非違使が其の執行に當れると同様、租稅徴収は、本來その徴収權を有する國司の無力なるが故に、檢非違使之に代れるものである。

村上天皇天曆元年(947)閏七月十六日宣旨によれば（註三二）、五畿内、近江、丹波等の住民は、權門勢家を背景に恃み、その威を藉りて、國司郡司に抗して租稅の納入を拒避するか、或は敢て是れが滯納する者多く、強ひて之を徴収せんとすれば暴行の舉に出づる有様なれば、國司郡司も徒らに租稅の納入拒避滯納を默視するのみ。従つて國政に支障を來すこと甚だしく、遂に朝廷は檢非違使をして、その徴収方を強行せしむるに至つた。檢非違使は國司郡司と異なり、宣旨に基く強制執行官にして、中央政府より派遣する所なれば、執行力強大にして、租稅滯納者は之を厩庫律の「マサニ課稅及ビ官ニ入ル、ノ物ヲ輸スベクシテ、而モ廻避詐匿シテ輸セズ、或ハ巧偽濫惡ナル者ハ、闕ク所ヲ計リ、盜ニ准ジテ論ズ」との規定（註三三）を適用して處分した。

或は又、畿内に於ては無主の品位田を耕作して、而も地子(地租)を納入せざる者多く、之に懲戒を加ふれば暴動を起すにより、拒捍使を派遣して徴収せしめたることあるも其の效なきにより、執行力ある檢非違使一人を以て之に專任せしめ、法に従ひ斷然地租を徴収することゝした（註三四）。

註一 刑部省。卿一人。掌鞠獄。定刑名。決疑讞。良賤名籍。囚禁。債負事。(中略)大判事二人。掌案覆鞠狀。斷定刑名。判訴訟。(令義解、卷一、職員令、四三頁)囚獄司。正一人。掌禁囚罪人。徒役。功程。及配決事。(中略)物部

四十人。掌主當罪人。決罰事。(令義解、卷一、職員令、四五頁)

**註二** (前略)其私鑄錢不論首從令鑄錢使終身役之。(類聚三代格、卷二十、斷罪贖銅事、弘仁十三年二月七日太政官符、應定罪人配役年限事、六三一頁)

**註三** 詔曰。朕有所思。欲施恩澤。宜赦天下。自延曆廿三年十二月廿六日昧爽以前。大辟已下。罪無輕重。皆成赦除。但強竊二盜及私鑄錢。常赦所不免者。不在赦限。敢以赦前事。相告言者。以其罪罪之。普告天下知朕意焉(日本後紀、卷十二、延曆廿三年十二月廿六日丁卯條、三八頁)

**註四** (前略)右大臣宣。奉勅。夫配徒之輩既有年限。至於役使。豈期終身。靜而言之。事涉深刻。但兩京之內犯盜者衆。若不折衷。何將懲肅。自今以後。宜犯徒一年者加半年。犯二年三年者各加一年。杖罪以下只徒一年。若犯二流者各役六年。其犯死罪別勅免死十五年爲限。(類聚三代格、卷二十、斷罪贖銅事、弘仁十三年二月七日太政官符、應罪人配役年限事、六三一頁)

**註五** 私鑄錢之輩。停送鑄錢司者。着欽與盜人同。令沒入資財司宅。(西宮記、卷二十三、臨時十一、五七二頁)

**註六** 此日。御體綿々。事極屬艱。諸名僧等持呪誓願。五輪投地。不暫休息。左右檢非違使獄中人除盜犯之外。悉從放免。(續日本後紀、卷二十、嘉祥三年三月十六日甲午條、二三七頁)

**註七** 一例を舉ぐれば次の如くである。

凡流配人。在道會赦。計行程道限者。不得以赦原云々。(律疏殘篇、名例律、日本古代法典本、四〇頁)

**註八** 凡犯罪會赦及降合免者。竝據赦降出日免罪。(延喜式、卷二十九、刑部省、七二二頁)

凡罪人會赦合放者。省即免之。不可申官。(同上)

**註九** 非常赦詔書下給了。即詔書施行以前。可原免常赦所不免者之由。仰檢非違使云々。(小野宮年中行事、免者事、群書類從、第五輯、二四二頁)

**註一〇** 太政大臣從一位藤原朝臣良房奉勅。詔左右檢非違使。除常赦所不免之外。大辟已下罪人。咸從赦免。雖事觸強竊。而非分明者。同從赦例。(文德實錄、卷十、天安二年八月廿四日壬子條、一二〇頁)

**註一一** 詔左右檢非違使。免輕重罪繫囚廿二人云々。(三代實錄、卷四十九、仁和二年十月六日辛亥條、六一九頁)



註一二 天慶元年四月廿四日。左右獄所囚□□者卅人、殊可免狀仰檢非違使別當。緣地震也。(貞信公記、續々群書類從、古書保存會本、第五冊、一八一頁)

右權佐孝道朝臣以下使官人等。殊仰事由。遣左右獄。令實檢囚人云々。(小右記、長德二年六月七日丙子條、第一冊、一一八頁)

今日。檢非違使等爲免囚向獄門。而西獄囚等兼存可有赦之由。皆悉將出近邊之少屋。(本朝世紀、第卅五、久安五年三月廿日壬寅條、六四二頁)

註一三 檢非違使起請

應沒私鑄錢者田宅資財事

謹案。法條中無可沒入私鑄錢者財物。而使等先例。或沒其舍宅資財。既非法意。亦無宣旨。論之政理。誠難遵行。望請處分。將爲永例。

(三代實錄、卷二十七、貞觀十六年十二月廿六日庚辰條、三五五頁)

註一四 本稿一〇一頁、註一八、參照。

註一五 太政官符

應沒私鑄錢者田宅資財事

右檢非違使起請稱。謹案法條。無可沒入私鑄錢者財物。而使等至令沒其舍宅資財。雖非法意。行來成例。望請編之朝章。嚴遏其姦者。右大臣宣。奉勅依請。

貞觀十六年十二月廿六日

(類聚三代格、卷二十、斷罪贖銅事、六四六頁)

註一六 私錢之輩。停送鑄錢司者。着欽與盜人同。令沒入資財田宅。(西宮記、卷二十三、臨時十一、成勘文事、五七二頁)

註一七 贓贖。謂非理取財曰贓。出金當罪曰贖。(令義解、卷一、職員令、四四頁)

註一八 其諸國贖物。即入當司。以充修理獄舍等也。(令義解、卷一、職員令、四四頁)

凡獄囚應給衣糧薦席醫藥。及修理獄舍之類。用贓贖物者云々。(延喜式、卷二十九、刑部省、七二三頁)

註一九 凡贖罪無銅。准價徵錢。(延喜式、卷二十九、刑部省、七二四頁)

註二〇 贓贖司。正一人。掌簿斂。配沒。贓贖。閑遺雜物事。(令義解、卷一、職員令、四四頁)

註二一 平城天皇大同三年正月壬寅。詔曰云々。贓贖司併刑部省。刑部解部宜從

省廢。(類聚國史、卷一〇七、職官十二、刑部省、六八頁)

**註二二** (前略)今犯罪之輩。相結不絕。贓贖未納。逐年彌多。追徵之吏。徒疲催勘。免贖之人。無心進納。既押前斷。不畏後科云々。(類聚三代格、卷二十、斷罪贖銅事、弘仁十一年十一月廿五日太政官符、應移式部省抑未輸贖銅諸國朝集使返抄移大藏省抑留祿位季祿事、六四一頁)

**註二三** 雜色人は良民階級の中、貴族、士族、平民に次いで最下位に屬する階級であり、官司に隸屬して、課役に代へて特定の勞役を提供し、又は勞役の結果得たる物を官に納付するの義務を負担した。(法學博士瀧川政次郎氏「日本社會史」九七——一四頁)

**註二四** 太政官符

應移式部省抑未輸贖銅諸國朝集使返抄移大藏省折留祿位季祿事。右得刑部省解稱。謹案獄令云。凡贖死刑。限八十日。流六十日。徒五十日。杖四十日。笞卅日。若無故過限不輸者。會赦不免。雖有披訴據理不移前斷者。亦不在免限者。今犯罪之輩相續不絕。贓贖未納。逐年彌多。追徵之吏。徒疲催勘。免贖之人。無心進納。既押前斷。不畏後科。望請左京官人抑留位祿季祿。雜色人等令檢非違使催徵。在外諸人抑留朝集使返抄。令濟其事。謹請 官裁者。大納言正三位兼行左近衛大將陸奥出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣。依請。宜令刑部省移式部。大藏等省。其祿物者。令大藏省准贖銅數。使即抑留充刑部省。具應抑留返抄。諸國及犯罪官人並贖銅數。依件移送。又下宜旨檢非違使畢。亦宜同移之。

弘仁十一年十一月廿五日

(類聚三代格、卷二十、斷罪贖銅事、六四一頁。日本逸史、卷二十八、二五一頁)

**註二五** 太政官符

應納雜色人贖銅事

右太政官去弘仁十一年十一月廿五日下午刑部省符稱。大納言正三位兼行左近衛大將陸奥出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣。雜色人贖物。可令檢非違使催徵之宜旨。下彼使畢。宜移之者。今得使解稱。使所行之事。非唯巡檢京中。拷決犯盜。臨時勘事。觸類繁多。又去弘仁十一年十二月十一日宣旨稱。檢非違使所掌之事。與彈正同。臨時宜旨。亦糾彈之者。加以看督長左右各二人。差科非

一。無有暫暇。今預徵贖物。誰用濟使事。謹請。 官裁者。大納言正三位兼行左近衛大將民部卿清原真人夏野宣。宜停隸檢非違使。同亦實錄申官。隨即下知本貫令徵納。

天長九年七月九日

(類聚三代格、卷二十、斷罪贖銅事、六四五頁。日本逸史、卷四十、三七二頁。政事要略、卷八十二、糾彈雜事廿二、六六二頁)

**註二六** 囚獄司。正一人。掌禁囚罪人。徒役、功程。及配決事。(令義解、卷一、職員令、四四頁)

**註二七** 凡獄囚應給衣糧薦席醫藥。及修理獄舍之類。皆以贖贖等物宛。無則用官物。(令義解、卷十、獄令、三〇三頁)

**註二八** (前略)而今囚獄司官舍顛倒。無實年久。此者亦復始自廳。造干門屋。頻出顛倒。四面露出殆無宿直之居。漸爲兔之棲。囚之年末所徵贖物。計便宿納。類盜失云々。(政事要略、卷八十二、糾彈雜事廿二、天曆四年十月十三日太政官符、應納刑部省徵送銅贖代事、六六四頁)

**註二九** (前略)又延長四年五月廿七日宣旨稱。以贖銅代物。充給左右獄囚。冬時衣服臨時食料并修理獄舍等類。是罪人被下囚獄司之時事也。宣旨所稱。左右獄囚衣服料等。今檢非違使之所職也云々。(政事要略、卷八十二、糾彈雜事廿二、天曆四年十月十三日太政官符、應納刑部省徵送銅贖代事、六六五頁)

**註三〇** (前略)今件贖銅料。既無處於檢納。議獄決罪。非省之職掌。商量事情。專不穩便。名實相違不可不申。望請。官裁。贖銅申進未依舊。省將對濟納物。實放返抄。使令檢非違使行者。左大臣宣。依請者。使宜承知。依宣行之。符到奉行。右少辨藤原朝臣右少史山直。(政事要略、卷八十二、糾彈雜事廿二、天曆四年十月十三日太政官符、應納刑部省徵送銅贖代事、六六四頁)

**註三一** 凡贖銅錢者。收囚獄司。省相共出納。(延喜式、卷二十九、刑部省、七二四頁)

**註三二** 左辨官

下檢非違使

應任法禁斷近五畿內近江丹波并國調租稅輩事

右得五畿內近江丹波等國司。今月三月廿七日奏狀稱。誼檢法條。廩庫律云。應輸課稅及入官之物。迴避詐匿不輸。或巧僞濫惡者。計所闕。准盜論。

(中略)寬年七年九月廿七日格云。得美濃國解稱。(中略)而此國人心中多巧只事奸欺。至于欠失官物。國司沒其私物臨欲運納官倉。忽就官家假爲寄進。請其家牒送於進當國。或云是家之田舉物。或云寄進備物之代。或時懸札。或時打杭。如此違濫不可勝計。國司詳知非家物。爲恐權勢。繫日閉口。是故官物已致未進。國宰罹其負累。國之難治。莫大於斯焉。望請元來無由稱其家物者。雖有家牒不更許容。然則部內肅清。官物全納云々。諸國若有此類同亦准之者。今如律條者。奸遁官物之輩。其罪准盜論之。(中略)謹檢案內。事有朝章。人須懲肅。而民之不良狼<sup>レ</sup>多端。只假一時之威猛。不知百王之憲法。奸遁巧僞倍舊彌盛。調庸租稅逐年難濟。爰國使郡司等適勤行勘徵。或檢封其它。忽懸札打杭。僞稱東家物。請下暴惡之使。凌轢勘徵之人。即令強進。不付徵官物之過契。即以此狀彌爲驗。國司僅捕負人。適國禁彌請使者。侵辱國宰。爲憚權勢之威。猶緩勘決之法。禁網難張。逐免其身。爰奸遁之輩。一人所負五六千束。塔計其積已巨萬。國之凋殘吏之負累。莫不同斯。本須如此之輩爲翹楚者。召捕其身進上公家。永被下宣旨於檢非違使。隨國移文被禁其身。任法斷決。然則官物全收奸詐自絕者。左大臣宣。奉勅依請者。宜承知依宣行之。不可違失。

天曆元年閏七月十六日

大史三國真人是隆

中辨大江朝臣朝綱

(政事要略、卷五十一、交替雜事十一、二七八——二八〇頁)

**註三三** 應輸課稅及入官之物。迴避詐匿不輸。或巧僞濫惡者。計所闕 准盜論。(律逸、卷四、日本古代法典本、一七八頁)

**註三四** 應永定檢非違使一人。令勘徵畿內無主品位田地下拒捍未進輩事

右得穀倉院去<sup>□□</sup>八日奏狀稱。檢案內。稱倉畝之輩。須致地子之辨。而澆季之俗。土浪之民好募權勢。動成拒捍。春時稱舊作。以充他人爲愁。秋收致奸計。以遁徵使爲事。適示懲誡還及鬪亂。因之畿內國司并左右京職。申請拒捍使令入勘。官物<sup>□</sup>之未進已爲流例。望請。天裁准件例被下宣旨。於檢非違使廳。永定置使官人。勘徵件拒捍未進之輩。將令知皇靈之不怪者 (後略)

長保五年五月二十二日 左大史小槻宿禰奉親奉

同 四年十月十九日 右衛門府生竹田種理奉

(政事要略、卷五十三、交替雜事十三、二九二頁)

## 第 六 行 政 警 察 權

檢非違使は京都市中の治安維持のために警察權を行使した。但し此の警察權は、司法警察權に對する行政警察權に相當すべきものにして、この意味に於ける檢非違使廳は、帝都の治安維持を以て任ずる現今の警視廳に相當すべきであらう。

檢非違使の有する行政警察權の内容は、その實績より見て次の如く大別される

保安警察に關するものとしては、鬭亂刃傷の鎮壓（註一）高位高官者に對する警固（註二）、陰謀探索（註三）、法會祭祀の取締（註四）があり、風俗警察に關するものとしては、過差（過度の奢侈を云ふ）、禁制物の點檢（註五）、淫詞妖言邪宗の取締（註六）があり、交通警察に屬するものとしては、街路清掃の指揮命令をなし（註七）、道路橋梁の普譚巡視を行ひ（註八）、産業警察に屬するものとしては、狩獵警察として私鷹飼竝に狩獵の取締り（註九）を行つた。その他、行路病者の保護檢束（註一〇）、更に貧民の救濟方面にも關係したが（註一一）、就中、平安時代に於て官人間に通弊とせられたる新任官人に對する饗應強請の禁止取締りをすら行へることは（註一二）、官人間の慣行にまで干涉して、綱紀の振肅を計れるものにして、その管掌する所の大なることは驚くべきものがあつた（註一三）。

註一 感神院與清水寺鬭亂。遣檢非違使制止之。（日本紀略、後篇四、天德三年三月十三日戊午條、七五頁）

攝政過大納言經實門前之間鬭亂。大納言侍刃傷攝政雜色。上皇遣檢非違使。責召下手人。後日召連散位源家俊。被下左衛門府。（百鍊抄、第五、天永三年六月四日條、四九頁）

註二 抑大夫尉重定朝臣。爲經朝臣。平尉有成。已上三人參上。此廷尉自閑院內裡參上。被寄御輿之時云々。（清解眼抄、一供奉行幸延尉向炎上事、群書類從、第五輯、一一三七頁）

上に延尉とあるは、即ち檢非違使を云へること、次の有職問答により知ることが出来る。

一延尉號事。檢非違使佐を申ならはし候。され共檢非違使總號に用候よし被仰出候キ。(有職問答、續々群書類從、古書保存會本、第三冊、七頁)

**註三** 鳥羽院の御時、仁寛阿闍梨、謀叛起す由落書ありければ、千牛丸といふ童を搦め取りて問はるゝに、承伏しにけり。別當宗忠卿、檢非違使盛重、重時を召して、仁寛召取るべき由仰下すに云々。(續古事談、第五、諸道、二八九頁)

**註四** 凡釋奠祭日。都堂講宴之時。左右檢違使禁遏堂下濫行之輩。(延喜式、卷四十六、左衛門府、九六四頁)

親族拜之間。檢非違使等於陣外。彈雜犯間。内府小大夫君雜色等。與廳下部等有鬪亂事。雖不及巨害。又以拔刀。此中右衛門督車副男。濫行無極。檢非違使等。搦車副男云々。(中右記、寛治八年正月七日巳卯條、第一冊、一一三——一五頁)

**註五** 加茂祭。今日見物車出紅衣。檢非違使源清以下糺彈之。(日本紀略、後編十四、長元三年四月十五日丁酉條、二七七頁)

政事要略、卷六十七、糺彈雜事七、五三九——五七〇頁。谷森饒男「檢非違使ヲ中心トシタル平安時代ノ警察狀態」一四三——一五四頁。

**註六** 洛中上下群集。盃酌無算。可被却之由。被仰檢非違使。爲淫祀有格制之故也。(百鍊抄、第五、應德二年七月條、三八頁)

早且檢非違使資清爲別當使。入來云。近隣可有追捕之事。可用意者。乍驚關東門相待之處。富小路東小屋也。是年來居併老女。或稱祭蟲也。或稱祭狐。好色諸女深信此事。誠以成市。詐取人寶貨聞已及高。今日已被追捕云々。(中右記、嘉承元年十二月七日條、第三冊、一五四頁)

**註七** (前略)又云、北邊大路汗穢物甚多者。可令掃清之由可仰使官人云々。(小右記、長和四年四月十九日戌辰條、第一冊、四二五頁)

長治二年八月七日癸酉。次京中道路不淨事を仰。相副檢非違使於京職。可掃之由能仰了。(殿曆、古事類苑、官位部、第二冊、一二七頁)

**註八** 永承七年五月六日庚戌。今日臨幸有何事哉。仍遣召道平朝臣了。關白且被

行雜事。召檢非違使仰可作道之事云々。(春記、古事類苑、官位部、第二冊、一二七頁)

右大史長張宿禰言鑒仰云。右中辨藤原朝臣在衡傳宣。大納言兼右近衛大將藤原朝臣保忠宣。奉 勅。檢非違使左衛門府生大原忠宗。右衛門府生若江善邦善。宜差巡檢伊勢齋親王上道。大和伊賀兩國道橋使者。

承平二年四月十八日

右衛門府生村主保範奉

(朝野群載、卷十一、二一八頁)

**註九** 弘仁八年九月廿三日宣旨。(政事要略、卷七十、糺彈雜事十、六一三頁)

大治五年十月七日太政官符。應禁遏私餉鷹鶴并致狩獵事。(朝野群載、卷十一、二一五頁)

**註一〇** 延長八年二月十三日宣旨。應收養路頭爲病當事。(政事要略、卷七十、糺彈雜事十、六一一頁)

**註一一** 是日。喚左右京亮。左右衛門。檢非違使并四人。於殿前宣勅。遣勘錄東西兩京飢病百姓。特加賑恤。以陰霖經日。穀價踴貴也。(續日本後紀、卷六、承和四年十月辛卯朔條、六九頁)

**註一二** 檢非違使起請五條。其一應減定諸衛舍人及放縱輩求酒食責被物之罪事。謹案新格諸家諸人。神宴之日。不依主招。求酒食責被物者。不論蔭贖。坐從髡鉗。欲絕彼放逸。殊設此嚴科。使等理須依格旨加科責。然而原其罪過。實非盜科。髡鉗之事。理非穩便。憚之不罪。則還似無格。忍之將行。則事是慘虐。疑留不斷。積習更倍。望請。衛府舍人等。准六位已下把笏者。解却舍人之任。自外一依去天平寶字二年二月廿日 勅書。決杖八十。(三代實錄、卷廿六、貞觀十六年九月十四日己亥條、三四九頁)

**註一三** 檢非違使の警察權行使の實例に關しては、谷森徳男「檢非違使ヲ中心トシタル平安時代ノ警察狀態」參照。

## 第二節 鎌倉時代に於ける檢非違使の權限

### 第 一 總 說

### (1) 公・武・寺社の三權鼎立

壽永三年(1184)、源頼朝が鎌倉に幕府を開設してより、武家の執政時代が始まる。幕府の組織は、分國及び家人の管理監督機關に政所(公文所)、民事訴訟の審判機關に問注所、武士の宿衛、警察、刑事裁判等を管掌する警察並に司法機關に侍所(檢斷沙汰所)の三機關を以てし、地方に於ては、京都には京都守護、諸國庄園には守護地頭を配置して、國家統治の實權を掌握した。源氏に代り北條氏が此の實權を繼承するに及んでは、幕府の組織も一新せられ、鎌倉には執權、連署の二職、評定衆、引付衆、寄合衆等が設置せられ、京都には南北の兩六波羅探題が、朝廷公家の動靜監視機關として、兼ねて近畿、西國の重鎮として新設された。その他、鎮西探題、長門探題、奥州總奉行、蝦夷管領等が設置せられたが、諸國庄園の守護地頭のみは前代に引續いて存置された。

鎌倉幕府の鎌倉、京都及び地方の諸國に於ける執政機關は斯くの如くなるを以て、一見して國家統治の實權は幕府の掌握する所であり、幕府の政令は其の及ばざる所なきが如くであるが、元來、鎌倉幕府が國家の統治權を行使するのは、我が國體の上より見るも、明示的に或は默示的に、天皇より之を幕府に御委任せらるゝ所であると解することが至當であり、且つ一方に於ては、朝廷に於かせられても院政の連續として政務を總覽せられ、朝廷の執政機關には攝政關白を始めとして、太政官以下の令制官司、諸國には國司の制が、それぞれ前代より引續いて存置せられた。尤も是等の諸官は殆ど實權を有せず、鎌倉時代を通じて實際に活動せるものは、前代の後三條天皇(1067—1073)の御代に設置せられ、引續き存續せる記録所にして、庄園券契に關する事件は云ふ迄もなく、一切の土地に關する訴訟を審理し、又朝廷の財政に關する事務をも管掌した。されば、たとへ朝廷の勢力が衰微せるとは云へ、尙、王朝時代四百年の餘威は牢乎として抜くべからず、依然として京都を中心として關西に隱然たる勢力を有したるを以て、その



勢力範圍内に於ては、容易には幕府の干渉を許さなかつた。之に加ふるに南都北嶺の古寺社は、これ亦、王朝時代以來、公武の尊信を一身に集め、軍備には強力なる僧兵を養成し、領地には廣大なる庄園を所有して侮り難き勢力を維持し、幕府竝に公家に對して自治權の確立を標榜して立てるを以て、實際に於ては、少くとも鎌倉時代の初期に於ける我國の政治分野は、公、武、寺社の三者の勢力が、天下を三分して鼎立してゐたと見るべきであらう。

## (II) 公・武・寺社間の各固本法の法域

國家統治の上より見たる當時の實情たる公、武、寺社の三權鼎立は以上の如くなるを以て、是等三者の勢力範圍内に於ては、之に施行せらるべき法令も自づと異なるに至つた。換言すれば公、武、寺社の各々により施行せらるゝ法令の適用區域、即ち法域が一定するに至つた。即ち朝廷公家の領域に於ては前代の流れを汲む公家法、武家の領域に於ては當時の支配的勢力を有する武家法、寺社の領域に於ては僧侶集會制度の發達せる寺法がそれぞれ其の所領たる庄園の間に於ても、各法の系統を引く本所法として適用せられ、是等各法の法域は一定して、彼此混同せらるゝことはなかつた様である。換言すれば是等三者により施行せらるゝ各法令は、即ち屬地的效力を有してゐたと云ふことが出來よう。

例へば、永年の間、平穩且つ無事に土地の占有を繼續せる者に對しては取得時効の制を採用し、その所有權を認むるが如き所謂年序の法が、武家の領域にのみ施行せられて（註一）、公家、寺社の領域には適用せられざりし慣習の存するが如きである（註二）。又、文治三年（1187）の冬、檢非違使廳に於て、大内夜行番と稱する禁中の夜間非常警戒の闕怠者を問責處罰すべく逮捕せるに、犯人の主人たる幕府の家臣八田知家が之を奪還せる事件は（註三）、檢非違使廳より幕府への抗議提出によつて、幕府は該犯人を捕縛して檢非違使廳に引渡すと共に、八田知家を罰して鎌倉の道路建設の責

を負擔せしめ、以て幕府の責任の所在を明かにした（註四）。これは公家と幕府との間に管轄の相違があり、幕府の權勢と雖も公家の領域には及ばず公家の領域内に於ける事件は凡て公家の法を以て處斷せるの一例であり、公家法が屬地的效力を有することを示すものである。又、寛喜二年（1230）十二月、承久の亂の關係者たる大内惟義の嫡男惟信が、出家して日吉社八王寺に隱匿せるを偵知せる六波羅は、これが逮捕に就ては天台座主に申請し、延曆寺の僧をして逮捕せしめたる後に、その引渡を受けたるが如きは（註五）、即ち幕府の權力が寺社の領域に及ばざるの一例である。但し、以上の如く、幕府が公家及び寺社の領域には、直接には干涉せざるの事實は、形式上、舊慣を尊重して、是等二者に敬意を表せるがために外ならぬとも考へられよう。

### （III）檢非違使廳と幕府との關係

鎌倉幕府が最初に京都守護を設け、次いで承久の亂後に六波羅探題を置き、以て京都市中の治安維持に當ると共に、兼ねて朝廷公家の動靜を探索するに及んで、過去四百年に垂んとする長期間、京都市中の一切の警察權、司法權を掌握して、公家唯一の司法機關、警察機關たるの地位を持続し來れる檢非違使廳との間に權限上、管轄上の確執を生ずるに至るのは必然であつた。

文治二年（1186）二月、折から在京中の北條時政は、京都市中の盜賊十八人を逮捕し、之を檢非違使廳に引渡さずして、直ちに六條河原に於て斬刑に處したることは（註六）、從來、盜賊の處斷は凡て檢非違使廳の管掌する所なるの慣例を無視せるものであつた。次いで翌文治三年（1187）九月、鎌倉より京都へ派遣せられたる下河邊行平が盜賊八人を逮捕し、之を檢非違使廳に引渡さずして、直ちに斬刑に處したることも、前年の例に倣へるのであつた（註七）。併し之を以て直ちに京都市中の刑事司法權、警察權が公家の檢非違使廳より幕府の手に移管せられたるものと見るのは早計であ

る。王朝時代後半期に於ける檢非違使廳は、その中心が源平二氏の武人を以て組織せられたるが故に、自然その實權も強大であつたが、國家統治の實權が武門に歸したる以上は、必ずしも武人たる者が檢非違使廳に據つて功名を立つることを要せざるに至つては、檢非違使たる者も亦多くは公家の官人を以て補せらるゝに至り、こゝに自然と檢非違使廳の實力が低下し却つて武家の權勢に壓倒せらるゝに至るは當然であらう。従つて檢非違使廳が其の權限を行使するに當つても、常に武士の協力を得て始めて能く其の効果を舉げ得る程であつたが（註八）、武士が檢非違使廳の手を経ずして獨斷を以て盜賊を處斷せることは、檢非違使廳自ら逮捕するの實力なきによるものであり、必ずしも幕府が檢非違使廳の權限を故意に侵害せるものとは考へられない。尤も之を以て京都の一般市民に對する幕府方の示威行爲とも見られよう。併し當時の檢非違使廳の實力の衰微せることは事實であり、殊に盜賊その他の犯罪者が自ら武士の名を藉るに於ては、幕府の權勢を畏れて、檢非違使は其の成敗に迷はざるを得なかつた程である（註九）。但し檢非違使廳の實權が衰微せるとは云へ、永き傳統を有する公家唯一の刑事司法機關たり警察機關たりしが故に、幕府が徒らに之を壓迫し、その權限を侵害せんとする意向は無かりしものゝ如くである。寧ろ其の權限を尊重せることは、前述の八田知家竝に其の郎從(部下)に關する事件に對して採れる幕府の態度を以てしても窺はれよう。

承久の亂(1221)の結果は朝廷公家方の慘敗に歸し、これ迄相對立せる朝廷對幕府、公家對武家の軋轢は清算され、事實上、京都は鎌倉の實力下に屈服するに至つた。従つて北條執權の委任に基く京都の六波羅は、その組織に於て宛然關西の幕府たるの觀があり、司法及び警察に關する其の實力は、公家の檢非違使廳の遠く及ばざる所であつた。併し檢非違使廳とても、朝廷公家を背景とする四百年來の傳統を有して容易には崩壞しなかつた。殊に幕府の執政に對して、朝廷に於ても院政が行はれしが故に、之に従ふ

檢非使廳は依然として公家の警察權、刑事司法權を掌握する獨立機關にして、對幕府との關係に於ては、その權限に關する限り六波羅と相對立するものであつた。併し幕府とても京都に六波羅を置ける以上、從前の如く、京都市中の治安維持を檢非違使廳にのみ管掌せしむることは、面目上容認し難き所であり、六波羅の實權が此の方面に干涉するに至つたのは當然である。こゝに京都市中の治安維持に關する檢非違使廳と六波羅との管轄區域が當然問題となるべきであるが、之に就ては後述することとする。

#### (IV) 檢非違所と幕府との關係

文治元年 (1185)、源賴朝は平家を追討して後、大江廣元の議を容れて、義經、行家逮捕を名目に、勅許を得て全國に守護、地頭を置き、家人を以て之に補した。守護は國毎に置かれ、國內の司法、警察を管掌し、地頭は庄園、公領に置かれて租税の徵收を管掌せるを以て、國司の權は守護に移り、庄園の領主は地頭に抑壓せられ、地方の實權は漸次幕府の手中に歸するに至つた。

王朝時代に於て、諸國に設置せられたる諸國檢非違使は、その本據を檢非違所とも稱せるを以て、一名之を檢非違所使とも云つた。この檢非違所は既に前代の後半期に於て、朝廷の政令が地方に及ばざるに至るに従つて、漸次朝廷との關係を喪失し、寧ろ地方の土着の豪族、武士等を以て組織せられ居りたるものゝ如くなるを以て、賴朝の政權掌握と共に、その勢力下に屈せざるを得なかつた。例へば文治二年 (1186) 四月、源賴朝が長谷部信連の武功を賞して、その褒賞として安藝國檢非違所を管領せしめ(註一〇)、同五年 (1187) 九月、葛西清重をして奥州平泉郡内の檢非違所使を管轄せしめ、國人の亂行停止、罪科糾斷の權を管掌せしめたるが如きは(註一一)、いづれも檢非違所が幕府の支配下に立てることを證するものにして、又賴朝をして斯く專擅的に檢非違所を支配せしめたるは、檢非違所と朝廷との關係が、朝廷と檢非違使廳との關係の如く密接ならず、寧ろ朝廷とは無關

係に地方的に獨立して存續せるが故なりとも見られよう。

斯くの如く、地方に於ける檢非違所は、京都の檢非違使廳とは異なり、全く幕府の支配下の在つたが、併し幕府は國に守護を置くも、直ちに檢非違所の權限を奪取して、之を守護に移すものではなかつた。寧ろ檢非違所の先例慣習は之を尊重し、強盜、竊盜、放火、刃傷等の事件の成敗（處分）に關する權限は、依然として檢非違所に認めたるを以て（註一）、この意味に於ては、國に守護が置かるゝも、檢非違所は尙諸國の警察機關、刑事司法機關であつた。併し寛喜三年（1231）五月、幕府が全國の守護地頭及び檢非違所の職務、守護地頭と領家預所との訴訟、竊盜の處刑賠償等に關して發せる命令中に、檢非違所の職務は専ら貢物を收納すべきことを規定するに及んで（註二）、王朝時代以來、四百年の長きに亘つて地方の治安維持に當れる檢非違所は、こゝに遂に本來の權限を喪失するに至つた。

註一 一雖帶御下文。不令知行經年序所領事。右當知行之後。過二十箇年者。任右大將家之例。不論理非。不能改替。而申知行之由。掠給御下文輩。雖帶彼狀。不及叙用矣。

（貞永式目、第八條、四〇二頁）

一質券賣買地事

右以所領。或入流質券。或令賣買之條。御家人等佗條之基也。於向後者。可從停止。至以前沽却之分者。本主可令領掌。但或成給御下文下知狀。或知行道廿箇年者。不論公私。今更不可有相違。若背制符。有致濫妨之輩者。可被處罪科。次非御家人凡下之輩。質券買得地事。雖返年紀。賣主可令知行。

正安二年七月五日

陸 奥 守 判

上總前司殿

相 模 守 判

（新編追加、政所篇、五〇七頁）

一質券賣買地事 （永仁六、二、廿八）

或成給御下文并下知狀。或過知行年紀之地外。不論公私領。可返付本主之由。被下制符畢。今更不及改變。但自今以後者。不能禁遏。任前々成敗之旨。可有沙汰。

(新編追加、政所篇、五〇八頁)

但し所領の占有取得が、不法の行爲に基く場合には、たとへ廿箇年の期間を經過せるも、年序法の適用なきは、次の例にて知られる。

一 諸國地頭所務事

承久兵亂以前之本地頭者。有所務之先例。更不可有新儀。同兵亂以後之新地頭者。被定置率法畢。何背彼狀哉。然則於自今以後者。縱押領之後。雖過二十箇年。不可依年紀。本地頭者任先例。新地頭者守率法。可致沙汰之由。可被裁許也。可被存此趣之狀如件。

寶治元年十二月十三日

左 近 將 監 判

相 模 守 判

相模左近大夫將監殿

(新編追加、雜務篇、六〇一頁)

註二 法學博士牧健二氏「日本法制史概論」二一一頁。

註三 (前略)又自關東。召進知家所從。此事。去年被催京中夜行之時。件知家下人以闕其事功。檢非違使擲取之。而知家遣使奪取。以外狼藉也。使廳薛申。仍仰遣關東所召進也。爲仰遣大理卿。召遣檢非違使明基了。稱病。仍召遣道憲經康了。(玉葉、卷五十四、文治四年五月十五日條、第三冊、五一頁)

註四 八田右衛門尉知家郎從庄司太郎。被遣夜行看之處。懈緩之由。依全風聞。早可召進其身於使廳之趣。今日被仰遣定綱。此上可造鎌倉中道路之旨。被仰知家云々。(吾妻鏡、第八、文治四年五月廿日丙辰條、前篇、二九八頁)

註五 (前略)巷説。大夫尉惟信(惟義嫡男。承久合戰之後逃隱)爲法師。隱居日吉八王子庵室。武士聞此事。可被擲來由申座主。以門徒惡僧一昨日被擲取。武士向栗田塔前。其夕請取訖云々。(明月記、寛喜二年十二月十六日條、第三冊二六三頁)

註六 今日。北條殿於六條河原。刎群黨十八人首。凡如此犯人者。不可渡使廳。直可處刎刑之由云々。(吾妻鏡、第六、文治二年二月一日己酉條、前篇、一九八頁)

註七 下河邊庄司行平。千葉介常胤自京都歸參。(中略)而行平九月十一日入洛。即夜窺兼承及群盜衆會之所々。令郎從致夜行之處。於尊勝寺邊。行逢奇恠之者。人數八人。不殘兮擲取之。尋明所犯之間。不相待常胤。將又不相觸使廳

任北條殿之例。勿彼等首於云々。(吾妻鏡、第七、文治三年十月八日乙亥條、前篇、二七八頁)

**註八** 只近代使廳沙汰。遂日尫弱。偏如鴻毛。在京守護武士合力致沙汰者。何不  
被禁遏乎之由依思食。殊可有尋沙汰之由。所被仰遣也。(吾妻鏡、第七、文治  
三年十月三日庚午條、前篇、二七五頁)

**註九** 就中實犯之輩。號武士之威時。使廳彌迷成敗云々。(吾妻鏡、第七、文治三  
年十月三日庚午條、前篇、二七五頁)

**註一〇** 左兵衛尉長谷部信連者。三條宮侍也。宮依平家讒蒙配流官符御之時。延  
周等亂入御所中之處。此信連有防戰大功之間。宮令遁三井寺御訖。而今爲抽  
奉公參向。仍感先日武功。懇爲御家人召仕之由。被仰遣土肥二郎實平之訴云々。  
信連自國司給安藝國檢非違所竝庄公畢。不可見放之由云々。(吾妻鏡、第六、  
文治二年四月四日辛亥條、前篇、二一七頁)

**註一一** 平泉郡内檢非違使所事。可管領之旨。葛西三郎清重賜御下文。於郡内。  
諸人停止濫行。可糾斷罪科之由云々。(吾妻鏡、第九、文治五年九月廿四日辛  
巳條、前篇、三五八頁)

**註一二** 一刃傷殺害人禁斷事

有先相觸所在之庄公糾明犯否。任實令搦來之時。可請取之。無左右使者亂  
入事。可停止。兼又國司一所之中。檢非違所別當爲宗所職也。而守護人令管  
領之間。云盜犯放火。云勾引人。如此犯人不及成敗云々。早停止守護人之妨。  
任先例。可爲檢非違所之沙汰。(新編追加、侍所篇、五三一頁)

**註一三** 今日。有被定下條々。先諸國守護人者。大犯三ヶ條之外。不可致過分沙  
汰。檢非違所者。廻寬宥之計。可專乃貢勸之由云々。(吾妻鏡、第廿八、寛喜  
三年五月十三日戊戌條、後篇、一〇七頁)

## 第 二 刑事裁判權及び警察權

### (I) 檢非違使廳と六波羅との管轄

承久の亂(1221)前に於ては、幕府の委任に基き京都市中の治安維持を擔  
當せるは京都守護であつたが、承久の亂後に設置せられたる六波羅は、鎌  
倉幕府の組織に倣うて評定衆引付衆、公事奉行等が置かれ、三河、尾張

以西を管轄する（註一）、關西の小幕府の觀があつた。従つて公家の一機關に過ぎざる檢非違使廳の如きは、その有する實權の上から見るも到底六波羅に及ぶべくもなかつたが、先きに鎌倉幕府が京都守護を設置せるも、王朝時代以來、數百年に亙り朝廷公家の勢力範圍たる京都市中に於ける刑事司法權及び警察權は（註二）、長年の傳統により、依然として檢非違使廳の管掌する所なりしが故に、六波羅とても直ちに檢非違使廳の管轄を侵害するが如きことはなかつた。併し他面に於て、從來の檢非違使廳の權限を全面的に依然として容認するが如きことも、その體面上許容し難かりしことは當然であつた。かくの如くなれば、檢非違使廳の刑事司法權竝に警察權行使に關する特別管轄及び一般管轄の領域が茲に區分せらるゝに至つた。

## （Ⅱ）檢非違使廳の特別管轄

檢非違使廳の特別管轄とは、特定事件の管轄權が檢非違使廳にのみ存し、京都守護又は六波羅の管轄外に在る場合を云ふ。斯くの如き場合は、主として朝廷の命令に基く職權行爲、朝廷及び公家の領域内に發生せる事件、竝に朝廷及び公家に隸屬する特定人に關して發生せる事件である。換言すれば、地域的にも人的にも、朝廷及び公家に關係ある事件に限り、檢非違使廳が管轄權を有し、幕府の管轄外のものであつた。

建久三年（1192）三月、御厩飼口が九條に於て法橋知詮の從僧を殺害せるに付き、兵衛尉重綱が犯人を逮捕せしに、御厩舍人は其の同輩たる犯人を重綱の手より奪取せる事件は、九條家より犯人竝に奪取暴行者を檢非違使廳に引渡して處斷せしめた（註三）。又、建永元年（1206）九月、延曆寺堂衆二百餘人が今津和邇濱等の在家に亂入狼藉せる事件は、時の後鳥羽上皇の命により、檢非違使廳は檢非違使小野義成を派遣して之を討伐鎮定せしめた（註四）。又、曆仁元年（1208）二月、天武天皇御陵に對する不敬事件の犯人は、檢非違使中原友景により逮捕され、檢非違使廳に於て處斷された（註五）。又、寛喜二年（1236）三月、關白藤原道家の大番舍人某が前大館正眞



性の從童を殺害せる事件は、檢非違使廳が之を處斷した（註六）。

以上の諸件は（但し前三件は京都守護時代、後一件は六波羅時代）何れも朝廷或は公家に關係せるものであり、凡て檢非違使廳の管轄内に屬し、京都守護或は六波羅の干涉を認めなかつた。これは畢竟するに、幕府は朝廷及び公家の領域内に關する事件に限り、敢て之に容喙せず、長年の慣例たる檢非違使廳の管轄權を認めたるものと解すべきであらう。

### （Ⅲ）檢非違使廳の一般管轄

檢非違使廳の一般管轄とは、京都市中の一般治安維持に就き、京都守護又は六波羅との共同管轄に屬する事項に對する管轄を云ふ。從つて此の管轄に屬する京都市中の各種犯罪事件は、必ずしも京都守護又は六波羅の管轄外に在るものではなく、多くの場合、檢非違使廳は京都守護又は六波羅と協力して取締りの任に當つたのである。

承久の亂以前に於ては、檢非違使廳が京都市中の各種犯罪に對する刑事司法權を掌握することは、「罪科ノ事ハ使廳計リ行フベキモノナリ」との院宣に基くものであつた（註七）。然るに承久の亂以後に於ては、安貞年間（1227—1228）の群盜蜂起（註八）、寛喜年間（1229—1231）の大飢饉（註九）等により、京都市中は云ふ迄もなく、全國に互つて治安紊亂し、群盜、夜討強盜等が横行跋扈し、放火殺傷事件が頻々として發生した。從つて是れが取締りは幕府の最も重視する所となり、その取締法規が相次いで發令された。例へば寛喜三年（1231）四月の強盜殺人竝に盜犯に關する處分法規（註一〇）、貞永元年（1232）十一月の六波羅成敗法十六ヶ條（註一一）、嘉禎元年（1235）四月及び同年七月の兩度に互つて發令せられたる夜討強盜、殺傷に關する處分法規（註一二）、等は其の主なるものにして、之に據る犯人の處刑も頗る峻嚴且つ武斷的であり、首魁は斬刑、餘類は遠島流罪と云ふが如き嚴刑が普通であつた。

斯くの如き次第なるが故に、承久の亂以後に於ける京都市中の治安維持

に就ては、殆ど六波羅の政令の支配下に屬する觀ありしも、併し此の間に於ては、檢非違使廳とても徒らに拱手傍觀せず、朝廷公家の命令を奉じて京都の治安維持を擔當した。例へば貞永元年(1232) 三月、藤原教實が御教書を以て檢非違使廳に京都の群盜取締の命令を下したるが如きは其の一例である(註一三)。併し承久の亂の前後に於ては、京都に於ける公武の實勢力に非常なる相違があり、従つて檢非違使廳の如きも其の影響を蒙り、亂後の六波羅の出現は、四百餘年の傳統を有して京都に權勢を振へる檢非違使廳にとりて、正に其の權威の浮沈に關する一大脅威であつた。

天福元年(1233) 八月、六波羅より幕府へ決裁を請へる犯科人成敗に關する六波羅御注進十七箇條中、「一京都強盜殺害人事、右此條ハ使廳ヲシテ沙汰セシムベキノ由、去年仰セ下サレ候畢ンヌ、而モ猶武士相供シテ沙汰致スベキノ由、殿下ヨリ仰セ下サレ候、何様ニ候フベキ哉。」なる一箇條に就て、幕府は後者を容認し、武士も亦、強盜殺害事件に就ては檢非違使廳と協同して之に當るべきこととした(註一四)。これは畢竟、檢非違使の實力が低下して、強盜殺害等の兇惡なる事件に對しては、檢非違使が單獨にては到底十分なる効果を擧げ難かつたからであり、過ぐる文治三年(1187) 十月、後白河法皇が源賴朝に下されたる院宣に、使廳の沙汰は在京守護武士と合力して沙汰致さざれば、群盜犯人を禁遏せしめ難き由を仰せ出されたる趣旨と相似て(註一五)、檢非違使廳の一般管轄事項に對する權限行使には、概ね武士の援助を必要とせるものであつた。

六波羅御注進十七箇條に次いで、二年後の文暦二年(1235) 七月、六波羅へ下知せる幕府の御教書によれば、京都市中の刃傷殺害事件に就て、之に武士の關係せざる限りは、その事件を檢非違使廳の管轄に屬せしめ、檢非違使廳の處斷に委任せしものであるが(註一六)、後に至り、仁治二年(1241) 六月、之を少しく變更し、たとへ武士の關係せざる事件の處斷と雖も、その事件が重犯なる時は、幕府の手に於て之を處斷すべきこととした(註一

七)。こゝに重犯とは山賊、海賊、夜討、強盜の諸犯を稱し(註一八)、犯罪中の最も兇惡なるものであつた。されば検非違使廳の一般管轄事件も、重犯の成敗(處斷)を幕府の管轄に移さるゝに及んでは、著しく縮少し、之に就て有せし検非違使廳の刑事司法權、警察權の實力は全く微力とならざるを得なかつた。

註一 日本時代史、第五卷、鎌倉時代史(三浦周行博士)、二二七頁。吾妻鏡、第廿九、天福元年四月十六日庚申條、後篇、一二八頁。

註二 こゝに云ふ刑事司法とは、鎌倉幕府の所謂檢斷沙汰と稱する謀叛、夜討、強盜、山賊、海賊、殺害、刃傷、放火、狼藉、刈田等の刑事犯罪の裁判斷罪を云ひ、警察とは京都市中の治安維持、犯罪の捜査、犯人の逮捕等に關する保安警察、司法警察の如きを云ふ。

註三 近邊有鬭諍事。厩飼口男殺害知註法橋下法師云々。件法師密通彼妻女之故云々。事發。雖非無其謂。當時所行尤不敵。仍兵衛尉重綱擲留之。而御厩舍人等來。奪取云々。事次第不穩。欲相尋之間。長房依開封。宮司下向宇治。仍尋遣光長卿計。大略事有其實歟。仍伴犯人。并奪取張本男女人。召給檢非違使資兼了。(玉葉、卷六十三、建久三年三月三日條、第三冊、七九六頁)

註四 九月廿五日夜。堂衆二百人許。自三井寺出立。泛湖上押寄今津濱。亂入永兼勾當宅以下在家云々。(華頂要略、建永元年九月廿五日第、大日本史料、第四編之九、二三七頁)

檢非違使義成。奉院宣。欲擲召之間。忽以合戰。義成并子息左衛門尉□□院中被召仕中間童鶴丸被疵了。(不知記、建久元年九月廿七日條、大日本史料第四編之九、二三八頁)

註五 或人云。去月廿日以大和國高市郡天武天皇御陵爲群盜被穿鑿搜取重寶云々。多是金銀之類云々。(百鍊抄、第十四、嘉禎元年四月八日庚午條、一七八頁)

中大夫判官友景。相具犯人(天武山陵盜人等也)參大理。門前見物之車塞路壯觀也。(百鍊抄、第十四、曆仁元年二月七日癸未條、一八三頁)

註六 今朝此殿大番舍人。突殺三條僧正之寵童。入京極面御門。於庭上被擲。賜檢非違使□章了云々。(明月記、寛喜二年三月六日條、第三冊、一九一頁)

**註七** 大理以明基申云。知家郎從事。院宣云。罪科事。使廳可計行者。(王葉、卷五十四、文治四年六月五日條、第三冊、五一七頁)

**註八** 日本時代史、第五卷、鎌倉時代史(三浦周行博士)、二六四——五頁。

**註九** 日本時代史、第五卷、鎌倉時代史(三浦周行博士)、二七八——二八五頁。

**註一〇** 強盜殺害人事。於張本者。被行斷罪。至與黨者。付鎮西御家人在京輩并守護人。可下遣。兼又盜犯人中假令錢百文若二百文之程罪科事。如此小過者。以一倍可致其辨。於重科輩者。雖召取其身。至于不同心緣者親類者。不可及致煩費云々。(吾妻鏡、第廿八、寛喜三年四月廿一日丁丑條、後篇、一〇六頁)

**註一一** 今日。六波羅成敗法十六ヶ條。被仰下之云々。(吾妻鏡、第廿八、貞永元年十一月廿九日乙亥條、後篇、一二五頁)

**註一二** 一犯人斷罪事

右爲夜討強盜之張本。所犯無遁方者。可被行斬罪也。是則爲相鎮停向後也。其外至枝葉之輩者。可召進關東。可被流遣夷島也。以前條々存此旨。可令致沙汰之狀。依仰執達如件。

文曆二年三月廿三日

武藏守 (泰時)判

相模守 (時房)判

(重時)  
駿河守殿

(時盛)  
掃部助殿

(式目抄、卅三、強竊二盜罪科事。大日本史料、第五篇之九、九三六頁)

被仰六波羅條々事。先京都双傷殺害人事。爲武士輩於相交者。可爲使廳沙汰。犯過斷罪事。爲夜討強盜張本所犯無所遁者。可被斷罪。枝葉輩者。召進關東。可被遣夷嶋也云々。(吾妻鏡、第廿九、嘉禎元年七月廿三日甲申條、後篇、一四一頁)

**註一三** 又大學寮廟藏守護事。去夜始使廳者兩三人雖未。寮官相共不守護者。難請取之由令申云々。寮頭經範朝臣等送。重大理許遣御教書了。(民經記、貞永元年三月廿日辛丑條、大日本史料、第五編之七、七七三頁)

この詳細は民經記、貞永元年三月十六日、十七日、十八日、十九日、廿日、廿一日、七月六日、天福元年五月一日、三日等の各條に見ゆ。(大日本史料、第五編之九、七六八——七七七頁)

**註一四** 京都強盜殺害人事

右此條可爲使廳沙汰之由。去年被仰下候畢。而猶武士相供可致沙汰之由。  
 自殿下被仰下候。何様可候哉  
 (押紙云。武家不相交者。難事行歟。隨被仰下可有沙汰也。)  
 (新編追加、侍所篇、五二〇頁)

**註一五** 只近代使廳沙汰。遂日尪弱。偏如鴻毛。在京守護武士合力致沙汰者。何不被禁遏乎之由依思食。殊可有尋汰之由。所被仰遣也。(吾妻鏡、第七、文治三年十月三日庚午條、前篇、二七五頁)

**註一六** 一京都刃傷殺害人事

右爲武士之輩。於不相交者。可爲使廳之沙汰。  
 文曆二年七月廿三日被遣六波羅條々御教書内沙汰也。  
 (新編追加、侍所篇、五一七頁)  
 右、日本古代法典並に續群書類從所收の新編追加によれば、「爲武士之輩、於不相交者云々」と見え、吾妻鏡、第廿九、嘉禎元年(文曆二年)七月廿三日甲申條には、「爲武士輩於相交者云々」と見えてゐる。前者によれば本文の如き意となるが、後者によると京都の殺傷犯に武士の如はるものは檢非違使廳の處分を仰ぐことになる(日本時代史、第五卷、鎌倉時代史、二二八頁には、三浦周行博士は吾妻鏡に従つて述べられてゐる)。併し前年の天福元年五月一日附の幕府の政令にもある如く、御家人たる武士の成敗は六波羅の管轄する所なるを以て(新編追加、雜務篇、日本古代法典本、五八一——六頁)、武士の加擔する事件を檢非違使廳の處分に委ねるとは思はれぬから、吾妻鏡の記す所は新編追加の如くに訂正さるべきではあるまいか。

**註一七** 一殺害人事

右雖爲使廳沙汰。至于重犯之輩者。申給之。可行所當罪科之由。御下知先畢。早任彼狀可被申沙汰也。仍執達如件。

仁治二年六月十日

前 武 藏 守 判

相 模 守 殿

越 後 守 殿

(新編追加、侍所篇、五一八頁)

**註一八** 新編追加、侍所篇、一重犯、山賊・海賊  
夜討・強盜 輩、五二三頁。

### 第三 民事裁判權

#### (I) 檢非違使廳の民事裁判沿革

檢非違使廳が民事裁判に關與するに至つたのは、いつ頃からであるか判然としない。前期王朝時代に於ては、清和天皇の貞觀元年(859)、河内、和泉の兩國が焼陶及び伐薪の山に關して紛争せる時、太政官より派遣せる朝使左衛門少尉紀今影等が之を審理して、和泉國に勝訴の判決を與へたる事件がある(註一)。この朝使紀今影が衛府の官人であり乍ら、斯かる事件の審理に關與せることは、恐らく彼が檢非違使の職にあつたからではなからうかと思はれる(註二)。後期王朝時代に於ては、堀河天皇の康和元年(1099)九月、伊勢國管多氣郡字川合庄園の所有權問題に關する東寺對成願寺の紛争に就ては、太政官は檢非違使をして双方の提出せる訴狀、證據書類等を審理せしめ、その結果を判決上申せしめたることがある(註三)。これは明かに檢非違使が民事裁判に關與せる證左ではあるが、斯かる事例は寧ろ例外に屬し、王朝時代に於て檢非違使の有せる裁判權は、刑事裁判權が主であつたと見るべきである。

京都に於て一般の民事訴訟を受理すべき機關は即ち六波羅であつたが(註四)、然らば檢非違使廳は之に對して如何なる地位にあつたであらうかと云ふに、檢非違使廳も亦宣旨により一般の民事の訴訟を受理し、之を審理、判決するの權限を有し、幕府も亦之を容認せるが如くである。例へば建久二年(1191)三月二十八日、宣旨第三十二條により、私出舉(債務者が私人なる場合の利息附消費貸借)に於ては、法定利息は元金の一倍(十割)を以て最高限度となし、之を超過して債權者が債務者に利息を請求徴收せる場合には、債務者をして債權者を不當利得返還請求の名の下に、檢非違使廳に訴へしむることを得るとなし(註五)、嘉祿二年(1226)正月、幕府は之と同趣旨の下知を發し、式目新編追加第五十二條として收録せるが如き

は(註六)、その一例である。

併し乍ら、檢非違使廳が民事裁判に關與せる最も代表的な事例は、現存せる訴訟記録等より見て、鎌倉時代の末期より建武中興、南北朝時代を経て、室町時代の初期に至る間に於て、最も頻出せる土地所有權の確認を請求する事件に於て之を見ることが出来る。

## (II)土地所有權確認の裁判

所領の確認、即ち土地所有權の確認を請求せんがための訴訟を受理、審理、判決する機關は、鎌倉幕府に問注所、安堵奉行、朝廷に太政官内の記録所があり、建武中興時代に朝廷の雜訴決斷所、室町幕府に政所等が置かれたのであるが、室町時代の初期に於ては、北朝の檢非違使廳も亦、之に關與するに至つた。而して茲に土地所有權確認の裁判を請求する事件の多くは、當時戰亂の餘波を蒙り、從來、自己の土地所有權を表象する證書たる券契を盜難焼失等の事由により紛失せるによつて、之を證明せる券契たる紛失狀の交付を、相當の證據資料の提出によつて請求せんとする訴訟である。之に關聯せる最も代表的事件と思はるゝものを、山城國泉涌寺文書に残る記録に就て、次に述べて見よう(註七)。

北朝建武三年(1336)——南朝廷元元年——八月、京都東山を襲撃せる兵士が泉涌寺に亂入し、狼藉の限りを盡せるにより、その所領たる別院二階堂領の田地に關する傳來の券契(證書)を紛失するに至り、翌建武四年(1337)三月九日、泉涌寺は京都の北朝檢非違使廳に對して、券契紛失を證明すべき紛失狀(元本に代る證書)の交付方を訴へに及んだ。その訴狀は次の如くである。(原文は漢文體なり)

謹請 泉涌寺別院二階方丈料所文書紛失狀事

合

壹所 比丘尼蓮念寄進、九條田、貳段、甬神田里廿坪、  
字號羽折

壹所 比丘尼妙心寄進、七條町北頬、自町東、口東西貳丈、  
奥南北拾丈、

壹所 比丘尼淨因寄進、八條油小路、

八條面、貳拾丈、油小路面拾久丈、八條  
以南、油小路以東也、重寄附狀有之、

壹所 沙彌蓮寂、竝淨因寄進、□□北大宮田地、伍段拾歩、重  
狀□□

右田地ハ、比丘尼蓮念妙心等、信心ヲ當寺ニ凝リ、淨財ヲ別院ニ施シテ以  
來、佛陀寄附ノ地トナリ、知行シテ年序ヲ送ル所ナリ。爰ニ去年八月廿三  
日、東山襲來軍旅、當寺ニ亂入シ、三ケ日ノ間軍陣ヲ寺内ニ張り、黨類ヲ蘭  
室ニ集メ、寺邊ノ放火、佛物ノ却奪、道具靈寶、一塵モ殘サズ、聖教多ク  
以テ散失ス。凡ソ未ダ曾テ有ラザル次第ナリ。仍テ件ノ田地相傳ノ券契、  
同ジク紛失セシメ訖リヌ。彼ノ惡行狼藉ノ次第ハ、當時洛中ニ見聞其ノ  
隱レ無シト雖モ、向後ノ牢籠ヲ斷タンガ爲メニ、紛失ヲ立ツル所ナリ。  
各現在ノ明據ニ任カセ、諸方ノ證據ヲ賜ランガ爲メニ、紛失狀立ツル所  
件ノ如シ。

建武四年三月九日

東寺知藏比丘高英（花押）

知客比丘仙季（花押）

維那比丘元禪（花押）

監寺比丘全智（花押）

都寺比丘印俊（花押）

首座比丘知秀（花押）

寺官連署ニ任セテ、同ジク行跡ヲ加フルノミ。

泉涌寺住寺重俊（花押）

東福寺 □諫（花押）

三聖寺 石林（花押）



東光寺住持正具（花押）

新熊野別當法印權大僧都（花押）

件ノ文書紛失事、諸寺住持證判分明ノ間、愚署ヲ加フルノミ。

主計助兼明法博士左衛門大尉坂上大宿禰（花押）

彼ノ文書紛失事、傍輩證判分明ノ間、竝ニ愚署ヲ加フルノミ。

明法博士兼右衛門大尉□□朝臣（花押）

件ノ文書紛失事、面々證判ノ間、同所ニ愚署ヲ加フルノミ。

防鴨河判官美作守兼左衛門少尉中原朝臣（花押）

此の最後の三名の連署は、各自が所轄主務官司としての證判を與へたるものではなく、單に券契紛失の證人としての證判である。是等の證判は、訴訟提起者の訴狀内容の正當なることを立證する爲めに必要なる要件であつた。

この券契紛失による紛失狀交附の申請訴狀を受理せる檢非違使廳は、この種の訴訟の係官たる評定官の名を以て、訴狀の内容の眞偽の事實審理、實地檢證を行ひ、その結果を檢非違使廳長官の別當に報告する。この報告書を諸官評定目録或は諸官評定文と云ふ。即ち次の如きものである。

曆應二年四月十二日評定條々

一泉湧寺別院二階堂領七條町以下四箇所田地事

件ノ田地、マサニ知行スベキノ實否、百姓等ニ尋問セラルルノ處、寺家ノ管領相違無シ云々。然ラバ諸官ノ證判紛失狀ニ任カセ、別當宣ヲ下サルルノ條、何事カ有ラン哉。

參任官人

明 成 宿 禰

章 有 朝 臣

秀 清 朝 臣  
 章 兼 朝 臣  
 章 世 朝 臣  
 明 音  
 明 宗

この諸官評定文が當事者の申請に對して、紛失狀を交附すべきや否やの事實上の決定權を有する。而して右の諸官評定文の趣旨に従つて出される別當宣の趣旨は次の如くである。

泉涌寺別院二階堂領、七條町以下四箇所田地事、評定ニ任カスノ趣、下知セシメ給フベキノ由、別當殿仰セノ所ニテ候ナリ。仍テ執達件ノ如シ。

四月十二日

豐後介俊盛

謹上 博士大夫判官殿

而して右の別當宣の趣旨は、第六章に於て述ぶるが如く、直接に訴訟提起者に通達せらるゝものでなく、別當宣を承けたる大夫判官の名に於て、檢非違使廳下文の形式に移されて後、之を當事者に授與するのである。即ち次の如くである。

檢非違使廳下

泉涌寺別院二階方丈

七條以下四箇所田地事

右別當宣 副諸官評定目錄 斯クノ如シ、存知セシムベキノ狀、下知件ノ如シ。

曆應二年四月十二日

大判事明法博士左衛門大尉坂上大宿禰（花押）

但し此の檢非違使廳の下文は、單に一種の添狀としての效力を有するに過ぎず、紛失狀下附の目的は諸官評定目録を別當宣に副へ、之を下文と共に當事者に交付することにより達せらるゝものと考へられる。尙、別當宣、諸官評定目録は、恐らく多くの通達の場合と同様に、その寫本のみが當事者に交付せらるゝものであり、原本は檢非違使廳に保存さるゝものであらう。又是等三文書の日附が何れも同日であるのも、三文書が一括されて當事者に交付せらるゝ爲めに、紛失狀下附の日附を之により確定せんが爲めであらう。蓋し是等三文書の日附が互に異なる時は、何れを以て紛失狀下附の確定日となすべきかゞ不明となるを以てである。

### (III) 土地處分法發令權

土地に關する訴訟の裁判權を有せる檢非違使廳は、一方に於て、土地の處分法を規定し、之を全國に發令施行せしむる權限をも有した。而して此の權限は、主として北條氏の政權喪失直後の建武中興當時に於て、最も盛に行使せられた様である。檢非違使廳の權限の行使區域が全國的に擴大されたのは、蓋し建武中興の成立により、北條氏の政權が名實共に朝廷に歸屬せるを以てである。

建武元年(1334)五月三日、檢非違使廳は諸國に廳令を發して、<sup>フモツ</sup>負物(利息附消費貸借の目的物)、<sup>ホンモノガヘシ</sup>本物返(本錢返とも云ふ、<sup>ホンゼニガヘシ</sup>賣渡擔保の如し)、質地(質權の目的物たる土地)等に就き、本錢(元本)の半倍(五割)を債權者等に償還せし者は、之によつて元本を取戻すことを得る一種の徳政令を出した(註八)。この法令が遠國にも適用せられたる實例は、建武元年八月十三日、下總國衙が此の檢非違使廳の法令に基いて、年紀沽却地及び負物の處分を爲せる事實を擧げることが出来る(註九)。又檢非違使廳が此の法令に基き土地の處分を命じたる例は、建武元年五月六日、比志島彦太郎の訴狀により、薩摩國衙に命令を下し、比志島義範の本物返の地を處分せしめたことがある(註一〇)。爾來、質券、本物返等に關する訴訟は、皆この檢非違使

廳の建武元年五月三日の法令によつて處分せらるゝことゝなつた。但し此の法令の施行が何年頃まで存続せるかは不明である。

**註一** 河内和泉兩國相爭燒陶代薪之山。依朝使左衛門少尉紀今影等勘定。爲和泉國之地。(三代實錄、卷二、貞觀元年四月廿一日丙午條、二七頁)

**註二** 谷森健男「檢非違使ヲ中心トシタル平安時代ノ警察狀態」四五頁。

**註三** この事案は左衛門少尉中原資清が勅旨に依りて、東寺、成願寺、相論の伊勢國多氣、飯野兩郡内田地の理非を勘申せるに對し、明法博士中原範政が勘文を上りて之を反駁し、更に資清再び勘文を上つて之に對抗せるもので、兩者の論争は東寺百合文書に收められて居り、大日本史料は第三編之五(五一三—五三四頁)に於て之を載せてゐる。

**註四** 鎌倉時代に於ては、幕府の管掌する民事の訴訟裁判は之を雜務沙汰と稱し一般庶民の賣買、質入、貸借、田畠、奴婢に關するものを包含した。この外は所務沙汰と稱し、御家人の所領の争訟に關するものもあつたが、これも廣義の民事の訴訟、裁判には屬するも、御家人なる特殊身分の制限を受くる意味に於て、雜務沙汰の如き一般的なる民事の訴訟裁判とは云ひ得ない。雜務沙汰を審理判決する機關は、地方に於ては原則として地方代官にして、京都及び及び鎌倉に於ては、六波羅及び政所であつた。

**註五** 一可停止私出舉利過一倍事。

仰。三代之格。雖爲半倍。雜令之文。猶極一倍。云彼云是。不可不用。但近年其利日加。其物月增。謬以重質。更代輕財。一年之中。以半倍雖爲利分。兩年之後。以一倍爲定數。早下知京畿諸國。自今已後。一倍之外。縱雖出證文。慥令縱禁遏。不拘制法。若猶違犯者。令負人觸訴使廳。宜糾返文書。慥沒官其物。

(建久二年三月廿八日宣旨、大日本史料、第四編之三、四五一頁)

**註六** 一可禁斷私出舉利過一倍。并舉錢利過半倍事。

右同狀稱出舉之利。令格相存。而下民之輩。至于過期。廻利爲本。過責爲失。未經幾歲。忽及數倍。殆煩王臣家。動妨諸庄園。如斯之漸責在朝家。且仰京畿諸國等。且任弘仁建久格雖過四百八十日。不得過一倍。於舉錢者。宜限一年。以半倍利。縱雖積年紀。莫令加增。縱雖出於證文。莫令叙用。若猶

有違犯者。令負人觸訴使廳。糾返文書。沒官其物者。以前條々事宜旨到來之節。下知先畢。守狀跡可令禁斷焉。宜下旨其篇雖多。於件三箇條者。嚴制殊重。若有違犯之輩者。不日可注進交名之狀。依鎌倉殿仰。下知如件。

嘉祿二年正月廿六日

武藏守平判

相模守平判

(新編追加、政所篇、四九八頁)

註七 泉涌寺文書、大日本史料、第六編之四、一四五——一四九頁。

註八 檢非違使廳 牒諸國衙

當國住人申。負物并本物返質券田畠事。右任國任格制。令計成敗。有子細者。可被注進之者。以牒。

建武元年五月三日

右衛門尉中原(在判)

負物半倍本錢返半倍。依爲其結解。過半倍者。非取返田畠所過用途。本主可返之。質券法却年記沽却同前。

沽却地事。

承久以來沽却不可依御下文。買主滅亡者。本主可進退之。兩方共參御方致軍忠。且有其沙汰。元德三年以後。殊以本主可進退之。

建武元十四神崎別當社參持之間寫之(花押)

(香取文書、大日本史料、第六編之一、五五五頁)

註九 年記沽却地事。如使廳之法。遂結解。買主及半倍令所務者。沽主返領。不可有子細候。負物事。同以半倍可致其辨候。向後守此法可有成敗候也。謹言。

八月十三日

(千葉)  
貞胤 (在判)

圓城寺圖書右衛門入道殿

(香取文書、大日本史料、第六編之一、七二三——四頁)

註一〇 薩摩國滿家院内比志島彦太郎義範謹言上。

欲且達天聽。任善政。剎賜本物返地事。

右壹所者。義範重代相傳之所領也。而此內山口田壹町、并□竹內屋敷壹ヶ所。爲同國伊集院。大隅助三郎忠國。吉正□□爲本物返。令入置于貳拾貫之三處。既過半倍□□上者。早任證例。可知行之旨。下預御牒。爲備向後

龜鏡。恐々言上□如件。

建武元年五月日



檢非違使廳下

薩摩國衙

當國滿家院内比志島彦太郎義範申。

山口田壹町。并竹中屋敷壹所本物返事。右訴狀如此。早令尋成敗。有子  
細者可被注進者。

建武元年五月六日

左衛門權少尉□□（花押）

（薩藩舊記、大日本史料、第六編之一、五六〇頁）

## 第六章 檢非違使の職制

### 第一 總 說

通常、檢非違使と稱するは、左右衛門權佐、左右衛門尉、左右衛門志、左右衛門府生にして使の宣旨を蒙りたる者を云ひ、左右の衛門府長官たる督は、之を特に檢非違使別當と稱し、單に檢非違使とは云はない。又、檢非違使廳には、檢非違使の外に、看督長、案主長、下部等が所屬するも、これは檢非違使廳の下級職員にして、これ又檢非違使とは云はない。

檢非違使の統率者を檢非違使別當と云ひ、通常、中納言を以て之に親補し、衛門兵衛の長官たる督を以て之に補す(註一)。而して檢非違使には、通常衛門府官人を以て之に補すが故に(註二)、左右衛門權佐、左右衛門尉、左右衛門志、左右衛門府生等の各階級に相當して、檢非違使間にも檢非違使佐、檢非違使尉、檢非違使志、檢非違使府生等の階級が存するが如くであるが(註三)、實は、これは單なる通稱に過ぎず、檢非違使それ自體には、かゝる地位の階級別なく、強ひて地位の上下を明かならしめんとすれば、檢非違使左右衛門權佐、檢非違使左右衛門尉、檢非違使左右衛門志、檢非違使左右衛門府生と云ふべきである(註四)。又、檢非違使任命の辭令を見るに、長官のみは「檢非違使別當」の名稱を用ゐる外(註五)、他は別に檢非違使佐、檢非違使尉、檢非違使志、檢非違使府生等の名稱はなく、是等は一律に、單に「檢非違使」なる名稱のみなることよりしても(註六)、別當以外の檢非違使そのものには何等の差別的名稱なく、たゞ單に檢非違使の職に在る衛府官人を統率すべき長官のみを別當と稱するに過ぎない。然し檢非違使そのものには階級もなく、差別的名稱もないが、檢非違使に補せらるゝ衛門府官人に至つては、依然として督、佐、尉、志及び府生の階級が存する

爲め、衛門尉を本官として有する檢非違使と、衛門志を本官として有する檢非違使との間には、自から上下の階級別の存するを認めざるを得ない。されば以下、檢非違使佐、檢非違使尉、檢非違使志、檢非違使府生と稱し、或は單に佐、尉、志、府生と稱するは、いづれも本官が夫々衛門權佐、衛門尉、衛門志、衛門府生なる檢非違使の意である。

註一 檢非違使別當。中納言參議中爲公達衛府督撰人補之。(官職祕鈔、下、六一四頁)

檢非違使別當。參議已上。尤擇其人也。補此職之人必帶衛門兵衛督。(職原鈔、下、六四三頁)

檢非違使なる職名を有する衛府官人を以て構成する檢非違使廳の長官を檢非違使別當と稱するのは、大審院判事なる職名を有する判事を以て構成する大審院の院長(長官)を大審院長と稱するが如くである

註二 檢非違使。但別當以下爲宣下職。爲衛府之人補之。(職原鈔、下、六四三頁)

註三 是曰。喚左右京亮。左右衛門。檢非違使佐<sup>〇</sup>並<sup>〇</sup>四人。於殿前宣勅。遣勘錄本西兩京飢病百姓。特加賑恤。以陰霖經曰。穀價踊貴也。(續日本後紀、卷六、承和四年十月辛卯朔條、六九頁)

正六位上行少判事中原朝臣範光。誠惶誠恐謹言。請特蒙 天恩因准先例遷拜明法博士信貞申受領。並檢非違使志<sup>〇</sup>明兼申轉任替狀云々。(朝野群載、卷九、一九七頁)

(前略)謹檢案内。爲檢非違使府生者。使奏轉任志者。承前之例也云々。(朝野群載、卷十一、二一一頁)

註四 仰云。權大納言兼民部卿皇后宮大夫源朝臣經信宣。奉 勅。檢非違使左衛門少尉<sup>〇</sup>平兼倫。右衛門少志<sup>〇</sup>中原範政。勘問囚人間。狼狽爭論云々。(朝野群載、卷十一、二二九頁)

正六位上行式部少錄上野朝臣義定。誠惶誠恐謹言。請特蒙 天恩。因准先例。拜任檢非違使右衛門志<sup>〇</sup>惟宗國任申轉任替狀云々。(朝野群載、卷九、一九六頁)

(前略)大納言兼右近衛大將藤原朝臣保忠宣。奉 勅。檢非違使左衛門府生<sup>〇</sup>大原忠宗。右衛門府生若江善邦等。宜差巡檢伊勢齊親王上道。大和伊賀兩國



道橋使者云々。(朝野群載、卷十一、二一八頁)

**註五** 大納言從三位左近衛大將春宮大夫藤原朝臣時平宣。奉 勅。以參議正四位下行右衛門督源朝臣貞恒。爲<sup>〇</sup>檢<sup>〇</sup>非<sup>〇</sup>違<sup>〇</sup>使<sup>〇</sup>別當者。

寛平五年六月十五日

左衛門權佐藤原朝臣知道

(朝野群載、卷十一、二〇九頁)

**註六** 太政官符左衛門府 承知下彈正左馬寮 外印

正六位上行少尉平朝臣中方

正六位上行少志惟宗朝臣博愛

右左大臣宣。奉 勅。件人宜爲<sup>〇</sup>檢<sup>〇</sup>非<sup>〇</sup>違<sup>〇</sup>使者。府宜承知依宣行之。符到奉行。

左大辨

左大史

長保三年二月三日

(類聚符宣抄、第七、檢非違使、一七四頁)

應和四年四月廿一日。令文範朝臣仰民部卿藤原。右少志美經定信。左府生能登公藤。可爲<sup>〇</sup>檢<sup>〇</sup>非<sup>〇</sup>違<sup>〇</sup>使。(西宮記、卷十三、臨時一裏書、三三一頁)

## 第 二 檢非違使の定員數

檢非違使の員數に關しては、各時代により、それぞれ増減があり一定せざるも (註一)、特に或る時代を限つて見る時は、そこには矢張り定員數の規定が見られる。

日本紀略、寛平六年十二月五日癸巳條によれば、暫定的に檢非違使七人を配置せることが見えてゐるが (註二)、これは西宮記に、寛平七年(895)の檢非違使員數が左右合せて佐四人、尉四人、府生二人と記せるのと比較して (註三)、前者の檢非違使七人は全員の謂であり、別に定員外に七人を増加せるの謂ではあるまい。その他、西宮記によれば天慶三年(940)には左右合せて佐二人、尉五人、志三人、府生四人、同九年(949)には左右合せて佐二人、尉五人、志二人、府生四人と見え (註四)、新儀式によれば、別當一人、佐二人、尉四人、志四人、府生四人とあるが、但し其の補充は關

員ある場合に限り、又その左右の員數の多少も一定せずと見えてゐる（註五）。

註一 康保元年十一月七日云々。仰云。檢非違使員數。佐。尉。志。府生之間。加減有前例。（西宮記、卷十三、臨時一裏書、三三一頁）

註二 暫置檢非違使七人。（日本紀略、前篇二十、寛平六年十二月五日癸巳條、七六四頁）

註三 康保元年十一月七日云々。仰云。檢非違使員數。佐。尉。志。府生之間。加減有前例。近則寛平七年。左右合佐四人。尉四人。府生二人。（西宮記、卷十三、臨時一裏書、三三一頁）

註四 （前略）天慶三年。左右佐二人。尉五人。志三人。府生四人。同九年。左右佐二人。尉五人。志二人。府生四人云々。（西宮記、卷十三、臨時一裏書、三三一頁）

註五 定檢非違使事。召大臣。於御前。定補別當一人。并佐二人。尉四人。志四人。府生四人。但隨闕補之。其左右多少亦以不定。具見補任諸門職之例。（新儀式、第五、群書類從、第五輯、六七頁）

### 第 三 檢非違使の補任

#### （I）任用資格

檢非違使別當は、太政官の參議以上、通常は中納言（從三位相當）を以て補し、必ず衛門兵衛兩府の長官たる衛門督兵衛督を兼任することを要する（註一）。大納言（正三位相當）にして之に補せられたる者は稀であるが、參議（正四位下）にして別當に補せらるゝ場合は、中納言に闕員を生じたる時に限られる（註二）。次官以下の左、尉及び志は何れも衛門府官人を以て補すを通例とし、稀には近衛府、兵衛府の官人（いづれも武官）を以て兼補せしむることもある（註三）。又、特別に非成業と稱する院主典代廳官、太政官の史生、藏人所の出納、諸家の下家司の中にて譜第器用の者は、まづ左右衛門府生に任じて、後に檢非違使に補せらるゝ場合もある（註四）。いづれにしても、檢非違使は無官の者を以て之に補すことはなく、必ず別に本

官を有する者、通常、衛門府官人たることを以て任用の第一有資格者とされる。

## (II) 通常任用法

### (i) 使宣旨を蒙ること

檢非違使は別當以下、いづれも宣下の職なるを以て(註五)、定期の任官叙勳たる除目により補せらるゝものでなく、臨時に宣旨を賜ることにより補せられる。之を稱して「檢非違使宣旨を蒙る」(註六)、或は略して「使の宣旨を蒙る」と云ひ(註七)、通常、別當には宣旨を賜ることにより親補せられ、佐以下には太政官符の形式にて之を賜り、檢非違使任命の辭令とされる(註八)。尙、所謂「使宣旨」を蒙る場合の形式は次の如くである。

#### 補檢非違使別當

大納言從三位左近衛大將春宮大夫藤原朝臣時平

宣。奉 勅。以參議正四位下行右衛門督源朝臣貞恆。爲檢非違使別當。

寛平五年六月十五日

右衛門權佐藤原朝臣知道

(これは第十三代檢非違使別當源貞恆に賜れる使の宣旨である。尙、藤原時平は第十一代檢非違使別當を経て、大納言に累進せしものである。)(註九)

#### 補檢非違使

太政官符左衛門府

正六位上行少尉平朝臣中方

正六位上行少志惟宗朝臣博愛

右。左大臣宣。奉 勅。件人等宜爲檢非違使者。府宜承知。依宣行之。符到奉行。

左大辨

左大史

長保三年二月三日

(これは左衛門少尉平中方、左衛門少志惟宗博愛に下附せられたる太政官符である。左大臣とあるのは藤原道長である。)(註一〇)

尙、太政官より諸國檢非違使を任命する場合には、次の形式による(註一一)。この場合、諸國檢非違使たる者は、必ずしも京都檢非違使の如く衛府官人たることを要せざるが如くである。

補諸國檢非違使

太政官符大和國司 外

從八位上伴宿禰公扶

右。從三位守大納言源朝臣高宣。奉 勅。件人補彼國檢非違使者。國宜承知。依宣行之。其公解准一分給之。符到奉行。

右大辨

左大史

天曆八年二月廿三日

尙これと全く同一の形式であるが、大宰府の府檢非違使に關するものを掲げる(註一二)。

補府檢非違使

太政官符 太宰府

從五位上姓名

右。右大臣宣。奉 勅。件人宜補彼府檢非違使者。府宜承知。依宣行之。其公解一分事給之。符到奉行。

辨 史

年月日

(ii)請 狀

檢非違使の宣旨を蒙らんことを望む者は、通常、太政官に請狀を上らねばならぬ。その形式は次の如きものである(註一三)。

正六位上行左衛門少尉紀朝臣定遠、誠惶誠恐謹言

殊ニ天恩ヲ蒙リ、年勞竝ニ上日第一勞ニ依リ、檢非違使宣旨ヲ蒙ラン  
コトヲ請フノ狀。

身勞四十六年 左馬允勞十二年 當職勞卅四年 上日夜萬四千七百  
九十

拜任ノ後除セラレ七箇年上日夜定

右定遠謹ミテ案内ヲ檢スルニ、去ル天喜三年左馬允ニ任ジ、治暦四年當  
職ヲ拜除ス、其ノ間節會行幸ト謂ヒ、陣直警衛ト謂ヒ、當番非直ヲ尋ネ  
ズ、雨夜雪朝ヲ論ゼズ、偏ニヘ夙夜ノ節ヲ勵ミ、已ニ七十ノ算ニ盈ツ。  
爰ニ下薦ヨリ任ジテ、廷尉ノ輩ニ超補スルハ、歴記ヲ傳訪スルニ、都慮  
五十一人ナリ。遠クハ天長ヨリ、今ハ明時ニ至リ、靱負尉タルノ者、未  
ダ此ノ如キハ有ラズ。定遠年老ヒ勞久シク。身沉憂深ナル者ナリ。朝撰  
ノ處、亦哀憐ヲ仰ガン。望請スラク。天恩年勞竝ニ上日第一勞ニ依リ、  
延尉ニ補セラルレバ、彌々奉公ノ忠ヲ致サン。定遠誠惶誠恐謹言。

康和二年正月十八日 正六位上行左衛門少尉紀朝臣定遠

(この形式の如く、「殊ニ天恩ヲ蒙リ」とか、或は「先例ニ因准シ」とか云ふ句は、この時代の任官、轉任、昇進等の請狀に於ける定型の句にして、自己の希望の非例に非ざることを示すものである。殊に本文の趣意に至つ

ては、莊重の極みなることも亦この請狀の定型である。)

### (III)特別任用法

檢非違使には大體に於て定員數の規定の存するにより、その闕員の生ぜざる限り、之に補せらるゝことはなかつたが、後には特別の功勞により、特に檢非違使に補せらるゝの道が開かれた。これは畢竟檢非違使の地位に在ることが如何に名譽なるかを示すものである。後一條天皇の萬壽四年(1027)には、右衛門志豐原爲長が法成寺の造塔の功により檢非違使に補せられ(註一四)、後冷泉天皇の天喜三年(1055)には、藏人右兵衛尉源齋賴が禁中に侵入せし盜賊を逮捕せる功を以て、檢非違使宣旨を蒙れるが如きは(註一五)、その一例である。

### (IV)檢非違使の昇進

檢非違使に非ざる者が檢非違使たらんことを請ふ場合には、既述の如き請狀を上るのであるが、既に檢非違使の職に在る者が、更に昇進せんことを請ふ場合——この場合、多くは其の地位に闕員を生じたる時であるが——には請願狀とも云ふべき款狀を上り、之に對して檢非違使別當が其の款狀の内容の事實の有無を調査して、若し其の款狀の内容が正當なる場合には之を太政官に推舉する。その形式は次の如くである(註一六)。

天恩ヲ蒙リ、先例ニ因准シ、左衛門府生正六位上清原真人忠重ヲ以テ、志ノ闕ニ轉任セラレンコトヲ請フノ狀。

右忠重ノ<sup>イハ</sup>款狀ヲ得テ稱ク、謹ンデ案内ヲ檢スルニ、檢非違使府生タルノ者ハ、奏シテ志ニ轉任セシムルハ、承前ノ例ナリ。而シテ忠重使廳ノ勞、五十一年、頽暮ノ齒、八十餘歳、採擇ノ處、益ゾ哀憐ヲ仰ガザランヤト。今覆審ヲ加フルニ、申ス所實有リ。望請スラク。天恩先例ニ因准シ、件ノ闕ニ轉任セラレ、將ニ奉公ノ空シカラザルヲ知ラシメントス。仍テ事

狀ヲ勸シ、謹ミテ處分ヲ請フ。

天仁三年正月十六日

防鴨河使右衛門佐從五位上兼守右少辨藤原朝臣實光

修理右宮城使從四位上行右中辨兼左衛門權佐藤原朝臣顯隆

別當參議正二位左衛督兼備前權守源朝臣能俊

これは檢非違使府生たる清原忠重が、一階級上位なる檢非違使志に闕員を生じたるによつて、之に轉任されんことの請狀には相違ないが、前記の請狀と異なる所は、檢非違使左衛門府生より檢非違使左衛門志の闕に轉任せられんことを請ふ者は清原忠重なるも、之を推舉する者が連署されてゐることである。従つて檢非違使宣旨の請狀は本人自ら之を上ることを得るが、闕員による地位の昇進を望む者は、先ず款狀を上り、更に是れが推舉者たる別當及び佐の連署狀たる請狀を以てすることを要し、自ら直接に請狀を上るものに非ざることが知られる。尙この種のもので、檢非違使志中原範政が尉の闕に轉任せられんことの款狀に對して、之を推舉せる請狀を掲げよう(註一七)。

特ニ天恩ヲ蒙リ、先例ニ因准シ、正六位上行明法博士兼左衛門少志中原朝臣範政ヲ以テ、兼ネテ尉ノ闕ニ轉ゼラレンコトヲ請フノ狀。

右範政ノ款狀ヲ得テ云ハク。法曹ヨリ出デ、廷尉ニ居ルノ輩ハ、志ノ勞ニ依リ尉ニ轉ズルハ、古今ノ通規ナリ。沈滞ノ者ニ至リテモ、十有餘年ヲ過ギズ。近クハ則チ伴忠信、長徳二年四月右志ニ任ジ、長保元年五月右尉ニ轉ズ。四年ヲ歷ス。縣犬養爲政、長徳四年十二月左志ニ任ジ、寛弘二年十二月尉ニ轉ズ。八年ヲ歷ス。豐原爲時、長保四年三月左志ニ任ジ、寛弘元年十一月右尉ニ轉ズ。三年ヲ歷ス、同爲長、萬壽四年十二月左志

ニ任ジ、長元三年十月尉ニ轉ズ。四年ヲ歷ス。惟宗忠方、長元五年二月左志ニ任ジ、長久三年正月尉ニ轉ズ。十一年ヲ歷ス等是レナリ。羅縷ニ遑アラズ。而シテ範政去ル永保四年正月初メテ右志ニ任ジ、應德四年左志ニ遷リ、前後茲ニ勞スルコト十七箇年。其ノ間陣直恪勤、凡ソ紀錄ノ節及ビ臨時劇務ノ役ニハ、日夕奔波シ懈怠致ス無シ。茲ニ因リテ年來尉ノ闕有ル毎ニ申文ヲ奏スト雖モ、宿運已ニ拙ク、頻リニ渥澤ニ漏ル。早ク舉奏セラレ、多年ノ歎ヲ慰サンモノナリト。今款狀ニ依リテ、覆審ヲ加フルニ、申ス所實有リ。若シ優舉無クンバ、何ゾ後輩ヲ勵マサン。望請スラク。天恩先例ニ因准シ、件範政ヲ以テ、將ニ急ギテ尉ノ闕ニ轉ゼシメラレンコトヲ。仍テ在狀ヲ勒シ、謹ミテ處分ヲ請フ。

康和二年正月廿一日 右少辨正五位下兼行右衛門權佐藤原朝臣俊信  
左少辨正五位下兼行左衛門權佐藤原朝臣顯隆  
正二位行權中納言兼左衛門督藤原朝臣公實

#### (V) 檢非違使任用に因る位階昇叙

檢非違使は衛門府官人の兼帶する所なるが、檢非違使に補せらるゝ衛門府官人が、若し其の位階が七位以下なる場合には、特に之を六位に昇叙して檢非違使に補すことが慣例であつた。従つて七位以下の衛門府官人が檢非違使に補せらるゝことは、非常なる名譽と云べふきであつた。第十二代檢非違使別當源光が、新補官人の加階を奏請せる例は次の如くである（註一八）。

#### 檢非違使

請被特授六位官人等事

右衛門少志正七位下氷車貞椀

府生正七位上當世宿彌基宗

右衛門少志正七位下惟宗朝臣善經



右謹檢案内。七位已下者。補檢非違使之日。特授六位。望請。依承前例。將被特授。謹請。

寛平六年八月十一日

右衛門權佐源朝臣當時

左衛門權佐源朝臣唱

別當中納言兼左衛門督源朝臣光

- 註一** 別當一人。參議已上。擇其人也。補此職之人。必帶衛門兵衛督。(職原鈔、下、六四三頁)
- 註二** 仍至大納言帶此職。近代又未聞事也。(中略)參議大理者。過納言闕之時必任之。(職原鈔、下、六四三頁)
- 註三** 佐尉志必衛門也。但近衛兵衛邂逅有例云。(職原鈔、下、六四四頁)
- 註四** 非成業之輩轉任。爲規模。稱非成輩者。院主典代廳官。太政官史生。藏人所出納。諸家下家司中。譜第器用者。先左右衛門府生。蒙使宣旨也。(職原鈔、下、六四四頁)
- 註五** 但別當以下爲宣下職。爲衛府之人補之。(職原鈔、下、六四三頁)
- 註六** (前略)犯人籠禁中。藏人左兵衛尉源齊賴。竝瀧口源初。小野幸任等捕進件犯人。仍齊賴蒙檢非違使宣旨云々。(扶桑略記、第廿九、天喜三年二月十八日條、二九三頁)
- 註七** 此御時平の將門といふ者あり、上總介高望が孫なり、執政(藤原憲平)の家につかうまつりけるが使の宣旨を望み申けり、不許なるによりいきどほりをなし東國に下向して叛逆をおこしき。(神皇正統記、群書類從、第二輯、七四頁)
- 貞元。建久四年四月一日。任明法博士并左衛門大尉。蒙使宣旨。(尊卑文脈卷十九、大江氏系圖、故實叢書、第十二冊、一四頁)
- 但し右の故實叢書所收の尊卑文脈によれば、建久四年四月一日と記してあるが、吾妻鏡、卷十二、建久三年三月二日條。百鍊抄、第十、建久二年四月一日條等により、建久二年四月一日と訂正すべきである。
- 註八** 補檢非違使事。上卿奉勅。仰下辨官。但別當宣旨。佐已下官符。(西宮記、卷十四、臨時二、三六四頁)

**註九** 朝野群載、卷十一、寛平五年六月十五日宣旨、二〇九頁。

**註一〇** 類聚符宣抄、第七、檢非違使、一七四頁。

**註一一** 類聚符宣抄、第七、諸國檢非違使、一七四頁。

**註一二** 朝野群載、卷二十、三六〇頁。

**註一三** 正六位上行左衛門少尉紀朝臣定遠 誠惶誠恐謹言

請殊蒙 天恩、依年勞并上日第一勞、蒙檢非違使 宣旨狀、

身勞四十六年、左馬允勞十二年、當職勞卅四年、上日夜萬四千七百九十  
拜任之後被除七箇年上日夜定

右定遠謹檢案内。去天喜三年任左馬允。治曆四年拜除當職。其間調節會行幸。謂陣直警衛。不尋當番非直。不論雨夜雪朝。偏勵夙夜之節。已盈七十之節。爰任自下蔭。超補廷尉之輩。情訪歷記。都慮五十一人矣。遠自天長。今至明時。爲輒負尉之者。未有如此。定遠年老勞久。身沉憂深者。朝撰之處。亦仰哀憐。望請 天恩依年勞并上日第一勞。被補廷尉者。彌致奉公之忠矣。定遠誠惶誠恐謹言。

康和二年正月十八日

正六位上行左衛門少尉紀朝臣定遠

(朝野群載、卷九、一九七頁)

**註一四** (前略)宜以右衛門志豐原爲長補檢非違使。但檢非違使雖無其闕。共有造塔之功。殊被抽賞也。(扶桑略記、第廿八、萬壽四年十一月廿六日壬戌條、二八〇頁)

**註一五** (前略)犯人籠禁中。藏人左兵衛尉源齊賴。竝瀧口源初。小野幸任等捕進件犯人。仍齊賴蒙檢非違使宣旨云々。(扶桑略記、第廿九、天喜三年三月十八日條、二九三頁)

**註一六** 請被殊蒙 天恩。因准先例。以左衛門府生正六位上清原真人忠重。轉任志闕狀。

右得忠重款狀稱。謹檢案内。爲檢非違使府生之者。使奏轉任志者。承前之例也。而忠重使廳之勞。五十一年。類暮之齒。八十餘歲。採擇之處。盡仰哀憐者。今加覆審。所申有實。望請 天恩因准先例。被轉任件闕者。將令知奉

公之不空。仍勒事狀。謹請 處分。

天仁三年正月十六日

防鴨河使右衛門佐從五位上兼守右少辨藤原朝臣實光

修理右宮城使從四位上行右中辨兼左衛門權佐藤原朝臣顯隆

別當參議正二位左兵衛督兼備前權守源朝臣能俊

(朝野群載、卷十一、二一一頁)

**註一七** 請被特蒙 天恩。因准先例。以正六位上行明法博士兼左衛門少志中原朝臣範政。兼轉尉闕狀。

右得範政款狀云。出自法曹。居廷尉之輩。依必勞轉尉。古今之通規也。至流滯之者。不過十有餘年。近則伴忠信。長德二年四月任右志。長保元年五月轉右尉(歷四年)。縣犬養爲政。長德四年十二月任左必。寬弘二年十二月轉(歷四年)。豐原爲時。長保四年二月任左志。寬弘元年十一月轉右尉(歷三年)。同爲長。萬壽四年十二月任左志。長元三年十月轉尉(歷四年)。惟宗忠方。長元五年二月任左志。長久三年正月轉尉(歷十一年)等是也。不違羅縷。而範政去永保四年正月初任右志。應德四年遷左志。前後勞于茲十七箇年。其間陣直恪勸。凡記錄之節。及臨時劇務之役。日夕奔波無致懈怠。因茲年來每有尉闕。雖奏申文。宿遲已拙。頻漏渥澤。早被舉奏。慰多年之歎者。今依款狀。加覆審。所申有實。若無優擧。何勵後輩。望請 天恩。因准先例。以件範政。將被令急轉尉闕。仍勒在狀。謹請 處分

康和二年正月廿一日

右少辨正五位下兼行右衛門權佐藤原朝臣俊信

左少辨正五位下兼行左衛門權佐藤原朝臣顯隆

正二位行權中納言兼左衛門督藤原朝臣公實

(朝野群載、卷十一、二一〇頁)

**註一八** 政事要略、卷六十一、糾彈雜事一、五三二頁

## 第 四 檢非違使の派遣

諸國(京師以外)には國の檢非違使が置かれ、國內の非違檢察に従へるも、又中央の太政官よりも檢非違使廳に所屬する檢非違使を近國に派遣して、非違の檢察に従事せしむることもあつた。是等の場合には、檢非違使を派

遣すべき國々へ、宣旨に基き太政官より通牒が發せらるゝのが正式の手續なるも、太政官符發布の手續が煩瑣なるため、事急を要する場合には、一先づ辨官下文の形式にて行はれ、追つて官符が下される様になつた。その形式は次の如くである。

左辨官下 大和國

使檢非違使左衛門權少尉安倍延行	從三人
少志美奴理明	從二人
左右看督長二人	從各一人
火長三人	

右、左大臣宣、奉 勅。爲糺行春日祭濫行。差件等人發遣如件。國宜承知。依宣行之者。仰彼之國。依例供給。官符追下。

年 月日

右大史

右少辨

(これは檢非違使が春日神社の祭禮に於ける濫行糺察の目的を以て、派遣せられたる時の辨官下文である)(註一)

左辨官下 大和國

應勤行檢非違使供給事

右衛門權大尉藤原顯輔	從三人火長二人
右衛門大尉平時道	從三人火長二人
左右看督長二人	從各一人

右權中納言源朝臣道方宣。奉 勅。爲令追捕強盜。差件等人。宛使發遣如件。國宜承知。依宣行之。仰彼之國。依例供給。官符追下。

萬壽二年五月三日

左大史中臣朝臣

## 中辨源朝臣

(これは檢非違使が強盜追捕の爲めに、大和國へ派遣せられたる時の辨官下文であるが、その目的が京都の檢非違使廳管下に於ける強盜犯人が大和國へ逃亡せる爲めであるか、又大和國に強盜事件發生せるが爲めであるかは明かでない。)(註二)

註一 朝野群載、卷十一、二一五頁。

註二 朝野群載、卷十一、二一六頁。

## 第 五 別當宣と檢非違使廳令

檢非違使廳より對外的に發せらるゝ命令、通牒その他を總稱して、こゝに檢非違使廳令と名付ける。その主要なるものには、檢非違使廳下文、檢非違使廳下知狀、檢非違使廳移、檢非違使廳牒等にして、前三者は檢非違使廳の長官別當の命令たる別當宣即ち廳宣を以て、その發令を命ぜらるゝものである。以下、先づ別當宣の内容を示し、次いで之と其他の廳令との關係に就て述べる。

## (1) 別 當 宣

檢非違使別當の命令を別當宣と云ひ、又、檢非違使別當が檢非違使廳の長官なるを以て、別に之を廳宣とも云ふ(註一)。別當宣は其の權威重く、之に違背するに於ては、正に違勅の罪に准じて處斷せらるゝ程であつた(註二)。

かくの如く權威ある別當宣は、別當の名を以て直接發せらるゝことはなく、多くの場合、檢非違使佐が本官たる衛門權佐の名に於て、別當宣たることを明示することによつて發せられる。例へば次例の如くである(註三)。

別當中納言從三位源朝臣光宣。奉 勅。左右檢非違使等。行政之日。免不直彈之責者。

寛平八年十月十一日 左衛門權左源朝臣實 奉

次に又、別當宣の内容を其のまゝ載せずして、別當宣の趣旨を檢非違使佐が、本官たる衛門權佐の名に於て、別に發する場合もある。例へば次例の如くである（註四）。

別當宣ヲ被リテ稱<sup>イハ</sup>ク。宣旨官符ヲ蒙リ城外ニ出ヅルノ官人等、宣旨ノ外、左右看督長等、或ハ三四人、或ハ五六人、意ニ任セテ隨身シ、使所ニ赴向ス。自今以後、宣旨ノ外ハ、其ノ數ヲ過グルヲ得ズ。但シ看督長等ヲ隨身スルニ於テハ、先ヅ其ノ交名ヲ注シ、佐ニ觸ルベキモノナリ。

天慶五年閏三月廿八日 防鴨河使右衛門權佐兼丹波守平朝臣隨時奉

別當宣と其の他の廳令との關係は、王朝時代の記録が残存せざるが故に不明であるが（註五）、南北朝時代のものは、訴訟關係の記録に於て之を見ることが出来、多少その關係が明かなるを以て、次に之を掲げる。

## （Ⅱ）檢非違使廳下文

「別當宣」

泉涌寺別院二階堂領。七條町以下四箇所田地事。任評定之趣。可令下知給之由。別當殿仰所候也。仍執達如件。

四月十二日

豐後介俊盛

謹上 博士大夫判官殿

この別當宣（註六）、が如何なる理由により發せられたるものなるかに就ては、第五章、第二節に於て説明せるが如くであるが、之によると二階堂領の田地に就ては、「評定ニ任スノ趣、下知セシメ給フベキノ由、別當殿仰

セノ所ニテ候ナリ」として、宛名は檢非違使廳の判官となつてゐる。従つて別當宣なるものは、之を以て直ちに當事者に通達せらるべきものに非ずして、別當が自己の命令を當事者に通達すべきことを、判官に命ずるものであると解される。故に別當の命令の内容は、更に之を檢非違使廳の下文によつて當事者に通達せらるゝことになるのである。即ち次の如くである。  
(註七)。

「檢非違使廳下文」

檢非違使廳下

泉涌寺別院二階方丈

七條以下四箇所田地事

右別當宣 副諸官評  
定 目 録 如斯、可令存知之狀、下知如件、

曆應二年四月十二日

大判事兼明法博士左衛門大尉坂上大宿彌(花押)

之によると、檢非違使廳下文を當事者に傳達する時には、別當宣に諸官評定目録と稱する、請求趣旨に對する係官の裁決理由書を副へて出され、下文には之に就ての檢非違使廳としての下知を記載するのであるが、實は此の下文は一の添狀としての附隨的效力を有するに過ぎず、右の泉涌寺より檢非違使廳に對して提起せる訴の請求は、別當宣の發せらるゝ時に、既に確定されたるものと解せられる。然し別當宣、諸官評定目録、檢非違使廳下文の三者は、いづれも同日の日附を以て出されるが故に、請求趣旨の確認せらるゝの日時に就ては問題はない筈である (註八)。

### (III) 檢非違使廳下知狀

別當宣は必ずしも下文の形式によつてのみ、之を當事者に傳ふべきものとは限らぬ。即ち檢非違使廳よりの下知狀を以てする場合もある。

事案は南朝興國元年(1340)即ち北朝曆應三年二月五日、京都四條道場た

る金蓮寺に於て、京都四條の淨阿上人が御堂建立に就き、その敷地の公認方を檢非違使廳に請求せるに對して、翌年閏四月二十八日、時の檢非違使別當たる柳原資明が檢非違使廳に之を沙汰せしめたるものであるが、その別當宣と下知狀とは次の如くである（註九）

「別當宣」

淨阿上人申四條京極敷地事。任沙汰之趣。可令下知給之由。別當殿仰所候也。仍執達如件。

後四月二十八日

前石見守俊盛

謹上 勢多大夫判官殿

「下知狀」

四條京極金蓮寺敷地三ヶ所事 別當宣 副諸官  
評定文 如斯。早可令存知給。仍執達如件。

曆應四年後四月二十八日

左衛門權少尉(花押)

謹上 淨阿上人御房

この下知狀と下文との形式の相違は、下文にあつては冒頭に於て「檢非違使廳下」として、その下に當事者の宛名を記載せるに對し、下知狀には之を要せざることである

尙、異例ではあるが、別當宣に「沙汰＝任ス」の前提として作成せらるべき諸官評定目録(諸官評定文)を副へずして、別當宣を以て直ちに訴の趣旨を確認される場合もある。但し之を當事者に通達する手續は、やはり下文或は下知狀によること勿論である。即ち次の如きものである(註一〇)。

「別當宣」



尊勝僧正被申。自性院本尊聖教並文書紛失事。諸官連署狀。披露候之處。  
被聞食候之由。別當殿。仰所候也。仍執達如件。

曆應四年十一月三日

前石見守俊盛

謹上 正親町博士大夫判官殿

これは北朝曆應四年十一月三日(南朝興國二年、1341)、時の檢非違使別當柳原資明が、仁和寺尊勝院僧正の請により、自性院本尊聖教及び文書等の紛失せしことを確認せる別當宣である。出典は仁和寺文書であるが、之によると、通例は「沙汰ニ任スノ趣、下知セシメ給フベキノ由、」とあるべき所を、「諸官連署狀、披露候ノ處、聞コシメサレ候ノ由、」となつてゐるが、これは紛失狀請求の訴狀に附加する諸官の連署狀によつて事實の認定がなされ、實地檢證による諸官評定目録作成の手續を省略して、直ちに下文に移されたるものと思はれる。

#### (IV) 檢非違使移

第二章に於て檢非違使廳の地位を述ぶる際に一言せる如く、「移」は自己と對等の地位に在る官司へ發する通牒を云ふ。従つて、その内容は命令ではなく、依頼乃至督促に關する場合が多い。殊に檢非違使廳に於ては盜賊の追捕に關して多く發せられる様である。但し犯人が檢非違使廳管下の京都に於て犯罪を犯して他國に逃亡せる場合に限らず、檢非違使廳管轄外に於て發生せる犯罪に關しても、其の犯人を逮捕せんとする場合にも發せられる。次に掲ぐる檢非違使移は、海賊逮捕に關して檢非違使廳より山陽、南海兩道に至る各國衙(地方行政廳)に對し、備前守定盛をして之を逮捕せしむることを通告せるものである(註一 一)。

檢非違使移 山陽南海兩道國衙

備前守忠盛ヲシテ海賊ヲ搦進セシメラレンコトヲ欲スル事。

右。院宣ニ稱ク。聞ク如ク、頃日海路ノ間、凶賊滋蔓シ、數十艘ノ船ニ  
 乗り、百萬里ノ波ニ浮ブ。或ハ往反ノ旅客ヲ殺略シ、或ハ公私ノ勝載ヲ  
 却奪シ、積惡彌々長ジ、宿暴日ニ成ル。寔ニ惟レ諸國司等、各驍勇ヲ憚  
 リ、捉搦スル心無キノ致ス所ナリ。宜シク忠盛朝臣ヲシテ、件輩ヲ搦進  
 セシムベキモノナリ。早く院宣ニ任セテ、彼ノ賊徒ヲ搦進セシメラレン  
 コトヲ欲スルノ狀、別當宣ニ依リ、移進スルコト件ノ如シ。乞フ衙狀ヲ  
 察センコトヲ。故ニ移ス。

大治四年三月

正六位上行右衛門尉明法博士中原朝臣明兼

從五位下行左衛門少尉源朝臣輔遠

即ち「別當宣ニ依リ、移進スルコト件ノ如シ、」とあるを以て、これ亦、別當宣により發令さるゝものなることは明かであるが、その別當宣の内容は缺逸である。

#### (V) 檢非違使廳牒

元來、「牒」なる形式を以てせる文書は、公式令に「内外ノ官人、主典以上、事ニ縁リテ諸司ニ申牒ス云々。」とある如く（註一ニ）、官人が官司に對して上達する文書、即ち私より公への文書の意である。然るに太政官や八省、彈正臺より發する太政官牒、省臺牒は、これとは全く其の意義を異にし、太政官符、省臺符と殆ど同様の意義を有し、たゞ之を發すべき相手方が、特に寺院若しくは寺院關係のもの（例之、僧綱）（註一ニ）に限つて、符に代つて此の牒が出された。然るに此の牒は、更に三轉して藏人所、雜訴決斷所等の、所謂令外官より出される場合には、又別の意義を有するに至つた。即ち此の場合に於ける牒とは、朝廷の領地や所有財産に關係ある事項に就て發せられ、敢て寺院關係の事項とは限らざるに至つた。檢非違使廳の發する檢非違使廳牒も亦この第三の意義に屬するものにして、次に掲

ぐる檢非違使廳牒は、南北朝時代、建武元年(1333)五月三日、檢非違使廳より全國の國衙に宛て發したるものにして、<sup>フモツ</sup>負物(利息附消費貸借の目的物)、<sup>ホンモノガヘシ</sup>本物返(賣渡擔保)、質地(質權の目的物たる土地)等に関して、本錢(元本)の半倍を償還せし者には、その物を債權者より返還せしむる一種の徳政令の發令である(註一四)。

### 檢非違使廳 牒諸國衙

當國住人申。負物並本物返質券田畠事。

右。任國任格別。令計成敗。有子細者。可被注進之者。以牒。

建武元年五月三日

右衛門尉中原(在判)

註一 別當宣者即廳宣也。(職原鈔、下、六四三頁)

廳宣と申は檢非違使廳宣事也。院廳下文をも廳宣と云。去ながら檢非違使別當宣の如くをし出しては申さぬ也。(官職難儀、七二一頁)

一廳宣事。檢非違使別當也別當號は職に付て其類有と云其普通に廳宣と申事ハ別當宣の外にハ別に候はぬよし被仰出候。(有職問答、續々群書類從、古書保存會本、第三冊、六頁)

註二 別當宣者即廳宣也。古來被准勅宣。仍天下重之。違背廳宣者。可准違勅云々。(職原鈔、下、六四三頁)

註三 政事要略、卷六十一、糺彈雜事一、五二九頁。

註四 被別當宣稱。蒙 宣旨官符。出城外之官人等。宣旨之外。左右看督長等。或三四人。或五六人。任意隨身。赴向使所。自今以後。宣旨之外。不得過其數。但于隨身看督長等。先注其交名。可觸佐者。

天慶五年閏三月廿八日 防鴨河使右衛門權佐兼丹波守平朝臣隨時 奉

註五 文學士勝峯月溪「古文書學概論」三五五頁

註六 泉涌寺文書、大日本史料、第六編之四、一四七頁

註七 泉涌寺文書、大日本史料、第六編之四、一四九頁。

註八 本件訴訟の詳細は第五章に記す如くであるが、これは南北朝時代に於ける

ものにして、北朝建武四年三月九日(1339)、泉涌寺別院二階方丈より、檢非違使廳に對して、京都七條以下四箇所田地の所有權確認の訴を提起せるに對して、曆應二年四月十二日(1339)、その判決が下されたるものである。

**註九** 金蓮寺文書、大日本史料、第六編之六、七七七—七八頁。

**註一〇** 仁和寺文書、大日本史料、第六編之六、九六八頁。

**註一一** 檢非違使移。 山陽南海兩道國衙。

欲被令備前守忠盛朝臣搦進海賊事。

右。院宣稱。如聞者。頃日海路之間。凶賊滋蔓。乘數十艘之船。浮百萬里之波。或殺略往反之旅客。或却奪公私之勝載。積惡彌長。宿暴日成。寔惟諸國司等。各憚驍勇。無心捉搦之所致也。宜令忠盛朝臣搦進件輩者。欲被早任院宣。令搦進彼賊徒之狀。依別當宣。移進如件。乞也衙察狀。故移。

大治四年三月

正六位上行右衛門尉明法博士中原朝臣明兼

從五位下行左衛門少尉源朝臣輔遠

(朝野群載、卷十一、二三六頁)

**註一二** 牒式。右内外官人。主典以上。緣事申牒諸司式云々。(令義解、卷七、公式令、二二四頁)

**註一三** 正倉院文書所收、天平神護三年二月二十八日民部省牒は東大寺三綱所宛となつてゐる。(大日本古文書、五、六五二—五頁)

又、石清水文書所收の承平七年十月四日大宰府牒の宛名は宮崎神宮となつてゐる。(大日本古文書、家わけ第四、石清水文書、第二冊、二三〇—二頁)

**註一四** 香取文書、大日本史料、第六編之一、五五三—六頁。

## 第七章 檢非違使廳の組織

檢非違使廳には長官別當以下、佐、尉、志、府生、看督長、案主長、火長、下部等の職員が置かれる。この中、府生以上を上級職員となし、通常檢非違使と稱するのは、是等の職員(別當を除く)に外ならぬ。又看督長以下は何れも下級職員にして、檢非違使監督の下に、檢非違使廳の雜務に従ふものである。

### 第一 檢 非 違 使 別 當

#### (Ⅰ)資格の一(官位)

檢非違使別當は檢非違使の統率者にして、檢非違使廳の長官である。一名を以て定員とする。別當と云ふ名稱は、本官の外に、別に他官の役にも當ると云ふ意にして、兼官の意とは異なる(註一)。

檢非違使別當は、官位は參議(正四位下)以上の公達にして、必ず衛門督又は兵衛督を兼任するものを以て之に補せられ、通常は中納言(從三位)を以て、衛門或は兵衛の府の長官たる督を兼任せしめて檢非違使別當に親補する場合が多い(註二)。中納言にして檢非違使別當を兼ねる者が、大納言に昇進して尙この別當を兼ねることは稀有のことであり、大納言に就任する日には必ず此の檢非違使の別當職を辭することが檢非違使廳の慣例になつてゐる(註三)。參議にして檢非違使別當に補せらるゝ場合は、中納言が闕員にして、別當に其の人を得ざる時に限られる。諸大夫(從四位下)に至つては通規に非ずとされてゐたが、藤原顯頼は始めて此の例を破り、第十六代別當となつた(註四)。近衛大將(從三位)にして別當に補せられたる例としては源能有(第九代)、藤原時平(第十一代)があり、近衛中將(從四位下)にして別當に補せられたる例では、初代の別當たる文室秋津、藤原氏

宗(第四代)、源能有(第九代)があり、非參議(註五)しにして別當に補せられたるものには在原行平(第七代)がある(註六)。以上の中、文室秋津は參議左中將にて承和元年(834)正月、在原行平は非參議四位にて貞觀十二年正月、それぞれ別當に補せられたるものであるが、これは非常の例にして、爾後その例を見ざる所である。

又、參議にして檢非違使別當たる者は、中納言の補闕に當つては、第一の候補者に擧げられ、たとへ參議の定員八名中、最も年功ある上席の者と雖も、檢非違使別當を兼任する參議には一步を譲らねばならない。従つて等しく參議なるも、檢非違使別當たるには、その中より特に人選せらるゝことが必要である。又參議の大辨は參議の別當と同格なれば、中納言の闕員二名なる時は同時に之を登用するも、闕員一名なる時は年功の順に従ふ。更に參議中將にて年功を積める者は、參議の別當と中納言の闕を爭ふのであるが、後世は參議の別當を以て中納言の第一候補者とされた(註七)。

## (II)資格の二(經歷)

檢非違使廳の存在が重要視せらるゝ以上、その長官たる別當も亦重職たらざるを得ぬ。殊に身は中納言にして、國家最高行政府の太政官に列し、且つ近衛兵たり皇宮警察官たる衛門府或は兵衛府の武官を統率すべき長官督を兼ね、併せて刑事裁判並に警察の兩權を掌握せる檢非違使廳の長官別當をも兼任するに至つては、その文武兩方面に互る實權の強大なるは、天下、之に比肩すべきものがない。従つて檢非違使別當職に親補せらるべき人物は、その選擇を慎重にし、位階を厳しくして、太政官の參議以上の中より之を擇ぶを常例とすることは、既述の如くである。従つて別當たるの資格は古來嚴格を極め、或は容儀、才學、富貴、譜代、近習の五徳ある者に任すべしとなし(註八)、或は重代、才幹、成敗、容儀、近臣、富有の六條件を兼ねる者に任すべきものとなし(註九)、更に又、譜第、器量、才幹、有職、近習、容儀、富有の七徳を備ふる者に非ざれば其の人たり得ずとさ

れた(註一〇)、而して是等の條件は、その一を缺くも別當たるの資格を喪失すべきものとされたる程であつたが(註一一)、是等は要するに檢非違使別當の重職にして、何人たりとも容易には補せられざることを示すものである。但し斯く迄も檢非違使別當たるの資格を誇張することは、一面に於ては別當職の顯職(實務と實權とを有する官職)たることを物語るものではあるが、他面に於ては徒らに形式に捉れ過ぎたる名譽職に墮せる觀がないでもない。殊に王朝時代の後半以後に於て、その傾向が多く見られる様である。

### (III) 名 稱

檢非違使廳の長官にして、檢非違使を統轄すべき者を檢非違使別當と云ふ。檢非違使別當の名は廣く用ひられてゐるが(註一二)、時には檢非違使の名稱を略して、單に之を非違と云へるにより、檢非違使別當を略して、單に之を非違別當と稱することもある(註一三)。然し通常は檢非違使又は非違を省略して、單に別當とのみ稱することが多い(註一四)。官府の長官を別當と稱する例は、檢非違使廳のみに限らず、その例は少くないが(註一五)、檢非違使廳以外の官府の長官別當名を名乗る時には、必ず其の所屬官府名を冠稱すること、例へば藏人所別當の如くであるが、單に別當とのみ稱して、之に何等の冠稱をも附せざる場合には、通常、これは檢非違使別當を指すものと限られてゐる(註一六)。蓋し檢非違使別當の重職たることを物語る一例であらう。

檢非違使別當を唐名(註一七)にて大理と云ふ。檢非違使別當を大理と稱して用ひたる例も少くない(註一八)。大理は本來、唐代九寺の一なる大理寺の長官たる大理卿の略稱である。大理寺は尙書省に直屬する刑部、竝に糾察機關たる御史臺と共に司法、警察を管掌する一機關にして、罪の決定、刑名の判定、未決既決の監禁等に関する權限を有する最高法院である。我が令制官司中に、この大理寺の權限を有するものを求むれば、即ち

刑部省が之に相當する。但し刑部省の權限は、唐の大理寺及び尙書省下の刑部の兩者の權限を兼有せるが如きものである（註一九）。而して唐の大理寺の長官大理の名稱を、我が令制官司に當てはめんとすれば、刑部省の長官たる刑部卿が之に該當する。然るに刑部卿の唐名は之を刑部 尙書 と稱し、唐の刑部の長官名に相當する。従つて我が令制官司の中には、唐名大理を冠稱せしむる適當なる官府の存在せざりしが如くである。然るに偶々、檢非違使が令外官として現れ、その權限が唐の刑部、大理寺に類似するに至つて、檢非違使廳を以て唐の大理寺に該當するものとなし、従つて其の長官名大理卿の名稱を、檢非違使廳の長官別當の唐名とせるに至つたものと思はれる。職原鈔が「天長年中、唐朝ニ准ジテ使廳ヲ置ク、蓋シ是レ大理寺ナリ。」と述べてゐるのも（註二〇）、蓋し如上の意なるが故であらう。

#### （IV）別當宣（廳宣）

檢非違使別當が其の權限内に於て下す命令を「別當宣」と云ひ、又檢非違使別當が檢非違使廳を代表するが故に、別當宣を「廳宣」とも云ふ。その形式に就ては、前章に於て既に之を述べし如くである。別當宣は其の權威重く、遂には、いつとはなく勅宣に准ぜらるゝ様になり、之に違背するに於ては、違勅の罪に准じて處分せらるゝに至つた（註二一）。蓋し檢非違使別當の權勢の大なる所以を示すものである。

#### （V）別當交替による事務の引繼

別當の交替に當つては、前任者と後任者との間に、所謂事務の引繼が行はれる。それは檢非違使廳の廳舎に備付の、唐櫃の引渡によつて行はれたと云ふ。この唐櫃は檢非違使廳の事務——之を廳務と云ふ（註二二）——に關する公私の文書、訴訟文書等を保存するために、いつ頃からともなく檢非違使廳に備付けられたものである。それが歴代の別當によつて、相引繼いで行かれる間に古色化せるを以て、源基俊が第百五十一代の別當に補せ



られたる時、その父の堀川相國即ち久我太政大臣源基具が、使廳の唐櫃の見苦しきが故に、新しき立派なるものに作り代へたら宜しからうと云はれたが、故事に通ずる者があつて、「この唐櫃は上古より傳りて、その始を知らず、數百年を経たり、累代の公物、古弊を以て規模とす、たやすく改め難き」由を申し述べたので、遂に唐櫃の改造は中止になつたと云ふことが、徒然草に見えてゐる(註二三)。

#### (VI) 統 計

檢非違使別當職が何年頃まで存続せるかに就ては、大日本史の藏人檢非違使表によると、文室秋津が初代の別當として承知元年(834)に補せられて以來、二〇四名、二〇八代の變遷を経て、藤原資衡の第二〇八代の別當を以て、室町時代初期たる明德三年(1392)に終つてゐる。この間、年を経ること實に五百五拾餘年であるが、然し公卿補任によれば、その後の別當名をも載せ、應永元年(1394)の藤原重光の檢非違使別當補職以後、十數代に互つて之を明かにし、その名稱は明治初年にまで及べることは(註二四)、時に其の權勢上に消長はあれ、とにかく、王朝時代より武家時代を通じて、永く公家の一機關として存続せることを示すものである。今、便宜上、こゝに大日本史の檢非違使表により、各種の統計をとれば(註二五)、まづ出身姓氏の内譯は次の如くである。

姓 氏	員數	回數
藤原氏	146	147
源 氏	49	50
平 氏	3	5
その他	6	6

員數と同數とに相違あるのは、一人にて二回以上、別當職に就任せし者のあるを以てである。

この中別當職を重任還補せられたる者には、平時忠(79, 81, 83)、源親房

(174, 183)、藤原藤房(187, 191)の三別當、辭任して更に留任せし者には、藤原氏宗(4)、源俊實(51)、藤原成親(80)の三別當がある。又、別當在職中に卒去せし者には、藤原良繩(5)、大江晉人(8)、源當時(16)、藤原朝忠(23)、藤原齊敏(25)、源賴定(36)、源朝任(39)、藤原親朝(148)があり、同じく剃髮して辭職せし者には、藤原基氏(116)、藤原藤房(191)、源具雅(195)があり、配流せられたる者に藤原隆長(181)がある。(以上括弧内の數字は別當歴代數を示す)

更に別當在職年限の五年以上勤續せし者を列舉すれば、大約、次の如くなる。

氏 名	歴代數	在職年數	氏 名	歴代數	在職年數
文室秋津	1	8	藤原懷平	32	7
藤原氏宗	4	11	藤原經通	38	5
藤原良繩	5	5	藤原公式	40	9
源 能有	9	12	源 朝任	39	5
源 貞恒	13	11	藤原經任	42	6
源 當時	16	10	源 經成	43	14
藤原恒佐	17	12	源 俊明	49	5
藤原實賴	18	5	源 俊實	51	10
藤原顯忠	20	6	源 能俊	55	5
源 高時	21	5	藤原忠敬	57	6
藤原朝忠	23	9	藤原實行	58	9
源 重光	27	17	藤原公教	64	8
藤原公任	30	5	藤原成親	80	5
藤原齊信	31	5	藤原定房	166	5

尙、檢非違使別當職の設置せられてより以降、約五百五十餘年を経て室町幕府初期に至る間、別當に其の人を得ずしてか、或は其の他の理由によ

り、その職を空職たらしめたる期間は僅かに五回、通計十一年二月に過ぎない（註二六）。

一、承和九年——嘉祥二年（七年）  
(A.D. 842) (A.D. 849)

一、貞觀十年三月——同十一年十二月（一年九月）  
(A.D. 868) (A.D. 869)

一、貞觀十六年一月——同十六年二月（一月）  
(A.D. 874) (A.D. 874)

一、元慶元年十二月——同三年三月（一年三月）  
(A.D. 877) (A.D. 879)

一、應德元年十二月——同三年一月（一年一月）  
(A.D. 1084) (A.D. 1086)

これ等を綜合して考ふるに、別當職に其の人を得ずして、之を空職たらしめたること、五百五十餘年の間に、僅かに十一年に過ぎざることは、他官司に比して別當職の存在を重要視せられたること、従つて其の闕員を極力回避せることが窺はれ、畢竟するに、檢非違使廳が公家の執政機關として重要な存在たることを示すに外ならぬ。又別當職を五年以上勤続せし者が、二〇四名、二〇八代中、僅かに廿八名に過ぎず、他は何れも一、二年に止まることは、これよりして次の如き結論を得る。即ち別當職を五年以上勤めたる者の殆ど凡てが八十代までの別當なること、従つて政權が公家より武家に移るまでの間に相當することは、要するに檢非違使廳の存在が公家執政時代に於て、刑事裁判、警察の兩方面に於て、最も重要視せられたところの、謂はゞ檢非違使廳の華やかなりしことを意味する。政權が公家より武家へと推移するに従ひ、檢非違使廳も幕府、六波羅に壓倒せられ、僅かに公家方の刑事裁判及び警察機關としての名残を留むるに過ぎざりしが故に、その別當職も一の名譽職と化した。従つて別當職に補せらるゝことが、更に上位の官職に累進し得るの前提とも見らるゝに至れるはむしろ武家執政の世に於て、朝廷に於て著しく見られる。別當の在職期間が僅かに一、二年に過ぎざりしことも、多くは政權が公家より武家に移つ

てよりのことであり、實權を失へる檢非違使廳の別當職は、たゞ公家間に於ける官位累進の一階段をなすに止まつたと考へられよう。

### (VII)別當逸事

平安朝時代は檢非違使廳の活動力が最も盛なりしが故に、その長官別當にも功績ある傑物が多く輩出した。清和天皇の貞觀十六年(874)、別當大江晋人卿(第八代)は、從來長岡京に在りし獄舎が荒廢して、爲めに囚人の逃走者の多きを見て、この獄舎を京都に移して司獄の威嚴を保てる人である(註二七)。

別當源經成(第四三代)は後冷泉天皇の永承五年九月(1050)より康平七年十二月(1064)まで、約十五年間別當に在職し、その祖父の源重光(第二代)の十八年間の別當在職と共に、その在職期間の長きに於ては、他の別當に抜んずる者があるが、元來、荒者と云はれたる程の豪者であり、藏人頭の時には荒頭と云はれ、檢非違使別當の時には荒別當と云はれたる人だけに、その逸事も少くない。御冷泉天皇の永承七年(1052)、上東門院が東北院の供養を爲し給はんが爲めに、大赦を行はんとせられたる時、大赦發令前に海賊たりし獄中の囚人三名の手足を切斷せし爲めに、「赦行はれずば、三人死なざらまし、大赦却つて死罪なり。」と世人之を歎息せる故事がある(註二八)。又、囚人が獄舎の下を掘つて逃亡せんことを恐れ、獄舎の土間を板で固めて嚴重にしたと云ひ、十訓抄をして、「此奉公の忠さる事なれども、かやうまでの思はかりは、罪業の因にもやとよしなくおぼゆ。」と記さしめてゐる(註二九)。

又獄舎が火災に罹りし際、檢非違使が囚人を一時釋放させんことを申し出でたるに對して、「帝のあだたる犯なす間、其罪によりて禁蒙る事、人のあたふるにあらず、天のしらしむる所なり、いかでか其せめを遁れん、許し出すべからず。」と之を許可せざりし爲め、「火近づくにしたがひて、犯人晉をあげておめきさけぶ、天にも聞え地にも動くばかり也けれども、終に出

ずしてさながらやけ死にけり。」と十訓抄は其の慘狀を記してゐる(註三〇)。又、中納言に闕員を生じたる時、この經成卿自ら中納言たらんことを望み、己れは強盜百人の頸を刎ねし者故、その功によつて中納言を拜任せられたしと石清水八幡に祈願せしところ、果して中納言に就任せる由が古事談その他に見えてゐる(註三一)

名別當として後世に名を残せし人には、後鳥羽天皇の頃(1186—1198)に藤原兼光(第九〇代)がある。かの人口に膾炙せられたる腰居<sup>みざり</sup>の釜竊取事件を裁判せし人にして(註三二)、檢非違使廳の結縁經と云ふものゝ再興者であり(註三三)、廳政廳務が懈怠せる時に別當に就任し、之を勵行して使廳の再興者と云はれし人であつた(註三四)。その他、數奇者では園別當入道藤原基氏(第一一六代)は、「さうなき庖丁者なりけり」と徒然草に見ゆるを以て(註三五)、料理の達人であつたものであらう。

註一 國史大辭典、二一四〇頁。

註二 檢非違使。別當一人。參議已上。尤擇其人也。補此職之人必帶衛門兵衛督。(職原鈔、下、六四三頁)

檢非違使。別當。中納言參議中爲公達衛府督撰人補之。(官職秘鈔、下、六一四頁)

註三 仍至大納言帶此職。近代又未聞事也。仍中納言大理。任大納言之日必去其職。是流例也。(職原鈔、下、六四三頁)

註四 又昔者諸大夫不任之。而顯賴卿初任之。其後綿々歟。參議大理者。遇納言闕之時必任之。(職原鈔、下、六四三頁)

檢非違使。別當。中納言參議中爲公達衛府督撰人補之。至于諸大夫者非通規。(官職秘鈔、下、六一四頁)

註五 非參議には三種ある。その一は、參議は正四位下を以て官位相當とするが、三位以上になつても、未だ參議の職に就かざる者を云ふ。その二は、嘗て參議の職に在りし者、即ち參議の前官を有する者を云ふ。その三は、從四位にして參議に任ずべき資格を有する者、例へば近衛左中將、左右衛門督、左右兵衛督、藏人頭等を云ふ。(文學博士和田英松、修訂「官職要解」四四頁)

註六 近衛大將爲別當例（能有。貞信公）。中將爲別當例（秋津。氏宗。能有）。非參議四位爲別當例（行平）。(官職秘鈔、下、六一四頁)

註七 參議大理者。遇納言闕之時必任之。上首參議縱雖爲英雄不相爭事也。但參議大辨者勞効等同。仍或同時登用。或稀有超越之例。是可依勞之淺深歟。又參議中將勞効久者自相爭之。然而近代以別當其最也。(職原鈔、下、六四三頁)

註八 別當、大納言殊器量を撰ばるゝ職なり、白川院の仰には五ヶの徳あるものを任ずべしと仰せられけるとぞ、容儀才學富貴譜代近習也。(百寮訓要抄、六九二頁)

此の道の仰をおぶる人を見よ、五賢く身にぞ備る。(詠百寮和歌、七〇一頁)

註九 鳥羽院仰云、檢非違使別當ハ、六ヶ事ヲ兼ヌル者ヲ之ニ任ズルノ官ナリ、所謂重代才幹成敗容儀近臣富有云々。(古事談、第一、王道后宮、二四頁)

註一〇 世俗説。補大理之人。可備七徳。所謂譜第器量才幹有職近習容儀富有云々。(職原鈔、下、六四三頁)

註一一 藤中納言は右衛門の督なれど、装束きよらにせずとて、ひみの別當はかけず。(宇津保物語、藏開の上、四一七頁)

註一二 中納言兼光卿建久二年十二月廿八日に、<sup>檢</sup><sup>非</sup><sup>違</sup><sup>使</sup>別當になりて廳務ことにおこし沙汰ありけるに云々。(古今著聞集、卷十二、偷盜、二五二頁)

主上二條院ノ外舅ニテ大納言經宗、コトニ鳥羽院モツケマイラセラレタリケル、<sup>惟</sup><sup>方</sup><sup>檢</sup><sup>非</sup><sup>違</sup><sup>使</sup>別當ニテアリケル。(愚管抄、第五、二條、一三九頁)

註一三 藤中納言は衛門督なれど、装束きよらにせずとて、<sup>ひ</sup><sup>み</sup><sup>の</sup>別當はかけず云々。(宇津保物語、藏開の卷、四一七頁)

而宇都宮所衆信房殊施勳功云々。爰信房近江國領所者。去比被付<sup>檢</sup><sup>非</sup><sup>違</sup><sup>使</sup>別當家領訖。就此大功。可返給歟之由言上。(吾妻鏡、第八、文治四年五月十七日壬子條、前篇、二九八頁)

註一四 例へば續古事談、第五、諸道（二八九頁）に「別當宗忠卿」とあるのは、永久元年三月、檢非違使別當に補せられたる藤原宗忠を指し（大日本史、卷三九二、藏人檢非違使表、第十六冊、九五頁）、平治物語、卷一、信賴卿信西を滅さる議の事（九八頁）に「別當惟方」とあるのは、平治元年十月、檢非違使別當に補せられたる藤原惟方を指す（大日本史、卷三九二、藏人檢非違使表、第十六冊、一一九頁）。又、増鏡、第十七、春の別（一二〇三

頁)に「別當資朝」とあるのは、元享三年正月、檢非違使別當に補せられたる藤原資朝を指す(大日本史、卷三九四、藏人檢非違使表、第十六冊、二二八頁)。

**註一五** 之を例示すれば次の如し。

藏人所別當。非學院別當。淳和院別當。學館院別當。内堅所別當。内教坊別當。内膳別當。御厨子所別當。大司所別當。樂所別當。大學別當。

**註一六** 但別當以下爲宣下職。爲衛府之人補之。又書位署之時。不書此職號。是流例也。(職原鈔、下、六四三頁)

**註一七** 諸官の下に、異朝(唐)の官名を記したるものを唐名と云ふ。詳細は標注職原抄校本別記、卷之上に見えてゐる(皇學叢書、第四卷、四五〇——二頁)文學博士和田英松、修訂「官職要解」附録、官職唐名索引。

**註一八** 彼資朝卿は日野の一門にて、職は大理<sup>〇〇</sup>を經、官中納言に至りしかば、君の御覺えも他に異にして、家の繁昌時を得たりき。(太平記、卷一、資朝卿俊基朝臣科咎事、一二頁)

隆房大納言檢非違使別當のとき白川に強盜入にけり、(中略)大理<sup>〇〇</sup>大にあざみて、則官人に仰せて白晝に禁獄せられけり。(古今著聞集、卷十二、偷盜、二五一頁)

**註一九** 淺井虎夫「併歸使廳考」、史學雜誌、第十四編、第一號。

**註二〇** 天長年中。准唐朝置使廳。蓋是大理寺也。(職原鈔、下、六四三頁)

**註二一** 又別當宣者即廳宣也。古來被准勅宣。仍天下重之。違背廳宣者。可准違勅云々。(職原鈔、下、六四三頁)

或記云。別當宣准奉勅宣云々。雖無所見。行來爲例者。件事記世俗所稱也。廳底奉行之間。偏稱廳重之由歟。何輒准勅。宣存此意。(政事要略、卷六十一、糾彈雜事一、五三一頁)

**註二二** 中納言兼光卿建久二年十二月廿八日に、檢非違使別當になりて廳務<sup>〇〇</sup>ことにおこし沙汰ありけるに云々。(古今著聞集、卷十二、偷盜、二五二頁)

**註二三** 徒然草、第九十九段、六三頁。

**註二四** 新訂増補國史大系本、公卿補任、第五篇には、次の條々が見えてゐる。葉室長順。慶應元年五月十二日。兼右衛門督納使別當。(五六三頁)山科言成。慶應三年九月廿七日。右衛門督。使別當。後四月廿三日辭兩官。

五八六頁)

註二五 大日本史、卷三九一——三九四、藏人檢非違使表、第十六册

註二六 無別當年。自承和九至嘉祥二。八箇年。貞觀十。十一兩年。自承保四至應德三。三箇年。(官職秘鈔、下、六一四頁)

檢非違使別當不被任年々。自承和九年至嘉祥二年。八箇年。貞觀十年至次年。自承保四年至應德三年。三箇年。不任之。(任官勘例、七三一頁)

註二七 晉人卿爲檢非違使別當之以前。獄所在長岡京。件所にて獄所極に荒涼、囚人動逃吉。仍晉人卿改立此獄門之役。無逃刑人還又重恩也。修善根之人。與饗膳稱施饗。是彼時始也。(江談抄、第二、雜事、晉人卿爲別當時長岡獄移洛陽事、二三二頁)

註二八 續古事談、第三、臣節、二四〇頁、

註二九 十訓抄、下、第十、可庶幾才能事、一八三頁。

但し十訓抄には大理誰とかやとあり、源經成とは明記せざるも、次の註三〇と所同に載せ、前後の關係より源經成と推定され得る。

註三〇 十訓抄、下、第十、可庶幾才能事、一八三頁。

但し諸書所收の十訓抄には源經成を源中納言經衡卿と記しあるも、公卿補任、古事談、續古事談により、之を源經成の誤りと推定する。新訂増補國史大系本亦經成と改む。

註三一 古事談、第五、神社佛寺、九六頁

續古事談、第三、臣節、二四〇頁。

十訓抄、下、第十、可庶幾才能事、一八三頁。

但し十訓抄が經成卿を朝成卿とせるは首肯出来ぬ、新訂増補國史大系本、亦然り。朝成卿は第二十四代檢非違使別當にて、經成卿(第四十三代檢非違使別當)とは全然別個の人物である。

註三二 この事件を記したる古今著聞集の全文は次の如し

中納言兼光卿建久二年十二月廿八日に。檢非違使別當になりて廳務ことにおこし沙汰ありけるに、賤きものゝ小屋にちひきき釜のうせたりけるを。隣なりける腰居がぬすみたりけるけしきありて。贓物をさがし出したりけるに腰居申けるは。手をもちてこそゐざりありき候へ。手をはなれてはいかでか取侍べき 他人ぞ盜てをきて侍らんと陣じければ まことに申所理なりと沙汰



有けれど。ぬすまれたる者の訴訟つよくて。大理の門前に召出して内問ありけり。相論事ゆかざりけるに。別當謀をめぐらして。この腰居申所不便也。たゞこの釜をば腰居にとらすべしと仰せ下したりければ。腰居悦びてかしらにうちかつぎていざり出けるをみて。實犯なりけり。かたわの身なれども。かくしてぬすみてけるときとりて。科にをこなはれけり。ゆゑしかりけるはかりごと也。(古今著聞集、卷十二、偷盜、二五二頁)

**註三三** 使廳のけちえん經は、長保元年三月十日はじめておこなひて、其後年ごとにをこなはれけるが、絶て久しく成にけるを、建久年中別當兼光卿かたの如くおこなはれけり云々。(古今著聞集、卷二、釋教、五一頁)

**註三四** 中納言兼光卿建久二年十二月廿八日に、檢非違使別當になりて廳務ことにおこし沙汰ありけるに云々。(古今著聞集、卷十二、偷盜、二五二頁)

**註三五** 徒然草、第二三一段、一四三頁。

## 第 二 檢 非 違 使 佐

### (I)資 格

檢非違使佐は檢非違使廳の次官に相當する。左右の衛門府官人たる衛門權佐(從五位下)が、使宣旨を蒙つて檢非違使に補せらる(註一)。而して特に衛門權佐を以てし、正佐を以て之に補せざるは、蓋し正佐には別に衛門督を補佐して専ら禁門守護の職に當るべき職務あるを以てである。従つて檢非違使佐は衛門權佐が使の宣旨を蒙ることにより、之に補すことが通例であるが、稀には正佐を以て補すこともあり、平伊望の如く、近衛少將にして使の宣旨を蒙り、之に補せられしこともある(註二)。檢非違使別當は中納言又は參議等を本官とし、加ふるに衛門督或は兵衛督を兼任するが故に、檢非違使廳以外の職務も多く、従つて檢非違使廳の廳務は、檢非違使佐が別當代理として之を管掌する場合の多きことは、恰も令制官司の次官の職掌が、長官のそれと同様なるのと全く同一の理である(註三)。故に檢非違使佐に補すには、名家譜第の家柄の人を以てする(註四)。蓋し名家たるものは、所謂三事兼帶と稱して、佐にして五位藏人と辨官とを兼任するを以

てゐる(註五)。尙、防鴨河使は衛門權佐にして檢非違使を兼帶する者を以て之に任ずることになつてゐる(註六)。

## (II) 廳政廳務の執行

廳政及び廳務とは檢非違使廳が其の權限によつて爲す職權行爲及び事務の謂であり、檢非違使廳に於ける政務及び事務の謂に外ならぬ。この廳政廳務の執行は、檢非違使佐以下が之を專行し、別當は通常之に關與しない(註七)。初め檢非違使廳の廳舎が衛門府の官衙を以て宛てられし頃には(註八)、檢非違使佐も其處に於て廳政廳務を執行せるも、後に至り、檢非違使別當の館にも廳屋が設置せらるるに至つて後は、檢非違使廳の評定も此處で行はれることになつたが(註九)、然し檢非違使佐は、平時この廳屋には出勤しなかつた(註一〇)。蓋し別當館の廳屋は私廳にして、公廳に非ざるが故であるが、又檢非違使佐は所謂三事兼帶にて辨官の重職にも在つたからである(註一一)。

## (III) 佐より別當への昇進

檢非違使廳の長官別當は、使廳の職員外に之を求むるのが通例であるが特に檢非違使佐の經歷を得て、別當に昇進せし者には、大日本史藏人檢非違使表、公卿補任等によれば、藤原恒佐(17)、藤原顯賴(60)、藤原伊通(62)、藤原光賴(71)、藤原惟方(72)、平時忠(79)、等が公家執政時代に於ける例として挙げ得られる。

註一 佐二人。爲左右衛門權佐者蒙使宣旨。(職原鈔、下、六四四頁)

左衛門權佐從五位下藤原朝臣宗善爲檢非違使。(文德實錄、卷四、仁壽二年二月廿一日戊午條、三八頁)

右衛門權佐從五位下安倍朝臣貞行爲檢非違使。(同上、三九頁)

註二 爲左右衛門權佐者蒙使宣旨。正佐爲廷尉之例遷近也。又上古有蒙中少將宣旨之例。(職原鈔、下、六四四頁)

佐尉志必衛門也。但近衛兵衛遷近有例云。(同上)

權佐一人。名家譜第擇其人任之。必蒙使宣旨。(同上、六五三頁)

檢非違使佐。爲左右衛門權輩蒙使宣旨云々。(官職祕鈔、下、六一五頁)

**註三** 別當有障之時。佐奉廳事定例也云々。(延尉故實、續群書類從、第十一輯、七九三頁)

典侍從五位藤原朝臣湛子宣。奉 勅。別當中納言兼行右衛門督藤原朝臣朝忠令奏云。曰者依有身病。不從公事。仍着欽等例務。不得令催行者。使政不行。何得經日。須被病間件雜務。佐以下早勤行。苦有可定承之事。宜參藏人所。令申其由者。

康保二年五月五日 左衛門尉藤原朝臣邦保 奉

(政事要略、卷六十一、糺彈雜事一、五二〇頁)

令義解、卷一、職員令、神祇官の次官たる大副の條に、「掌同伯、餘次官不注職掌者。掌同長官。」と見えてゐる(同書、二八頁)。

**註四** 凡延尉佐者名家譜第之中清撰之職也。(職原鈔、下、六四四頁)

權佐一人。名家譜第擇其人任之。必蒙使宣旨。又必可補藏人故也。(職原鈔、下、六五三頁)

**註五** 自延尉佐補藏人。兼辨官。此爲至極之勅非。所謂三事兼帶是也。頗撰中之撰也。(職原鈔、下、六四七頁)

**註六** 若可行防河事。臨時定補其使。長官一人。多是以左右衛門權佐帶檢非違使者任之云々。(新儀式、第五、防鴨河事、群書類從、第五輯、七一頁)

**註七** 於使廳政。佐以下著行也。(職原鈔、下、六四四頁)

但尋常之政。佐以下官不申別當。任例勤行。所謂斷罪之色。不必經長官之故也。然猶同判如律者。臨拷訊之時。似可申別當也。然而廳例不申別當。佐以下行來尙矣。(政事要略、卷六十一、糺彈雜事一、五二一頁)

**註八** 檢非違使。此云使廳。本所乃靱負廳。(職原鈔、下、六四三頁)

**註九** 德大寺右大臣殿、檢非違使の別當の時、中門にて使廳の評定行はれける程に云々。(徒然草、二〇六段、一二九頁)

**註一〇** 昔者延尉佐著大理廳屋。中古以來不著之。(職原鈔、下、六四四頁)

**註一一** 標注職原抄校本、卷之下、皇學叢書本、三七八頁。

### 第 三 檢 非 違 使 尉

#### (I)資 格

檢非違使尉は檢非違使廳の判官に相當する。衛門大尉(從六位上)及び衛門少尉(正七位上)が使の宣旨を蒙ることにより補されるが、稀には近衛府、兵衛府の官人にて同格の者を之に補すこともある。定員は大尉は左右の衛門大尉各二人であるが、少尉は左右共に其の員數不定である(註一)。蓋し諸國の檢非違使として派遣せらるゝ者の多くは、この少尉を以てするが故である。

衛門大尉にして檢非違使たるものは、法律専門家たる明法道の出身者(註二)たることを要し、その家柄は、延喜以來、坂上、中原兩家とされたが、六位の殿上藏人にて檢非違使たるものは、稀ではあるが之に補せる例もある(註三)。衛門少尉にして檢非違使たるものは、明法道以外の者を以てし、之を追捕の官人と稱し(註四)、武士重代のもの及び諸家に奉仕する者の中で殊に重代器量の者を選びて之に補せられる(註五)。いづれも多くは源平の武士である。その他、犯人追捕の功により、その恩賞として檢非違使に補せられたる例もあるが(註六)、後には唯年功の故を以て之に補せらるゝに至つた(註七)。

## (II) 名 稱

檢非違使の尉は、通常その職名を云はず、單に判官(はうぐしん)とのみ稱する。例へば檢非違使尉源九郎義經と云ふ代りに、單に之を(九郎)判官義經と云ふが如き是れである(註八)。併し判官を名乗る官名は檢非違使尉のみとは限らぬが(註九)、檢非違使尉以外の場合には、必ず判官の上に所屬の官職名を冠稱することになつてゐる。例へば勘解由使判官の如き是れである。従つて單に判官とのみ云へば、それは必ず檢非違使尉即ち檢非違使判官を指すものにして、これは恰も、單に別當とのみ云へば、それは必ず檢非違使別當を指すものと同趣旨にして、檢非違使の重職たる所以を示すものである。

## (III) 叙 留

檢非違使尉の本官たる衛門尉は、位階は六位が相當なるも、その六位の

尉が五位に昇叙せらるゝ時に、若し既に衛門尉にして檢非違使に補せられたる場合には、この檢非違使の職を辭することになつてゐる。但し坂上、中原兩家の明法道の人々は、代々法律家であり、且つ使廳の廳政廳務に通曉せるが故に、檢非違使廳としても必要な職員なるを以て、たとへ五位に昇叙するも、依然、檢非違使尉として此の職に留任する。之を叙留と云ふ。この叙留は坂上、中原兩家のみの特權ではなく、例外として、特別に顯著なる功績（註一〇）によりて叙留せしめらるゝこともあるが、後には叙留の制が亂れて、何人をも叙留する様になつた（註一一）。而して此の叙留による五位の尉（尉は通常六位である）を、特に大夫尉或は大夫判官とも云ふ。源義經を大夫判官義經と云ふのは、義經が戰功により叙留せられたるが故に云ひ（註一二）、特別例外の場合である。大夫尉の名譽を擔ふ者は、最初は極めて稀であつたが、後には一時に數名に及ぶこともあつた（註一三）。

#### （IV）昇殿

朝廷に於て昇殿を聽許せらるゝことは非常なる名譽であつた。昇殿は、通常、五位以上の者に聽許せらるゝも、公卿にても昇殿を聽許せらるゝものと聽許せられざるものとがある位なれば、昇殿の有資格者は非常なる名譽であつた。然るに藏人に限つて、六位にても昇殿が聽許せらるゝが故に、檢非違使尉（叙留前は六位）にして六位の藏人（定員四名）を兼補せしめらるゝことは、全く破格の恩典に浴せるものであつた。檢非違使は五位の尉たる大夫判官（叙留せられたる者）にても昇殿は聽されず、たゞ源義經が五位の尉にて殿上人（四位、五位にて昇殿を聽許せられたる者の稱）となつたが、これも前代未聞とさへ云はれてゐる程である（註一四）。従つて叙留せられず、六位の檢非違使尉より、六位の藏人を兼補せしめらるゝことは官人美望の的であつた。この檢非違使尉にして六位の藏人となり、昇殿を聽許せられたる者を、藏人の尉或は殿<sup>うへ</sup>上の判官とも云ふ。枕草子に「六位

藏人、上の判官と打云ひて世に無く煌々しきものに覚え、里人下衆などは、此の世の人とだに思ひたらず、眼をだに見合せて、怖ぢわなしく人の云々。」と、その權勢の盛なる様子を述べてゐる（註一五）。

註一 檢非違使尉。稱之判官。左右大尉<sup>各二</sup>。左右少尉。近代員數不定。（中略）佐尉志必衛門也。但近衛兵衛邂逅有例云。（職原鈔、下、六四四頁）

註二 明法博士。明法道之極官也。中古以來。坂上中原兩流爲法家之儒門。以當職爲先途。（職原鈔、上、六三〇頁）

天安二年文德天皇勅曰。明法博士是律令之宗師也。（三代實錄、卷六、貞觀四年八月是月條、九五頁）

註三 明法道儒必任之。上古其流不一。中古以來坂上中原兩家爲法家必任之。（中略）至大尉者多分明法道所任也。但殿上人藏人爲廷尉者。間任大尉。（職原鈔、下、六四四頁）

廣元。建久二年四月一日。任明法博士并左衛門大尉。蒙使宣旨。（尊卑分脈、故實叢書、第十二冊、一四頁）

註四 檢非違使は靱負尉よりなりたるをば、追捕の官人と云ふ。（衛府官裝束抄、一檢非違使賀茂祭渡事、續群書類從、第十一輯、九三一頁）

註五 於少尉者追捕之輩各任之云々。追捕者武士重代者并諸家格勳中殊撰重代器量所補也。（職原鈔、下、六四四頁）

註六 犯人籠禁中。藏人右衛門尉源齊賴。（中略）捕進件犯人。仍齊賴蒙檢非違使宣旨。（扶桑略記、第廿九、天喜三年三月十八日條、二九三頁）

註七 眞實追捕犯人關其賞者希事歟。（職原鈔、下、六四四頁）  
尙、本稿、一五五頁、註一三に掲げたる檢非違使宣旨の請狀參照。

註八 九郎判官義經、右大將（賴朝）の勸氣の間、都をおちて西國のかたへ行ける時云々。（古今著聞集、卷九、武勇、一九四頁）

サテ賴朝ガカハリテ京ニ候コノ九郎判官。タチマチニ賴朝ニソムク心ヲヲコシ云々。（愚管抄、第五、後鳥羽、一六七頁）

八月六日、九郎義經左衛門尉に成て、即使の宣旨を蒙て、九郎判官と申けり。是は一谷合戦勸賞とぞ聞し。（源平盛衰記、彌卷第四十一、一〇二四頁）

註九 之を例示すれば、勘解由使判官、齊院判官、防鴨河使判官、造寺使判官、

施藥院使判官、修理宮城使判官等である。

註一〇 主として盜賊逮捕の功である。當時、盜賊逮捕が如何に難事なりしかに就ては、今昔物語集に屢々述べられてゐるが、同書、卷廿九、下野守爲元家入強盜語第九には、檢非違使が強盜逮捕の功により叙留せられたることが見えてゐる。(今昔物語集、九五六頁)

註一一 又六位尉叙五位時多者去之。明法道者必叙留。其外輩依殊恩令叙留也。但近代每人叙留。違舊例乎。(職原鈔、下、六四四頁)

註一二 又源平武士雖諸大夫多補之。大夫尉源義經者。剩爲昇殿近尉云々。(職原鈔、下、六四四頁)

サテ九郎ハ大夫尉ニナサレテ、生捕ノ宗盛公重衡ナド具シテ、五月七日頼朝ガリ下リケリ。(愚管抄、第五、後鳥羽、一六五頁)

八月六日(元暦元年)、九郎義經左衛門尉に成て、即使の宣旨を蒙て、九郎判官と申けり、是は一谷合戦勸賞とぞ聞し云々。(源平盛衰記、彌卷第四十一、一〇二四頁)

元暦元年八月六日。任左衛門尉。即蒙使宣旨 九月三日叙留。(大夫尉義經畏申記、群書類從、第五輯、一一五六頁)

註一三 盛重は童名今犬丸なり。下藹なれども心際うるせく、すくよかなる者なり。斯れは次第の昇進、多くは別功の賞なり。盜人射止めて近衛尉になり、仲正が郎等搦めて、大夫尉に止まる。大夫尉三人、此時始まるなり。(經古事談、第五、諸道、二八九頁)

註一四 十月十一日(元暦元年)、義經拜賀を申、拜賀とは使の宣を蒙て、從五位下に叙しける御悅申也、其夜内の昇殿をゆるさる。(中略)希代の例なれは云云。(源平盛衰記、彌卷四十一、一〇二九頁)

元暦二年乙巳正月一日。天霽。新大夫判官義經朝臣。有御出仕。(中略)是又爲殿上人。今者相同頼負佐。爲五位尉殿上人之例。未及聞。(大夫尉義經畏申記、群書類從、第五輯、一一五六頁)

註一五 枕草紙、第四十九段、にげなきもの、六〇頁。

## 第 四 檢 非 違 使 志

### (I)資格の一(道志)

檢非違使志は檢非違使廳の主典に相當する。定員數なし。衛門府官人中衛門志たるものは、必ずしも之に補せらるゝとは限らぬ。即ち檢非違使志は檢非違使廳の諸公事や事務の取扱ひを管掌するものなるを以て、主として法令、先例に通曉せる明法道の人を以て補せらるゝのが普通である。従つて明法道の者は六位の時に一旦衛門志に任官し、更に使の宣旨を蒙つて檢非違使の志となるのである。これ等の者を稱して道志と云ふ（註一）。蓋し明法道の志の略稱であるが、更に昇進して檢非違使の尉になれる者を道の檢非違使と云ひ、之を示すために白襖の袂<sup>たもと</sup>を縫ひこすことになつてゐる（註二）。

鳥羽天皇の頃（1108—1123）、道志が一人に減じ、それが所勞と稱して久しく出仕せざりしがために、使廳の廳務が澁滯して、廳政の執行が不可能になりし由が中右記に見えてゐる（註三）。又、古くは日本紀略に、長元元年（1023）五月廿六日、檢非違使廳が廳政を行ふに際して、明法道志が當時闕員なりしたため、右少史の坂合國宣を以て廳政を進行せしめたることが見えてゐるが（註四）、この右少史坂合國宣は太政官の書記にして、文書勘例を掌り、且つ非常なる年輩で、扶桑略記には「古人」と記しある位なれば、檢非違使廳の廳政廳務に幾らか通曉せるために、之を起用せるものであらうかくの如く廳政廳務の執行には道志が凡て關與し、檢非違使廳の所謂「生字引」とせられたるものにして、使廳の故實先例に通じて居た（註五）

## （II）資格の二（非成業）

明法道以外の者にして檢非違使の志に補せられたるを非成業の輩と云ふ。非成業の輩と云ふのは、明法道の輩を成業の輩と云ふに對して、明法道の家柄に非ざるものにして、明法の道を學び、その業を成す輩を云ふ。非成業の輩たる者は院の主典代、廳官（共に仙洞所の官人）、太政官の史生、藏人所の出納、諸家（關白太臣家）の下家司等の中で、譜第器用の二要件を具備せる者に限り、これ等を先づ左右の衛門府生に任じ、而して後に使の



宣旨を蒙りて檢非違使の志に轉補せしめられる（註六）。天仁三年（1110）正月十六日、左衛門府生清原忠重を志の闕に轉補せしむるに就ての請狀にも、「檢非違使府生タルノ者、奏シテ志ニ轉任セシムルハ、承前ノ例ナリ。」と見えてゐる（註七）。而して斯く府生より志に昇進せる者が、明法博士ならざる場合は、之を非成業の檢非違使と云ふ（註八）。尙、武士その他の追捕を掌る者は、この職には補されぬことになつてゐる（註九）。蓋し、これ等の者は少尉に任ずるを以てある。

註一 明法道輩六位時任衛門志。即蒙使宣旨也。（中略）凡志者奉行使廳諸公事之故。以當道爲其撰。此號道志也。（職原鈔、下、六四四頁）

註二 明法博士まで志になりて。尉になりたるをば。みちの檢非違使と云也。そのしるしには白襖のたもとをぬひこす也。（衛府官裝束抄、一檢非違使賀茂祭渡事、續群書類從、第十一輯、九三一頁）

註三 又檢非違使志資清<sup>明法博士也</sup>稱所勞由久不出仕。因之使廳之政懈怠。可被改替歟如何。人々被申云。近代道志只一人也。且可被成副歟。且可被移他官歟。（中右記、天永二年七月廿九日庚寅條、第四冊、六一頁）

註四 檢非違使廳政也。依無明法道志。以右少史坂合國宣令著行。依爲古人也。（日本紀略、後篇十四、長元元年五月廿六日庚申條、二七二頁）

註五 建武年間（1334—1337）の作と云はるゝ徒然草には、老いたる道志が五、六十年前の建治弘安の頃（1275—1287）の賀茂の祭の日に於ける、檢非違使の下役たる放免の姿面白き飾身のことを物語れることが見えてゐるから（徒然草、第二二一段、一三九頁）、餘程古いことも知つてゐたものと見える。

註六 非成業輩轉任。爲規模。稱非成業者。院主典代廳官。太政官史生。藏人所出納。諸家下家司中。詣第器用者。先任左右衛門府生。蒙使宣旨也。（職原鈔、下、六四四頁）

註七 請被殊蒙天恩。因准先例。以左衛門府生正六位上清原真人忠重。轉任志閑狀。右得忠重狀稱。謹檢案内。爲檢非違使府生之者。使奏轉任志者。承前之例也云々。（朝野群載、卷十一、二一一頁）

註八 博士にもならぬ檢非違使をば。非成業の檢非違使と云也。一切志府生をば道檢非違使と知りたる人おほかり。ひがごと也。（衛府官裝束抄、檢非違使賀茂祭渡事、續群書類從、第十一輯、九三一頁）

註九 武勇家並追捕不任之へ（職原鈔、下、六四四頁）

## 第五 檢 非 違 使 府 生

檢非違使<sup>ふしやう</sup>府生は檢非違使廳の書記にして、文書文筆等の雜務を管掌する。府生は衛門府長官たる衛門督の判授の官（判任官）にして、志以上の如く奏任の官ではない。従つて衛門督の判任により衛門府生となりし者が、後に使の宣旨を蒙つて檢非違使に補せられる（註一）。又、明法道以外の者にして檢非違使志に補せらるゝ場合には、まづ此の衛門府生に任じ、然る後に使の宣旨を蒙つて檢非違使に補せらるゝことが先例となれることは、既述の如くである。

註一 檢非違使府生。府生者非奏任之官。仍府督判授之後。申下使宣者。（職原鈔、下、六四五頁）

## 第六 看 督 長

看督長は「カドノヲサ」と訓む（註一）。職原鈔には、諸國に派遣するため看督長六十六人を補せる由が記されてゐるが（註二）、これは近藤芳樹が標注職原抄にも云へる如く（註三）、恐らく諸國檢非違使の誤りであらう。看督長は檢非違使別當に隸屬するものにして（註四）、檢非違使佐以下に於て之を補することになつてゐる（註五）。但し看督長の設置が檢非違使別當設置以前なることは、嵯峨天皇の弘仁八年（817）九月、看督長をして私かに鷹を飼養する者を禁止せしめられたることのあるを以てしても知られる（註六）。

看督長の職務は元來牢獄の管理であつたが（註七）、後には罪人移送、犯人逮捕をも管掌する様になつた（註八）。その他の雜務も多く、例へば人身に危害切迫の恐れある場合には、その特別警護に従事することもある（註九）。従つて現今の刑務所の看守、警察署の巡査に相當すべき地位に在

つたと見られよう。従つて看督長の職は檢非違使に比して品秩卑微ではあるが、公務に従事すること多く（註一〇）、又官人に隨身して地方へ赴向出張することも屢々あつた（註一一）。これが一の悪弊となり、官人が臨時の宣旨や太政官符を蒙つて城外に出張する際、その度毎に先例ありと稱して、看督長二人を任意に従者として隨行せしめたるため、看督長の職務を勤める者が少くなり、村上天皇の康保三年（966）八月十九日、別當宣を以て城外赴向出張の官人には、一人に付き看督長一人を限り従者とすべきことに制限された（註一二）。

又、看督長の職權が多方面に互るため、牢獄の管理のことは他役に事寄せて連月缺勤したり、或は引怠して數日間出勤せざりしこと等ありて、懈怠の弊害が頻出せしため、村上天皇の應和三年七月十三日、別當宣を以て嚴重に之を責め、遠國に赴向出張する者以外にして、本務たる牢獄管理に勤務せざること三度に及ぶ時は、免職處分に付して他輩の懲戒となすことを命令した（註一三）。然し、この命令も時の経過と共に効果を減じ、再び舊弊に陥りしため、一條天皇の正暦三年（992）十月十四日、長保五年（1003）十一月廿八日の兩度に互り、別當宣を以て、隨員として城外に赴向する際は、佐に其の由を上申して許可を得ることを要し、又、無許可にて、官人の隨行として城外に赴向し、本職たる牢獄管理に従事せず、又、故なくして廳政（多くは著駄政）に参加せざる場合、禁止を憚らざること三度に及ぶ者は、之を免職して傍輩の戒めとなす旨を布告するに至つた（註一四）。

註一 檢非違使、これはたいごとにあらず様あるべしとて、友をよびぐして金をばかどのをきにもたせて、薄打ぐして大理のもとへまいりぬ。（宇治拾遺物語 卷二、金峯山薄打事、二九頁）

延喜式、卷四十六、左衛門府式（一一九頁）によれば「二人看督」とあり、「看督長」とは見えぬが、これは政事要略、卷六十一（五一七頁）所收の左衛門府式、弘衛式により「看督長」とする方が正しい。従つて、單に看督と云ふのが如き職員名は、檢非違使廳には存在せざりしものと見る。尙看督長の

「長」に首長の意のないのは、現今の刑務所職員中、看守長が一の職名であり、看守なる職員の長の意ではないと同様である。

- 註二** 又當使補看督長六十六人。此爲遣諸國也云々。(職原鈔、下、六四三頁)
- 註三** 標註職原抄校本、卷下、皇學叢書本、三七四頁
- 註四** かとのをき、看督長と云ふ、職原抄に見ゆ、檢非違使の別當に附屬する者なり。(増補語林「倭訓栞」、上、五〇一頁)
- 註五** 補看督長事。左右佐已下判補。(西宮記、卷十四、臨時二、三七四頁)
- 註六** 弘仁八年九月廿三日。中納言藤原朝臣冬嗣宣。奉 勅。私飼鷹者。頃年禁斷已久。而今諸人。無有公驗。乖制恣養。宜仰看督(長)。嚴令禁察。(政事要略、卷七十、糺彈雜事十、六一三頁)
- 註七** 應和三年七月十三日。別當宣稱。左右看督長等各守次第。可勤獄直云々。(政事要略、卷六十一、糺彈雜事一、五二九頁)
- 長保五年十一月廿日。別當宣稱。(前略)又看督長職者。獄直爲最云々。(政事要略、卷六十一、糺彈雜事一、五三一頁)
- 註八** 延喜廿年十月二日。應令左右檢非違使府生將領罪人移送刑部省事。(中略)差看督長送罪人等云々。(政事要略、卷八十一、糺彈雜事廿一、六三二頁)
- 註九** 内膳典膳坂田守忠。日來依殺害之事。檢非違使付看督長令守護。(小右記、長和三年四月廿一日條、第一冊、三七九頁)
- 註一〇** 天慶五年閏三月廿八日。被別當宣稱。看督長之職。雖品秩卑微。隨公務之役逐日繁多云々。(政事要略、卷六十一、糺彈雜事一、五三〇頁)
- 註一一** 天慶五年閏三月廿八日。被別當宣稱。蒙宣旨官符出城外之官人等。宣旨之外。左右看督長等。或三四人。或五六人。任意隨身。赴向使所云々。(政事要略、卷六十一、糺彈雜事一、五二九頁)
- 註一二** 被別當宣稱。看督長是左右之間雖有員數。差雜役猶以不足。而官人等蒙臨時宣旨。每向城外。事稱有先例。官人一人隨身看督長二人。因之守直之者彌多。從役之輩猶少。自今以後。向城外官人一人率一人。但事不獲止。可過此。先申事由。而後進止之者。
- 康保三年八月十九日 右衛門少尉宮道忠城奉
- (政事要略、卷六十一、糺彈雜事一、五三〇頁)
- 註一三** 別當宣稱。左右看督長等各守次第。可勤獄直。而或寄事他役。連日不勤。

或引怠自身。數日無仕。是則重不立制。忘憲法也。自今以後。直限五日。依次可替。但向津點在京邊赴他事。役未畢者。先歸獄門須勤本直。若有急速之事。可無相替之人者。蒙處分可進退。向遠使者。不在此限。自餘不勤本直。及三度者。解却職掌。將懲傍輩者。

應和三年七月十三日 右衛門權佐平朝臣偕行奉

(政事要略、卷六十一、糾彈雜事一、五二九頁)

**註一四** 別當宣稱。尉以下官人。差遣看督長於京外。及處勘事并隨身城外之事。皆是觸。隨其許容所行也。而如聞。月來伴官人等。不觸事由。恣差遣遠所。處勘事。及隨身向城外。是尤不可然。已有舊制。何乖往規。自今以後。依省例行之。任意不得進退者。

正曆三年十月十四日

右少辨兼右衛門權佐東宮學士周防權守高階朝臣信順奉

(政事要略、卷六十一、糾彈雜事一、五三〇頁)

別當宣稱。尉以下官人。差遣看督長於京外。及隨身城外之輩。皆是觸佐。可隨許容之由。本存起請。不可乖違。如聞。依公事差遣之日。就私事役仕之間。偏任各之進退。不待佐之聽許。既謂有司。豈以無法乎。又看督長職者。獄直爲最。從政爲善。而或奉使赴畿內。涉月淹留。或點居在城外。送旬經廻。須加懲肅誠彼懈緩。受付諸事不過廿日。縱雖追喚懲納之時。自先參上。可申其狀。又京官官仕。明立刻限。至住洛都之外。難從機急之役。任意往反。大乖憲法。自今而後。無佐裁許。輒向城外。當番不勤直。無故不參政之類。不憚制止若及三度。宜從解却。俾慎傍輩者。

長保五年十一月廿八日 左衛門權佐惟宗朝臣允亮奉

(政事要略、卷六十一、糾彈雜事一、五三一頁)

## 第七案主長

案主長は「アンジュノヲサ」と訓む。檢非違使廳の公文書の保管を職務とし、才幹ある者に非ざれば勤仕し難い役である。村上天皇の天曆六年(952)、この稱を勤める適當なる人を缺きしたため、この職を置かずして空職のまゝになし置きたるところ、使廳の文書が紛失して、廳務の處理が弛緩するに

至つたことがある（註一）。

元來、案主と云ふのは院司や家司に屬する御厩別當の下役のことである。諸國にも郡司の下に案主を置いた。檢非違使廳に於ても之を採用し、その職務の關係上、道志の下に配置せるものと思はれる。延喜式によれば、案主が一人にして其の長のことは見えざるも（註二）、後に案主の員數が増加せしため、その長として案主長を置きしものと思はれる。一條天皇の頃（987—1011）には、廳政廳務が多忙を極めしため、一時案主長を二人置いたが、檢非違使は協議の結果、案主長二人を置くことは一時的となし、之を永例とせぬことに決定した（註三）。

註一 被別當宣云。案主長。是可掌使廳文以傳者。非有才用。難可勤仕。如聞者。依無其人。不置併職。文書紛失。事自懈緩。宜以左右門部有才幹者一人。爲件公文之預。令得勸據之使者。

天曆六年十一月廿八日

左衛門少志笛有忠奉

（政事要略、卷六十一、糺彈雜事一、五二九頁）

註二 凡檢校左京非違者。佐一人。尉一人。志一人。府生一人。火長九人。（二人看督。一人案主。府生從一人。四人佐尉從各二人。志一人）（延喜式、卷四十六、左衛門府、一一一九頁）

註三 私案。檢件等式。看督二人。案主長一人也。而今置案主長二人者。依政劇人少。使等權議所置不可爲永例。（政事要略、卷六十一、糺彈雜事一、五一八頁）

## 第 八 火 長

火長は「クワチャウ」と訓む。檢非違使廳の下役であり、新野問答には、「火長、檢非違使廳之下輩之官人に候。」と見えてゐる（註一）。看督長が檢非違使別當の從者なると同様に、火長も亦檢非違使別當の隨身である（註二）。衛門府の下役たる衛士の中より選抜するものにして、政事要略によれば、衛士は、元來、兵士にして京都に赴向する者を云ひ、この兵士十人を以て一火となし、各火毎に白丁五人を採用して火頭とせしことが、軍防令に見ゆ

るを以て、之に倣つて火長と命名せるものならんと云つてゐる（註三）。然し又、別に火長と云ふ名稱は、看督長案主の總稱であるとも云はれてゐる。蓋し、これ等は火長の中より選拔せしものなるを以てである。即ち左衛門府式には火長九人の中、二人看督、一人案主を擧げてゐる（註四）。

註一 新野問答、新井白石全集、第六、國書刊行會本、五六三頁。

くわちやう、火長也、檢非違使に屬する者なり、（増補語林「倭訓栞」、上、七〇六頁）

註二 凡檢非違使別當充隨身火長二人。（延喜式、卷四十六、左衛門府、一一一九頁）

註三 私問。以衛士號火長。名其情有所見哉。答。不見明文。但可准的。軍防令云。兵士十人爲火。又云。兵士向京者名衛士。火別取白丁五人充火頭。賦役令云。仕丁者每五十戸二人以一人充廝丁。義解云。謂。廝猶使。言給使於汲炊。即與火頭同也者。所稱衛士。本是兵士也。今爲衛士之首。自得火長之名歟。（政事要略、卷六十一、糺彈雜事一、五一八頁）

註四 火長九人。（二人看督。一人案主。四人佐尉從各二人。志從一人。府生從一人）（延喜式、卷四十六、左衛門府、一一一九頁）

## 第九 放 免

放免は「ハウベン」と訓む。看督長に隸屬する使廳の配下である。盜賊の逮捕、囚人の拷問、流人の配所への護送等の低級なる雜務に従ふ。元來、一度牢獄に入りし輕罪の輩で放免せられたる者を、更に使廳に於て使用せる者なるを以て、放免の名がある（註一）。

放免を又別に、走り下部（註二）、或は單に下部（註三）とも云ふ。走り下部は、追ひ使はれて馳け走るより來たる名稱であらう。

凡そ、罪輕き者、小惡事の常習者を放免して、之を犯人の探索、逮捕に逆用することは、謂はゞ毒を以て毒を制せんとするの譬の如く、犯罪捜査の方法としては極めて幼稚なるものではあるが、而も極めて普通に行はるゝことである。蓋し惡事の方面に通じ、惡人輩の内情を能く知れるが故に、

極めて好都合なるを以てである（註四）。

併し元來が卑しい者なるが故に、亂暴な行爲も多く、賀茂祭に贓物を染めたる身分不相應の綾羅錦繡服を着用して行列に参加したり（註五）、三條天皇の頃（1012—1016）、京中を婦女が笠を被つて通行することは禁制せられるにも拘らず、その笠を切り破つたり（註六）、堀河天皇の頃（1087—1107）、檢非違使に従つて盜賊逮捕に向へるついでに、附近の家へ竊盜に押入つたり（註七）、檢非違使廳に仕へながら、人家へ強盜に押入つて逆に捕へられたり（註八）、崇徳天皇の頃（1124—1141）、東大寺の聖賢僧正五師子如意が放免のために盗まれたり（註九）、堀河天皇の頃（1087—1107）、備前役夫工催神民が下部のために殺害されたこと等が（註一〇）、諸書に見えてゐる。

註一 其男ノ本ハ侍ニテ有ケルガ、盜シテ獄ニ居テ後、<sup>〇</sup>放<sup>〇</sup>免<sup>〇</sup>ニ成ニケル者也ケリ（今昔物語集、卷廿九、詣鳥部寺女値盜人語第廿二、九七六頁）

註二 別當左兵衛督資明、<sup>〇</sup>走<sup>〇</sup>り<sup>〇</sup>下<sup>〇</sup>部<sup>〇</sup>とかやいふ者八人、たちはみなしろがねのべたるにやとみゆるに、鶴の丸をきにみがきたるこのましようきよげ也。（増鏡、第十六、秋のみ山、一一九六頁）

註三 廳ノ<sup>〇</sup>下<sup>〇</sup>部ト云フ放免共ニ會ヌ云々（今昔物語集、卷十六、仕長谷觀音貧男得金死人語第廿九、三六九頁）

放免、檢非違使廳之下部を放免と申候也。（新野問答、新井白石全集、第六、國書刊行會本、五六四頁）

註四 後鳥羽天皇の頃（1186—1198）、大殿小殿と稱せらるゝ二人の強盜が、全國を荒し廻つたことがあつた。當局の懸命なる追及の結果、大殿が逮捕せらるるや、小殿は進んで自首して出た。この小殿は、西國にて海賊、東國にて山賊、京都にて強盜、地方にて追刺を行ひし豪賊なりしが、俄かに佛心を起し過去の罪業に行末悲しくなり、捕縛せられて恥を晒すよりは、自首して處刑せられたる方が男らしいと考ふるに至れる者であつた。小殿が檢非違使廳に於て、檢非違使の高倉判官章久の手により審理せられし際の陳述に、「若し萬が一、命を生けて召しもつかはれ候はゞ、別の奉公には餘黨其數多ク候を、一々からめさせ參らせん云々、」とあつたので、その希望を容れて、作餘まで



給與して放免に採用せし所が間もなく、直木の鳥の十部と云ふ、年來、檢非違使廳に於て捜査中の兇賊を逮捕し來れる由が古今著聞集(卷十二、偷盜、二五七頁)に見えてゐる。

**註五** 被命云。放免賀茂祭著綾羅事。被知哉如何。答云。由緒雖尋未辨。被命云。賀茂祭日於棧敷。隆家卿問齊信卿云。放免着用綾羅錦繡服。爲檢非違使供人何故乎。戸部答云。非人云故不憚禁忌也。公任卿云。然者雖致放火殺害。不可加禁遏歟。他罪科者皆加刑罰。於着美服條。有指證文歟。齊信卿答云。贓物所出來物を染濯成文衣袴等。件日掲焉之故。所令着用歟。四條大納言頗被甘心云々。(江談抄、第一、公事、賀茂禁放免着綾羅事、三一頁)

**註六** 今朝四條大納言密々示送云。使廳事極多奇事。是兼案也。面可談說者。誠雖卑公不從諷諫歟。使廳狼藉不如今時。看督長放免等。橫行京中。切市女笠。又別當舍人等同切云々。市女笠非禁制物。假令雖禁物。看督長放免別當舍人破却。太奇恠也。別當年齒極若。又無才智。暗夜々々又暗夜也。京畿之間。昏亂無度。使鼻如口。聖人鑒戒百已。(小右記、長和三年四月廿一日條、第一冊、三七九頁)

**註七** 今日物忌也。仍不出行。巳時許爲隆來。御使也。此間檢非違使郎等追捕間近邊家取物之由。其有聞。仍被召問之處。件事實也。仍件檢非違使等。有可沙汰之事也。(殿曆、長治元年七月廿一日庚申條、古事類苑、官位部、第二冊、一一七頁)

**註八** (前略)而ル間東ノ獄ノ邊近キ所ニテ有ケレバ。獄ノ邊ニ住ム放免書數相ヒ議シテ。強盜ニテ□ガ家ニ入ラムト思ケルニ云々。(中略)夜明テ見レバ。皆目ヲシバ叩テ被縛付テ有リ。此ル奴原ハ獄ニ禁ジタリトモ。後ニ出ナバ定メテ惡キ心有ナムヤト思ケレバ。然リ氣無クテ人ニモ不知セズシテ。夜ニ入テ竊ニ外ニ將行テ皆射殺サセテケル。然レバ強盜シニ其家ニ行テ。被打殺タル様ニテナム止ニケル云々。(今昔物語集、卷廿九、放免共爲強盜入人家被誦語第六、九五——四頁)

**註九** 別當談云。去追捕間。當講惠曉房所安置三東大寺聖寶僧正五師子如意。爲放免被盜取給。給佛師頼如者尋取出。被返送本寺。師子文難被破。如元打付云々。(長秋記、大治四年十二月六日庚辰條、第一冊、三三二頁)

**註一〇** 召檢非違使吏部保成。付申文獻別當。是備前役夫工催神民。爲廳下部被

---

殺害事。依上卿命也。(中右記、寛治八年十二月四日條、第一冊、二一〇頁)

## 結 語

以上を以て「檢非違使の研究」を終る。説く所は全七章。今、その各章毎の要旨を略述すれば、次の如くである。

第一章は檢非違使概説とも云ふべきものにして、檢非違使全般に亙る概略の説明である。通常、檢非違使と云へば、それは京都に於ける檢非違使を指し、藏人所、勘解由使等と對比せらるゝものであるが、檢非違使は全国各地に設置せられたるものなれば、先づ以て、その意義を明かにし、次いでその職掌、資格、地位等に就て述べた。而して檢非違使の有する特殊性は他の官職に見られざる所あるを以て、之を本章最後に一言觸れることゝした。

第二章は檢非違使廳の概説である。檢非違使の研究は、畢竟、京都に於ける檢非違使の研究が中心なるを以て、之により構成せらるゝ檢非違使廳の實體を一應明かならしめんとせるものである。就中、檢非違使廳の地位は、之を他官司と比較することにより、前章述ぶ所の、檢非違使の特殊性を明かならしむるものである。

第三章は檢非違使の設置に關する年代、設置の理由等に關する考察である。檢非違使創設の年代は莫然と弘仁年間ならんとの通説に對し、些か其の範圍の縮少を試みた。又、檢非違使廳の創設年代の考察は、檢非違使のそれ以上に困難にして、公卿補任、吾妻鏡に根據を求むる從來の承和元年説には敢て反對するものではないが、それのみを以て満足すべきでもない。よつて些か唐突の嫌ひはあるも、檢非違使廳の存在を實質上の存在と形式上の存在とに分けて考察して見ることゝした。前者は承和元年説を採るも、後者に至つては頗る大膽ではあるが、本文述ぶるが如く、寛平六年説を採つた。

第四章は檢非違使の沿革史の略述である。京都に於ける檢非違使の沿革には、檢非違使廳の變遷を中心とする見方と、政權の推移を中心とする見方とが採らるゝを以て、その兩者に就て述べた。但し武家執政時代以後の

不詳なるは、史料の不足に因ると共に、檢非違使自體、社會との交渉が疏隔せるにも因るものである。

第五章は檢非違使の權限に關する考察である。これは京都に於ける檢非違使、換言すれば檢非違使廳を中心として述べたるものにして、その他の檢非違使の權限に關しては、既に第一章に於て之を述べたるを以て省略した。檢非違使の權限は頗る廣汎に互り、一々枚舉するの違なきが如くであるが先づ之を王朝時代、武家時代の二期に分ち、この兩期に就て、各別に考究した。王朝時代に於ける檢非違使の權限は、之と大別して、司法警察權、糾彈權、裁判權、執行權、行政警察權の五種と爲し、その各々に就き、之に關係ある令制諸官司との相互關係に就て一言した。之に就ては、拙稿「廳例の研究」に於ても、多少之に觸れたるを以て、更に此處に述ぶるは重複せる個處あるも、序言に述べし理由に依り、此處にも一節を設けた。武家時代に於ける檢非違使の權限は、先づ對幕府關係を明かならしめ、相互の管轄に就て述べた。尙この時代に於ては、檢非違使廳が民事裁判にも關與せることが多く、殊に南北朝時代に於ける土地處分問題に就ては、可成り活潑に活動した。之に關する好個の史料は、即ち本文記載の泉涌寺文書である。

第六章は檢非違使の職制に關する考察である。拙稿「廳例の研究」序言中にも述べし如く、史料の名こそ残れ、實物無き今日、檢非違使の權限、職制を明かならしむることは容易ではないが、殘存せる斷片的史料に基き、定員數、補任、派遣、廳令等に關し、或る程度の職制を見出し得たものである。

第七章は檢非違使廳の組織に關する考察である。即ち檢非違使廳の構成員の各々に關する考究にして、この中には、當然、檢非違使の職制として前章に擧ぐべきものもあるが、便宜上、本章に於て述べることにした。

檢非違使研究の實益は、之によつて、刑事裁判、警察等に關する令制諸

官司の權限の變遷消長等を明かならしむることに在る。即ち彈正臺、刑部省、衛府、京職等が今の官制により附與せられたる監察、裁判、警察に關する權限が、漸次、その實權を喪失し、是等の諸權限が悉く檢非違使の掌中に歸する所に興味がある。この事は、畢竟するに、唐制の模倣に重きを置く、形式化されたる諸制度が、國內の實情に即して新設せられたる、謂はゞ我國獨自の制度に取つて代られたることを意味する。

檢非違使を現今の諸制度の上より考察すれば、檢非違使は司法警察官、行政警察官、檢事、判事、行刑官等を一身に兼ねたるが如き觀があり、檢非違使廳は警視廳、檢事局、裁判所、刑務所を綜合せるが如き規模を有するの觀がある。従つて檢非違使は王朝時代に於ける此の方面の實權を悉く掌握せるものにして、一職能く萬掌することを得た。かゝる制度の出來するに至れる理由は、云ふ迄もなく、この方面に關する令制官司の制度が、各官司毎に異なる權限を有し、犯罪の摘發、犯人の逮捕より、裁判、刑の執行に至る迄の過程が、各異なる官司の手を経ることを要するが故に政事簡要を貴ぶ藤原氏の執政方針に適應せざりし因り、一職以て萬掌の權限を有する官司が歡迎せらるゝに至つた。檢非違使、即ち其の一例にして、宮中政務一切を管掌せる藏人所の出現と共に、王朝時代に於ける今の制度を根柢より崩壊せしめたるものである。但し檢非違使、藏人所が其の設置當初より、かゝる廣汎なる權限を有せるものに非ざること、既に第二章に於て述べたるが如くである。畢竟、檢非違使が斯く迄も其の權勢を振ふに至りし所以のものは、形式偏重の令制諸官司の老朽無能化が、社會の實情に即應して設置せられたる新進氣鋭の檢非違使に壓倒せられたるが故であるが、他面には、令制諸官司には設定當初より官制により、其の權限が一定せるに反して、檢非違使は設置當初より斯かる規定なく、必要に應じて其の權限が宣旨を以て規定せらるゝにより、漸次その權限を擴大強化して、他の令制諸官司の權限を漸次蠶食するに至れることも考へられる。

權勢の消長は、常に沿革の上に現はるゝものにして、檢非違使の最も隆盛なりし時代は、即ち設置當初の弘仁年間より檢非違使廳の單獨制となれる天曆年間に至る迄の約百二十五年の間に於て、權勢の伸張發展時代であつた。檢非違使が他官司の權限を蠶食し、檢非違使廳なる一官府に於て、警察、裁判、行刑を管掌するに至れるのは、實に此の時代であつた。天曆以後、鎌倉幕府開設に至る迄の約二百三十五年間の檢非違使廳は、京都に於ける唯一最高の警察機關、裁判機關にして、時に無暴、無能の憾み無しとはせざるも、此の時代を通じて、能く其の機能を發揮せるものであつたが、之には前時代には豫想だにせざりし武士の檢非違使登用による力の、與つて大なることを看過することは出来ない。武家執政時代に入るや、政治の中心は朝廷より幕府に移れるを以て、檢非違使廳の存在は著しく其の價值を低下せしめた。然し乍ら、王朝時代に振へる權勢の餘波は容易には消滅せず、依然、公家の警察機關、裁判機關として、明治に至る迄、その名を失はなかつた。吾人は檢非違使を通じて、如何に官制の整備せる官司と雖も、それが社會の實情と相容れざるに至る時は全く無力にして、之に反して、整備せる官制が與へられずとも、それが社會の要求に應じて出現せるものなる時は、前者に代る後者の功績の多大なることを知り、之によつて、如何に整備せられたる國家統治の機關と雖も、時の流れには抗し得ざるの事實を見るのである。